

# 羊 齒

第32号  
支部結成50周年記念号

2006 (平成18年)  
新ハイキングクラブ 横浜支部

### 誌名「羊歯」(しだ)の由来

SHC横浜支部の文集「羊歯」は、支部が発足して、まだ毎月の会報もないころから年に数回発行され、いわば会報の代わりのような役割を果たしていたようです。会報が初めて発行されたのは昭和34年11月で、その後も「羊歯」は年に数回発行されてきました。

最近では5年毎の記念誌として発行されています。

「羊歯」の誌名の由来は当支部設立者の一人[浜野条治]氏によって命名された。これは「しだ」の研究者である[行方沼東]<sup>なめかたしょうとう</sup>氏を友人にもつ浜野氏も山旅の毎に「しだ」を収集していた。これにあやかって「羊歯」とした。

# 羊 歯

(し だ)

第 32 号

支部結成50周年記念号



2006年 (平成18年)

12月 発行

新ハイキングクラブ 横浜支部

# 支部創立 50 周年を祝う

澤野 正明

新ハイキングクラブ横浜支部が、この度 50 周年を迎えることになりました。誠におめでとうございます。

50 年といえば半世紀、太平洋戦後の復興期から安定期にかかる昭和 31 年に支部は誕生しております。その頃は現在とは違い、登山用具はもちろん食料の調達も大変な時期であったと記憶しております。この様な時代でも、山への情熱を持った方々が集まって支部を作られたものと推察致します。

昭和 32 年の新ハイキング誌第 42 号を見ますと、25 名の方々のお名前が記載されておりました。それから現在までの長きにわたって支部の存続、発展に尽力されてきた先輩諸氏及び、現在までの会員の皆様に感謝を申し上げる次第でございます。

現在までの山行も、これからの計画を見ますと 1500 回を越え、50 周年記念山行までには 1520 回位になるのではないかと推測しております。

50 年の間、山行での大きな事故らしい事故はあまり聞いておりません。これも皆様方が安全登山を行うと云う、信念と認識を持って行動されていることに尽きると思います。

現在、どこの山の会も高齢化が進んでおります。当支部も同様です。山で見かける人達を見ても年配者が多く、この問題は避けて通れません。

従ってこれからの山行も、健康を維持するために、例えば温泉を巡り、それに付随するハイキングとか、いろいろと趣旨を替えた計画を立案され実行することも期待しております。

もちろん今までのような山行計画もお願いします。

体力も衰えて参ります。自分に合った無理をしない安全山行に参加しようではありませんか。今後も 55 周年、60 周年と永きにわたって、皆さんとご一緒に横浜支部が歩んで行くことを期待してお祝いを申し上げます。

# 横浜支部 “ 創立 50 周年 ”

誠におめでとうございます。

この間この長い年月にわたり支部長をやっていた方々をはじめ役員や、これを支え続けてこられた支部会員の皆様、そしてご家族の方にも敬意を表させていただきます。

横浜支部がスタートされたのは昭和 31 年 (1956 年)。新ハイキングの支部は今 27 支部ありますが、最初にできた 6 つの支部の 1 つとしてだったと懐かしく記憶しています。

昨年創立 55 年記念を祝った新ハイキング社もやっと 6 年目に入り創世記から発展期に差し掛かったような時代だったと思います。

私も今年 98 を越し、長く山とともに過ごしてきた楽しい思い出を山の本に囲まれながら毎日楽しくすごしています。私の人生は一言で言えば「いい山、いい友、いい人生。」だったと言えらると思います。

どうか後に続く皆さんも、楽しく健康で充実した人生のために、大いに山から学び、山を愛していただきたいと願っています。

安全で心豊かなハイキングを楽しむにはそれなりの学習をし、グループで歩くのが良いと考えています。これからも「読んで、登って、仲間ができる」の新ハイキングの役割はますます大切であり続けると考えています。

横浜支部のみなさんが今後とも知恵を出し合って、生き生きと楽しく安全な山行を広めて実施できるように協力しあっていただきたいと願っています。

横浜支部の今後のますますの発展とみなさまの一層のご活躍・ご健康を願って止みません。

新ハイキングクラブ会長 小林 玻璃三

# 横浜支部創立50周年行事について

山田 和子

平成18年の秋は当支部が満50歳を迎える記念すべき年にあたりますので、早くから下記のような種々の準備を始めました。

## A. 準備段階

平成16年6月に当時の支部委員会の中で、50周年準備委員会を組織しまた、支部会員に対してアンケートを行い、希望を取り纏めた結果も加えて、主な事項として、下記を検討・実行することとしました。

1. 集中登山を平成18年10月に「金時山」を対象に行う。  
細目は「実行委員会」を組織して、検討、実施する。
2. 「県内の山50山」（P:115 参照）を選定し、支部山行の中に取り入れる。
3. 記念品を配布することとし、品目を検討した結果、スタッフバッグを各人に配布する。
4. 会報「羊歯」を平成18年12月頃に発刊する。  
準備・発刊は「編集委員会」を組織して行う。

この後、各委員会での活動が続いて、下記の諸点の実行に漕ぎ着けることができました。

## B. 実行段階

1. 金時山への集中登山は10月28～29日に5コースに分かれて行われ、総勢42名が参加し各コースのゴミの収集を行って、きれいな山の維持に協力をしました。（詳細はP:117 参照）
2. 50山は支部山行計画に組み込まれ、順次踏破中です。
3. 記念品は9月と10月の例会席上にて配布されました。
4. この会報「羊歯」第32号は、このように発行することが、できました。

50周年関係の諸行事が無事終了（一部は継続中）したことは、各委員、支部会員及び関係者のご努力によるものと、深く感謝しております。

## 支部創立 50 周年記念号「羊歯」 発刊に寄せて

芹沢 隆久

私の書棚には昭和 57 年（1982 年）発行の第 26 号から第 31 号（2001 年）まで 6 冊の「羊歯」があります。そのどの号を読み返してみても、当時の会員の方々の山への想い、愛がひしひしと感じられます。各人にとってその人生においても「山」というものが如何に大きな比重を占めているかが伝わってきます。云わばこれは会の歴史そのものであり、また個人史の集大成ではないかと思えます。偶然ですがその各号に自分の拙文が掲載されており、下手ながらもその当時の山への想いが綴られていました。

今回の「羊歯」の発刊に関しましては、私はまとめ役として名を連ねたに過ぎませんが、各編集委員の個性、特性が遺憾なく発揮され、それぞれのアイデアを持ち寄り何回も討議検討し、それに支部会員の皆様のご協力を戴いて、支部創立 50 周年の節目に相応しい「羊歯」が出来たと自負しております。（各編集委員の思い、苦労談は編集後記をどうぞお読み下さい）現 66 名の会員のうち実に 42 名の方々が投稿してくれましたことはまさに画期的なことでした。多くの方が参加してくれましたことは本当に嬉しい限りです。

今号の特徴としては、時代の趨勢と共に、印刷もガリ版、ワープロ、パソコンと変わってきましたが、手作りの基本は変えず、従来にない試みとしまして、カラー写真及び絵の欄を設けたこと、そして既に退会はしていますが、先輩であります OB,OG の方々の投稿も載せたことです。突然で無理なお願いにもかかわらず、快くご寄稿下さった 8 名の方々には心より感謝申し上げます。

最後に新ハイキングクラブが益々発展し、お互いに思いやりを持って、楽しい山行が続けられ、またこれまでこの「羊歯」の編集に携わった歴代の方々に敬意を表しますと共に更に号を重ねていくことを願ってやみません。そして皆様の「山」への想いを更に募らせる一助になれば幸いです。

# 羊 歯 (第32号) 目 次

支部創立50周年を祝う	……………	支部長	澤野 正明	
横浜支部 創立50周年 誠におめでとうございます	……………			
	……………	新ハイキングクラブ	会長 小林 玻璃三	
横浜支部創立50周年記念行事について	……	副支部長	山田 和子	
支部創立50周年記念号「羊歯」発刊によせて		副支部長	芹沢 隆久	
ギャラリーへのご案内		(支部会員の集合写真と、投稿絵画および写真)		
横浜支部、皆様の思い出	……………	OG	渡部 詔子	…… 1
50周年によせて	……………	OG	石川 信子	…… 2
私と山との関わりあいについて	……………	OG	古谷 芳子	…… 5
”山”への誘いは限りなく	……………	OB	高橋 繁勝	…… 6
♪上を向いて歩こう♪	……………	OG	村田 真理	…… 9
思い出のガッシャブルムⅡ峰	……………	OB	高橋 巖	…… 10
アクシデント	……………	OB	太田 繁信	…… 12
支部の思い出	……………	OG	鎌田 美英子	…… 14
カラコルム連峰 (短歌)	……………	OG	古谷 芳子	…… 16
無 題 (川柳)	……………		長谷川 美江	…… 17
無 題 (詩)	……………		石部 正子	…… 18
北海道の旅	……………		小倉 靖子	…… 19
故郷 小樽の天狗山に48年ぶりに登る	……………		竹尾 亮三	…… 20
中国、花の四姑娘山	……………		祖父川 精治	…… 22
私的関西旅行	……………		稲垣 裕	…… 24
山旅；思い出館	……………		茂木 武	…… 26
沖縄最高峰・於茂登岳	……………		栗城 良	…… 29
朝日連峰山ある記	……………		澤野 正明	…… 30
祖母山	……………		服部 八重子	…… 33
離れ島停滞の思い出	……………		小池 廣治	…… 34
初めての山行	……………		和智 邦久	…… 37
中国世界自然遺産九寨溝・黄龍を尋ねて	……………		丹下 友恵	…… 38
集中登山の金時山	……………		服部 八重子	…… 40
アルプス交響曲	……………		細井 陽子	…… 41
深田久弥像の一側面	……………		春日井 孝行	…… 42
パソコン・デジカメ・インターネット	……………		齋藤 郁夫	…… 44
わが登山人生	……………		金本 勲	…… 46
岐 路	……………		岡野 達	…… 48
春爛漫 (スケッチ)	……………		岡野 達	…… 49
富士スバルラインによせて	……………		佐野 淳一郎	…… 50

思い出すままに	.....	北村 襄	.....	53
徒歩日本横断の進め方	.....	茂木 武	.....	54
山女を休業して	.....	谷 眞理子	.....	56
皆様と歩く楽しい思い出	.....	鶴巻 勉	.....	57
天城万三さんの手紙	.....	熊谷 松治	.....	58
横浜支部の思い出を辿りながら	.....	石原 弘之	.....	60
今が一番輝くとき	.....	一丸 幸夫	.....	62
茨城一人の山	.....	小澤 勝太郎	.....	63
車窓の山旅記	.....	芹沢 隆仙	.....	64
年齢を重ねて想うこと	.....	有山 好子	.....	70
シリングル大草原を吹きわたる風	.....	玉川 恵子	.....	71
山 哭	.....	中村 純平	.....	72
「マナー」をどう考えましょうか？	.....	渡部 道明	.....	74
横浜支部との出会い	.....	佐々木 静子	.....	76
雪山への誘い	.....	小笠原 利満	.....	77
私と推理小説	.....	茂木 武	.....	78
靴を磨く	.....	井上 忠秋	.....	80
私の名峰	.....	花島 幸子	.....	81
夢の途中	.....	飯島 和子	.....	82
思い出の山々	.....	鎌田 善子	.....	84
古 参	.....	横山 勝利	.....	87
私の赤線病	.....	齋藤 郁夫	.....	88
避難小屋に泊ろう	.....	春日井 孝行	.....	92
近 況	.....	星野 喜美子	.....	95
マップの思い出	.....	御園 培博	.....	96
碁石海岸-五葉山-浄土ヶ浜	.....	熊谷 松治	.....	98
浦田さんの思い出	.....	鎌田 善子	.....	100
藪さん さようなら	.....	丹下 友恵	.....	101
過去10年間の横浜支部山行実績を見る.....	.....	池田 邦雄	.....	102
平成13年度～18年10月迄の横浜支部山行実績.....	.....	池田 邦雄	.....	106
県内の山 「50山」 の一覧表	.....		.....	115
50周年記念集中登山 金時山 報告 その1.....	.....	岡野 達	.....	116
50周年記念集中登山 金時山 報告 その2.....	.....	井上 忠秋	.....	117
横浜支部小史	.....	熊谷 松治	.....	118
支部会員住所録	.....		.....	120
編集後記	.....		.....	123

## ギャラリーへのご案内

### A. 集合写真

G-1	2006. 10. 28	50周年記念集中山行 金時山 山頂直下にて
G-2	2006. 10. 11	10月例会にて
G-3	2006. 11. 8	11月例会にて
G-4	2006. 10. 28	50周年祝賀会 乙女山荘にて

### B. 投稿絵画・写真

G-5	油 彩	上：瀬沢の秋 下：早春の御嶽山	中村 純平
G-6	水 彩	上：2006-6 南仏ピレネー ゴーブ湖 下：2005-10 草津白根山 入山馬道	熊谷 松治
G-7	水 彩	上：2002-7 燕岳より槍ヶ岳を見る 下：1999-7 長者ヶ岳より富士山	飯島 和子
G-8	水 彩	上：2005-5 至仏山 下：2005-4 イギリス館	川野 奈津子
G-9	写 真	上：月と富士山 (塔ヶ岳山頂より) 下：富士山 (鍋割山頂より)	御園 培博
G-10	写 真	上：2005-10-10 「美しさとの遭遇」 カナディアンロッキーの山々とハーバート湖 下：2005-11-2 「山々の頂点に立つ富士山」 雲取山より	竹尾 亮三
G-11	写 真	上：2003-11 カラパタール直下からのエベレスト 下：2003-11 仏塔とアマダブラム峰	齋藤 郁夫
G-12	写 真	上：2003-11 雲とヒマラヤ巒の無名峰 (チュクンにて) 下：2003-11 トレッキングも終了間近 (ルクラ近郊)	

(集合写真は2Lサイズに、絵画は写真に撮影後GLサイズにプリントし、  
投稿写真はそのサイズのままを、カラーコピーしたものです。)



2006.10.28 50周年記念集中山行 金時山 山頂直下にて

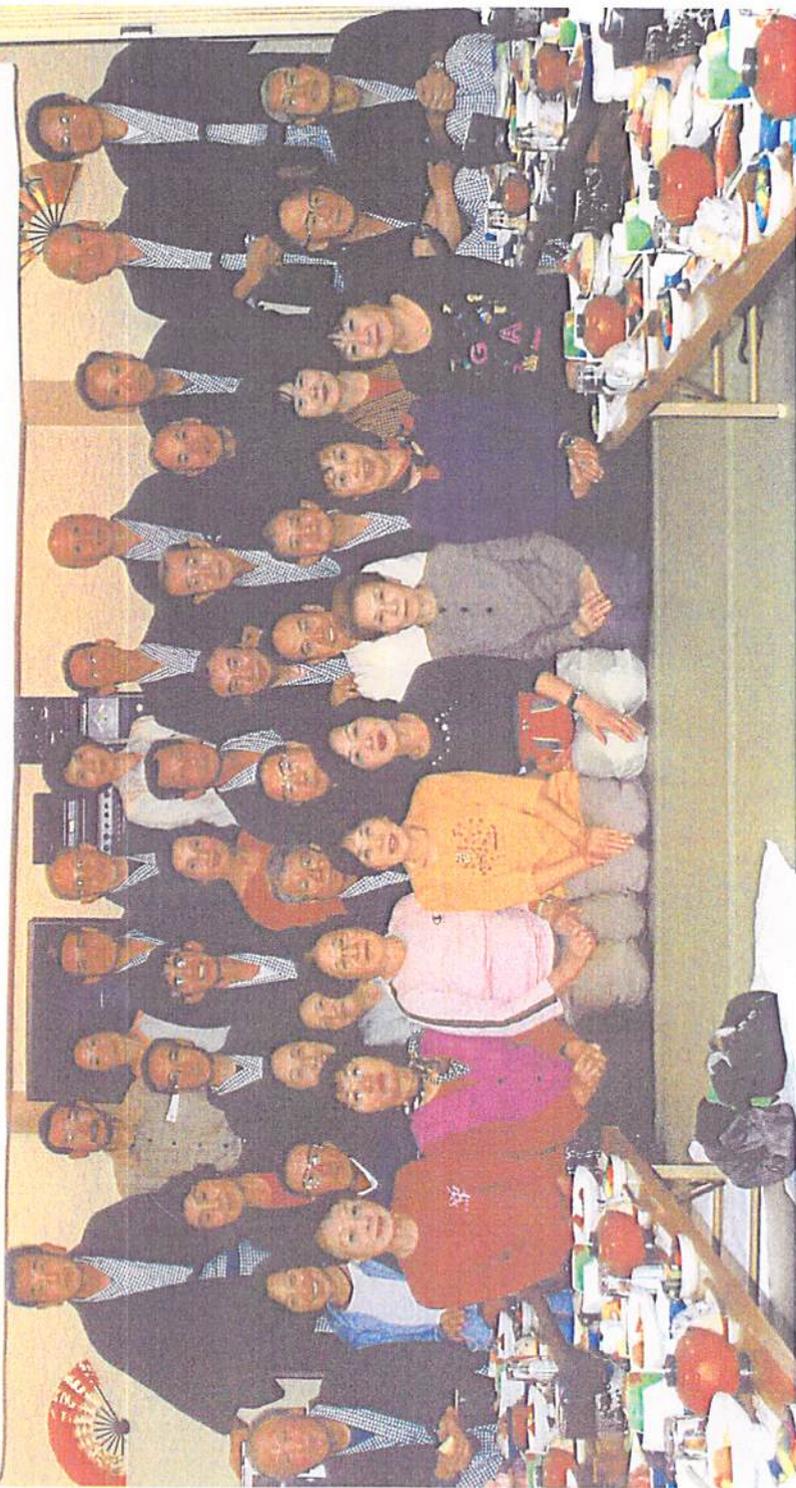


2006. 10. 11 10月例会にて



2006.11.08 11月例会にて

祝SHC横浜支部創立50周年記念



2006. 10. 28

50周年祝賀会

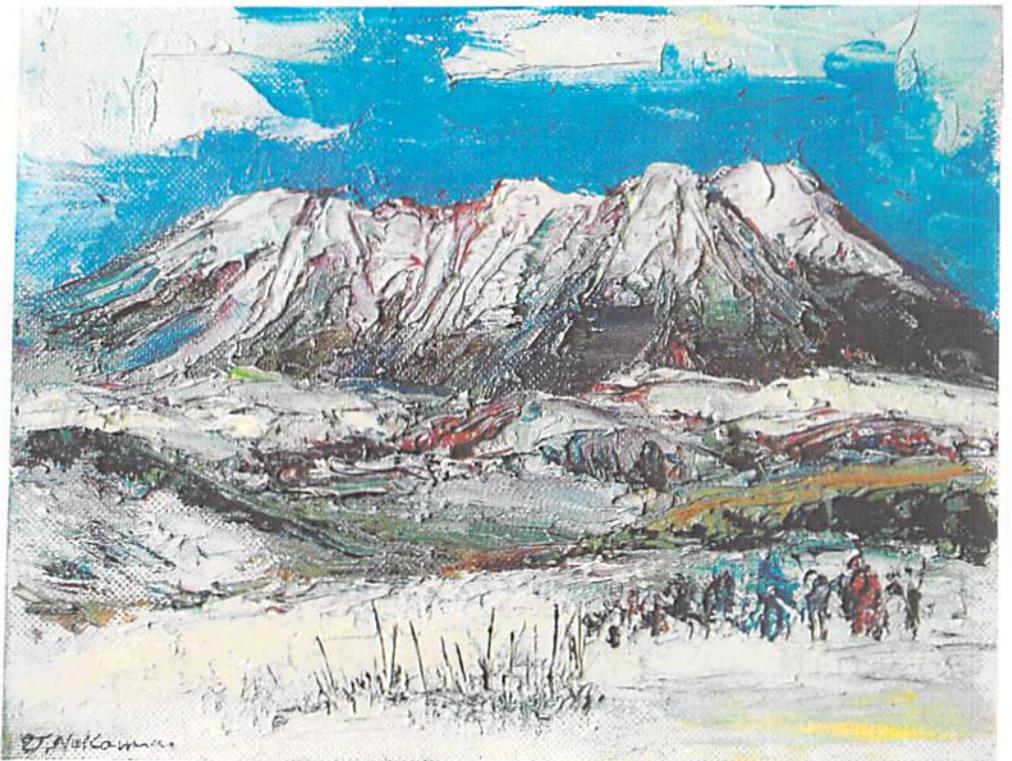
乙女山荘にて



上 : 涸沢の秋

中村 純平

下 : 早春の御嶽山





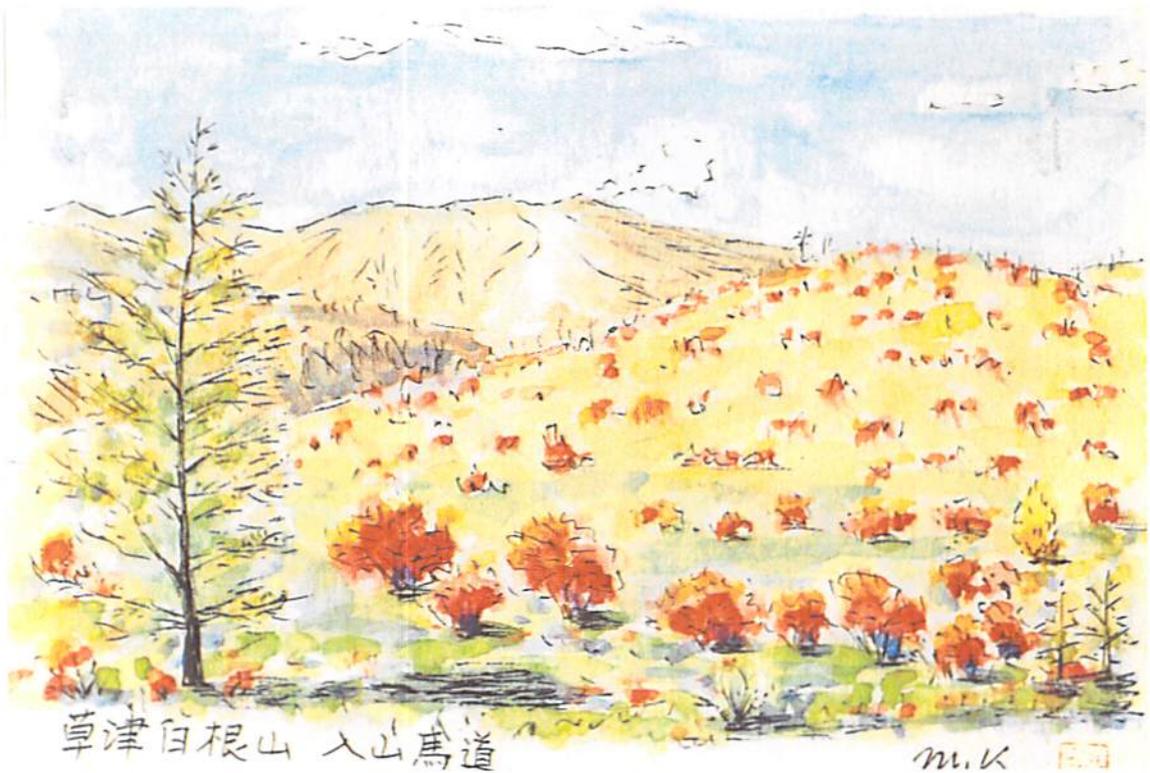
上 : 2006-6

南仏ピレネー ゴープ湖

熊谷 松治

下 : 2005-10

草津白根山 入山馬道

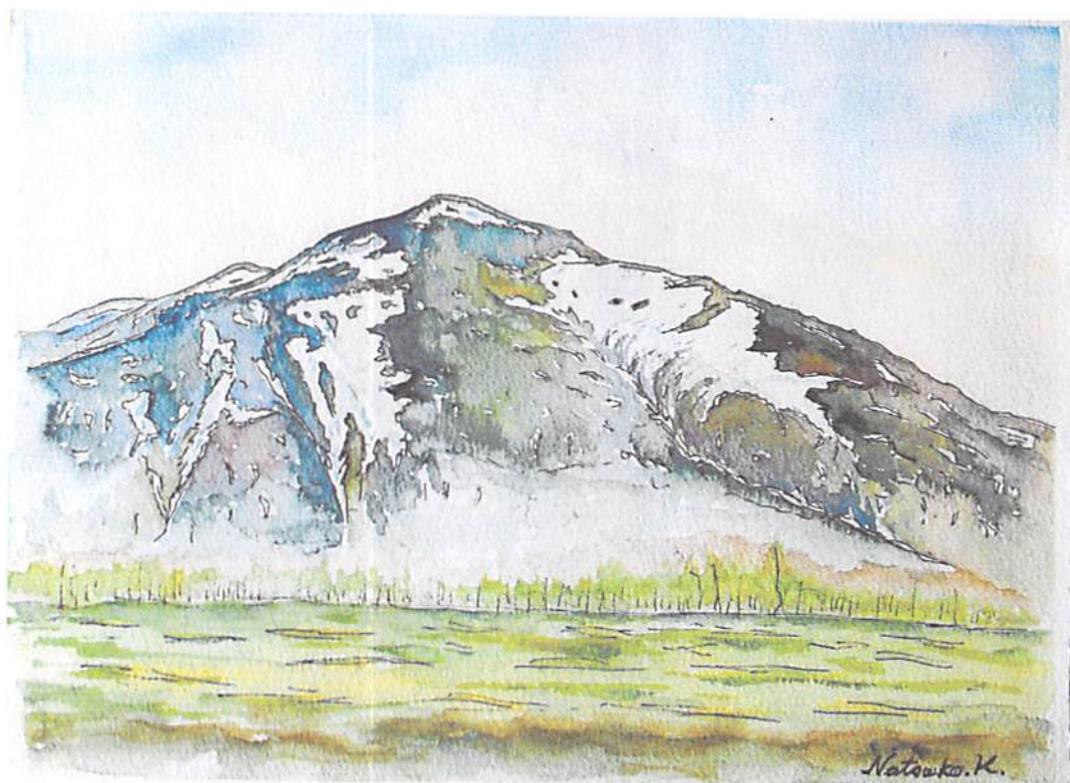




上 : 2002-7 燕岳より檜ヶ岳を見る 飯島 和子

下 : 長者ヶ岳より富士山





上 : 2005-5

至仏山

川野 奈津子

下 : 2005-4

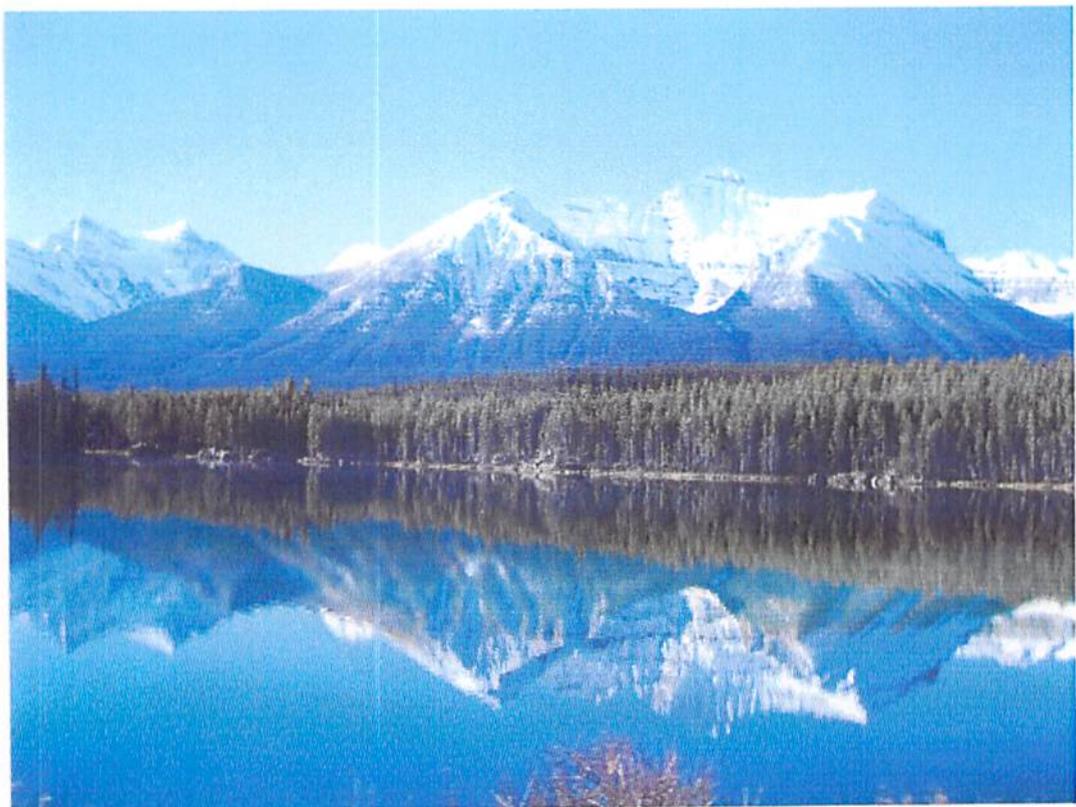
イギリス館



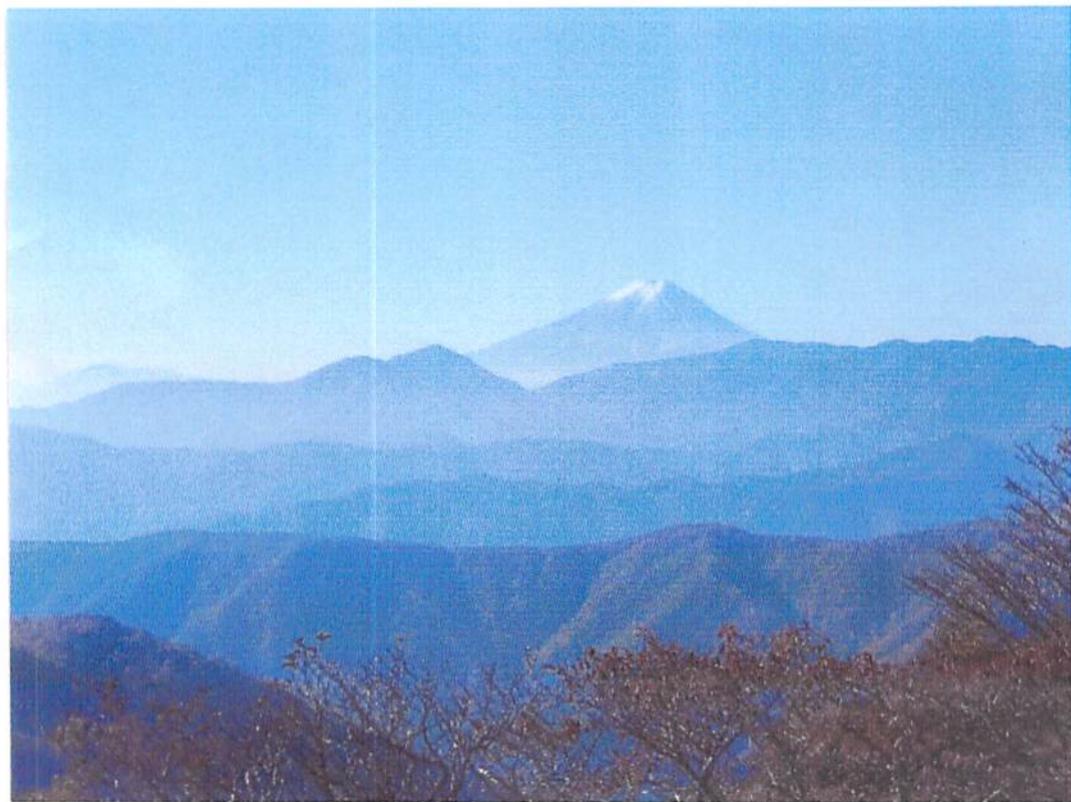


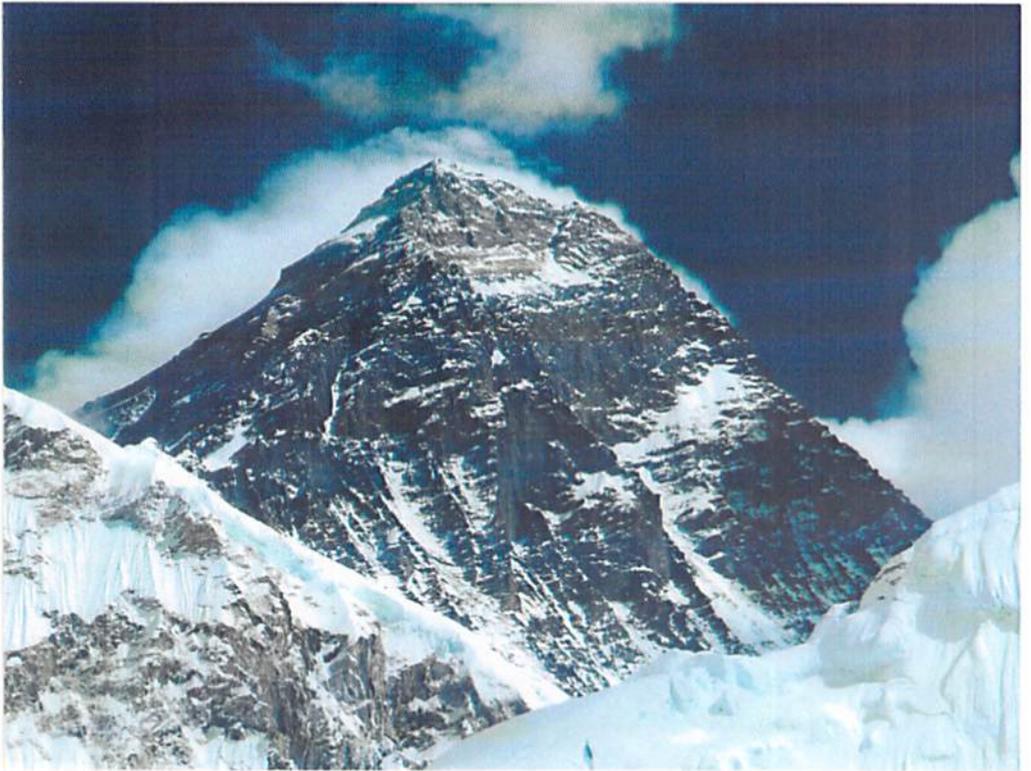
上 : 月と富士山 (塔ヶ岳山頂より) 御園 培博  
下 : 富士山 (鍋割山頂より)





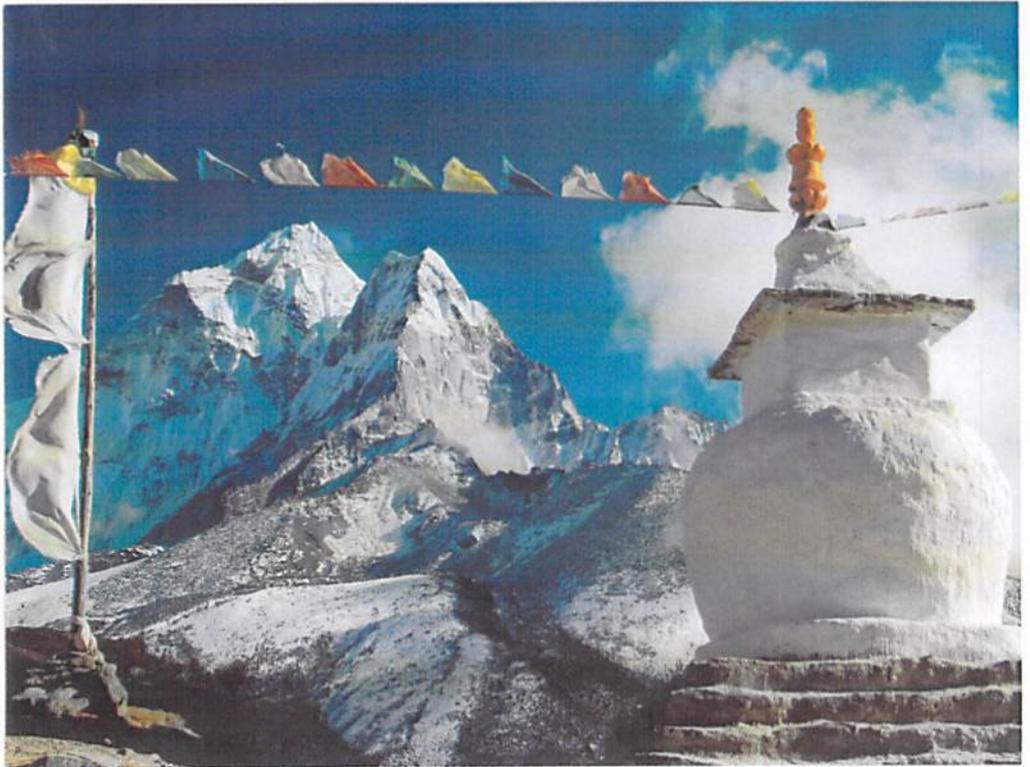
上 : 2005-10-10 「美しさとの遭遇」カナディアンロッキーの山々と  
ハーバート湖 竹尾 亮三  
下 : 2005-11-2 「山々の頂点に立つ富士山」雲取山より

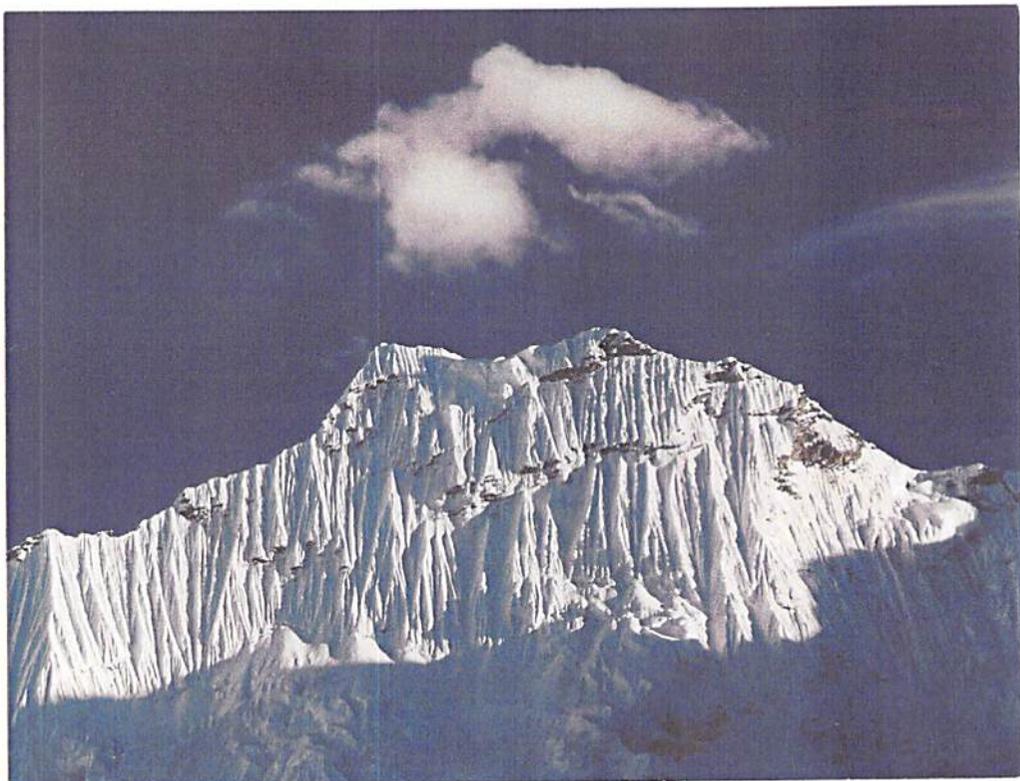




上 : 2003-11 カラパタール直下からのエベレスト 齋藤 郁夫

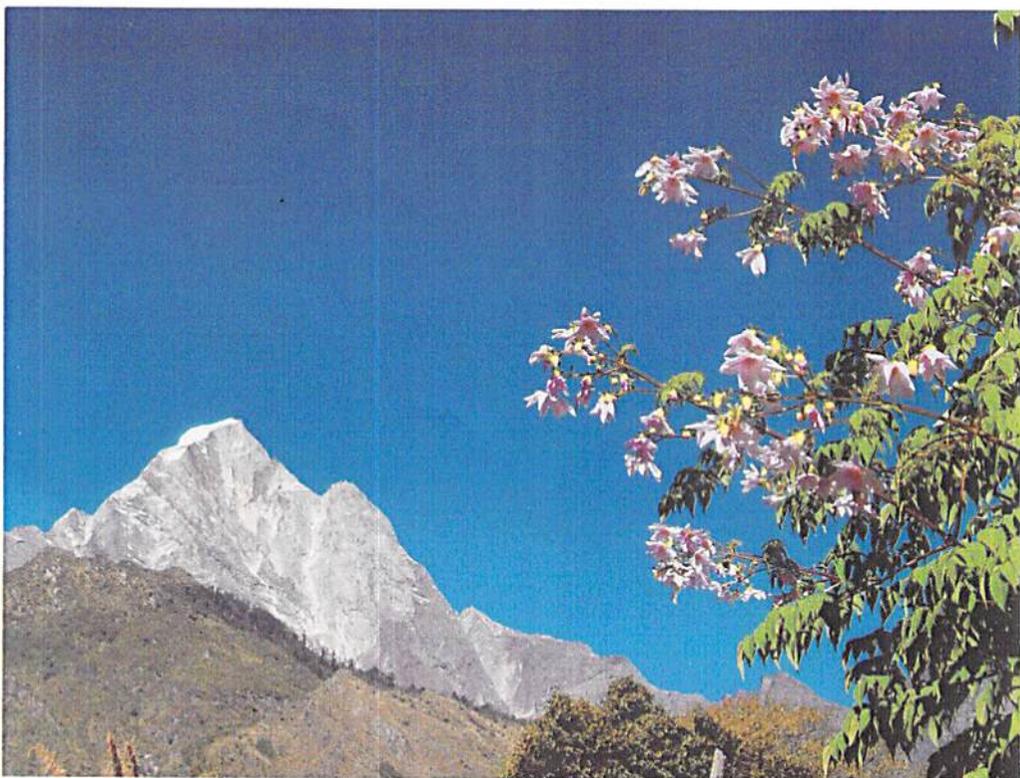
下 : 仏塔とアマダブラム峰 (ディンボチェにて)





上 : 2003-11 雲とヒマラヤ巒の無名峰 (チュクンにて) 齋藤 郁夫

下 : 2003-11 トレッキングも終了間近 (ルクラ近郊にて)



## 横浜支部、皆様の思い出

50周年おめでとうございます。

渡部 詔子

私が横浜支部に入会させて戴いたのは、昭和50年ごろだったでしょうか？

54年と60年発行の会員名簿を持っていますが、60年会員名簿は、星野さんの手書きで発行されています。この年度位から、親の介護で退会したかなと思います。

会員 NO. 1 の山田さんと NO. 3 の熊谷さんの支部山行で、今も忘れられないのは巻機山に参加し、スラブ状の斜面を私が登れなかった事です。NO. 2 の横山さんと、NO. 5 の祖父川さんとは、屋久島への個人山行が印象深い思い出です。No. 4 の北村さんは、横浜支部長を長く引受けてくれた方ですね。芹沢さんには、深田百名山の本の事を知ることが出来た方です。30年以上前の事です。星野さん御夫妻には、とてもお世話になっているばかりでした。平成14年だったでしょうか？ 星野さんの本部山行で、十二ヶ岳では、元横浜支部員だった小宮さんと現支部員の関さん御夫妻と同行させて戴き、良かったです。小宮誠一さんと太田繁信先生とは、20年前位に、北海道の夏山に同行させてもらったのも、なつかしい思い出です。

澤野、現横浜支部長さんの山行は、在籍中は在職中だったので、土曜と平日に休みづらい職場だったので、参加できず、残念でした。現在の私は、花の山旅を主に掛かっています。花の咲いている時期に登りたい山が多くて、困ってしまいます。ハードな山行は無理になってしまいましたので、のんびり歩いています。

横浜支部の皆様と山でお会いする機会がありましたら、うれしく思います。皆様の御健脚と御健康を、祈っております。

(SHC No. 6723)

## 50周年に寄せて

石川 信子

昭和45年前後、横浜支部在籍中「新ハイキング誌せせらぎ欄」によく投稿していた時期があります。全部で何回だったか定かではありませんが、その時の投稿後半部分の抜粋です。お読みいただければ幸いです。

◎雪溪とお花と草原の山、遠くて深い山、大きくてやさしい山、飯豊連峰でのあの豊かな語らいをいつまでもわすれまい。(45年7月山日記より)

◎きょう、仕事中にふっと思いついたこと、山で適当にバテるのも時には必要ではないかと。白峰三山の山旅の印象がこれほど心に残ったのは、あの草すべりの登りでずいぶん苦しんだからでしょう。快調な足取りで振り返っては私を見下ろしていたあの時の仲間より、帰ってからの感激の度合いは、バテた私の方がはるかに大きいだろうと思われます。

苦勞させられた山はいつまでも忘れられないし、喜びは二重にも三重にもなって返ってきます。バテることにこりるまでにはまだ至っていない私です。またキスリングでいそいそ出掛けることでしょう。だってキスリング姿は格好いいんですもの。

◎テレビの中の石坂浩二が言った。「君は今あの星を見ながら何を考えていたか。」と。ひとりはある人のことを、もうひとは世界の平和のことを考えていたと答えた。

私なら北岳の星を思い出していたと答えたい。風の冷たい夜の星空はことのほか美しく、そんな星空を仰ぐとき、いまごろこの星と同じ星を北岳の山頂から眺めている人がいるかなあときっと思う。そして私もその山頂にいるような気になり青い星に目を凝らす。それからふと我に返り家までの夜道を心はずむ思いでいつも走って帰ります。

◎「ちょっとあれ見てえ」歩き出してすぐもう一度こっそり見ようと振り返った私は思わず同行者に呼び掛けた。このとき初めて何もさえぎられずに180度の半円展望が背後に展開されていたのだ。甲府盆地を抱きかかえるように富士山・南アルプス南部・白峰三山・甲斐駒・八ヶ岳・奥秩父・大菩薩の連山が外円の空間を占め平和

な一国を作り出していた。それは今でも決して忘れ去ることのできない大自然の贈り物であった。それがどんなに素晴らしかったか今、ここには書くまい。あなた自身の体での展望に触れて欲しいと思うから。

豊かな心、美しい心を求めて歩き続ける私は北岳のあまりにも純白すぎるその様相に自分の心の狭さが恥ずかしくなりました。

◎わずか 2 ヶ月間でしたが山へ行かなくても案外平気でいられた自分に物足りなさを感じながら、先日は久しぶりに乾徳山で思う存分太陽の恩恵に与ってきました。山へは行かなくても夢の中ではときどきザックを肩にしていますが、やっぱり現実の大自然の中には離れがたい何かがあり、山を忘れる事はいけないと強く感じました。音楽の中の世界、本の中の世界、山の世界の雰囲気、それらの中にいる時素直な自分が保てるような気がするのです。

◎きょうは5月5日、目立たないようにクリームを何回も塗った赤い鼻の頭を気にしながら目を閉じてギターを弾いていると、一昨日の仙丈ヶ岳での夢のような情景が再び頭の中にいっぱい展開されてきます。

真っ青な大空の下、白銀に輝くアルプスの山々が遠く近く横たわり、私の全身を投げ出しても受入れ切れなかったあの展望に、どうしてあんなに素晴らしい世界があるのかと不思議な気さえしてきます。その様子を文字にしなければ無意味だとよく分かっていますが、自分の表現力の足りなさをもどかしく思うばかりです。話上手でない私にとっては、あの強烈な印象を山仲間語るのも難問です。ただわずかに一緒に歩いた仲間だけがきっとこの気持ちを察してくれるでしょう。机の上の仙丈ヶ岳の石は快い重さと快い冷たさを手のひらに伝えて来ます。

◎たくさん語らい、では“さようなら”と別れて5~6歩歩いた時にまたすぐ逢いたくて堪らないような理屈を越えた心、そんな経験あるでしょう。平ヶ岳から下山してきたばかりの夜のテントの中で、私は無性にもう一度平ヶ岳に立ってみたい衝動にかられ、「平ヶ岳へ又行きたくなっちゃった。」と言って笑われたけれど・・・。抜けるような水色の空と、さわやかに広がる緑の草原と、その中に点在する池塘と。平ヶ岳の雰囲気はとっても素敵。

◎「何買って来たの?」「山の道具よ」「あらまたリュックサック買ったの、2つ3つ持っているじゃない」「だってその中間がどうしても必要だったんですもの」「山のものは惜しげもなくよく買うわね」予定外の出費は大いに痛い。母上にご用立て願うのもこの様子ではかなり困難。財布の中は会津駒行きの大事な何枚かだけ。となると・・・。当分身動きが出来ないことになる。

ワンピース一着分また山へ消えたか、山を愛する人よ、よもやこんなことは考えますまい。ワンピースで外観は飾れても内面は飾れない。山はワンピースを着る以上に私の心を美しくしてくれるはず。

◎八ヶ岳の雪はまっ白で手の上に乗せると冷たかった。それはどこにでもある雪の白さと冷たさだった。それでも私は八ヶ岳の雪が踏めてとても嬉しかった。ピッケルとアイゼンをつけて、仲間6人と過ごした八ヶ岳のお正月は白い思い出とさわやかな思い出を残してくれました。

せせらぎ投稿の後半の一部を紹介させていただきました。山へ行く機会が少なくなり書く材料もなくなり、結婚を機に投稿を終わりにしました。新ハイ横浜支部はまさに私の青春そのものでした。新ハイは私にとって大きな存在であり、今でも心の支えとなっています。

子育てと自分の身が重くなったことと介護とで山が遠い存在になりつつあります。機会に恵まれれば、又緑のトンネルをゆっくりと歩いてみたいと今でも願っている一人です。

(SHC No.6143)

# 私と山との関わり合いについて

古谷 芳子

新ハイキング横浜支部50周年記念おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。2年前に支部を退会致しました私に、50周年を記念しての原稿の依頼に、途惑いまた躊躇致しました。今から30年前からの事柄を書くという事は、まったく筆舌に尽し難く、しかし当時の事が時を越えて走馬燈の如く頭を駆け巡り、ますます混沌としてくるのみです。けれども折角の依頼に感謝し、大変僭越ですが一筆書かせて頂くことに致しました。

私が新ハイキングに入会致したのが、昭和52年でした。その頃沢田社長様でとても温厚な方と記憶しております。当時は本部山行に足を運び、楽しい山行を続けておりましたが、ある時山での事故を目撃してから、多人数で行く山行を敬遠するようになり、支部に所属することを考え入会致しました。当時支部は人数も少なく、居心地の良さを感じていました。もともと私は15才から山歩きを始め、兄の所属する山岳会に在籍しておりましたので、支部に入りましても存分に楽しむことが出来、気の合う方達と個人山行等格別のものでした。夫は外国駐在・出張と多忙でしたが、私は山への憧憬があり、子育てと共に吾が生き甲斐として貫き、香港駐在の場合でも現地のハイキングクラブに所属して、香港の山々を隈無く歩き廻る等、吾が意志を大切にしてきました。その私が2年程前支部を退会してしまいました。それは支部山行で2度の足の痙攣に襲われたことで、まったく自信喪失し、臆病になり団体での行動に差し障りがあると思い決心致しました。

その私が何と今でも山を続けているのです。退会してしまったことは残念ですが、新しい出会いの方達と共に、山歩きを楽しんで行く所存です。過去を思うとき、なつかしい方達が一人一人思い浮びます。何卒新ハイキング横浜支部の今後の御発展と皆様の御活躍と御健康を、心からお祈り致しております。

四方の山思ひ出づれば恋ほしくて 齢思へばいとかなしけり

捨て難き山へのあくがれめくるめく つきぬ思ひに過去を忍びぬ

- 芳子 -

(SHC No.11101)

# “山” への誘いは限りなく

高橋 繁勝

横浜支部の皆様、支部創立 50 周年おめでとうございます。その間支部を支え続けた歴代役員各リーダー及び支部の皆様のご苦勞に対し心より感謝と共にお祝いを申し上げます。感謝の一端として寄稿ご案内の次第に基づき、無遠慮と拙文ながら書き綴らせていただきます。

## 1. 支部の思い出

① 昨年の忘年山行は“御座山”でした。かつて民宿基点に天狗山と御座山にご案内いただいたこと、特に岩峰の頂上は忘れ難く、天狗山は毎年、御座山は 4 回目を数え今回は山口登山口からで全般に藪っぽく頂上附近には立派な無人小屋が新築されておりました。両山共に支部参加が始めてであり鮮明な思い出です。

② 今年 4 月 24 日浅間隠山も支部山行が初回で今回は 4 回目でしたが毎年登りたい山としてプログラムに乗せている好ましい山の一つであり特に支部で初回になっている山は印象深いものがあります。この日は暖春好天好展望の大満足でしたが、2 日目に予定の本白根山行は荒天吹雪となり登山口で断念、帰路好天の兆しに黒斑山行を試みましたが、これも天候悪化、高峰温泉一浴にて帰りました。この時期は夏山と冬山が同居していますが温泉の清潔な檜風呂には友人も大喜びでした。

③ 支部山行での体験事例は大きな“糧”となっております。思い出多い山行の中でも厳しかった体験からは学ぶことが多かったようです。特に単独山行の時には大きな力、指針となっております。○厳冬風雪の大菩薩山行 ○豪雪で撤退の西穂独標 ○大岩石崩落直後、天女山から権現岳 ○噴煙盛んな浅間山登山道、全てが火山砂で歩き難かったこと ○12 本アイゼン初体験で大変ご迷惑をかけた天狗岳 ○冬山雪山大展望の北横岳 ○道に迷っても登り切った会津駒ヶ岳 ○トップを歩かせていただいた蒜山、大山 ○南ア最南端の光岳 ○長いアプローチ好天荒天だった悪沢岳、赤石岳の縦走の感激 ○谷川岳展望台の展望のなかった白毛門 ○レンタカー運転でご心配をかけた北海道大雪山旭岳 ○らくらく夏と厳冬正月の木曾駒ヶ岳 ○低山の魅力、三浦半島箱根、上州秩父の山々 ○好天の北ア縦走白馬岳、雪倉岳、朝日岳 ○厳冬の元日

釜トンネル内の大ツララが忘れられない上高地 ○我等が庭のような身近な春夏秋冬の丹沢山行。10年経過の現在もリーダーのお心づかいとご苦労と山行の感動はよく覚えております。支部山行の数々はそれが初回が多かっただけに貴重な思い出として鮮明で、学ぶことやヒントも多く、近年5～6年は道迷いは全くなくこの10年来事故も皆無です。これも偏に支部との関わりがあったからこそであり、支部の皆様への感謝は筆舌に尽くし難く思っております。支部山行ではありませんが新ハイ関係の記事で、新刊誌「道迷い遭難」(山と溪谷社)の麻綿原高原で全員無事で下山は改めて新ハイの日頃の準備と鍛錬のたまものとして、<sup>あっぱれ</sup>天晴が読後感です。

④新ハイ本部、支部現役としての10年間は正に学びの体験であり、その後の新ハイ読者としての10年間は学んだことの多くが今日の単独行主体の山行のライフワークの柱になっており、事例の数々は全て“糧”となって生きております。重ねて感謝申し上げます。

## 2. 山行の近況ご報告

①ライフワークとしての山行は70%位かな。比重はかなり高く、多分山行中心の生活かと思えます。家族も協力的なので嬉しく思っています。単独行が約70%でグループ山行が月2回前後です。毎年登頂したい山は新ハイ時代の山々から80座をプログラムしておりますが、毎年50座を越えない状況が続いています。

サンデー毎日なので天候第一で山行決定です。マイカー100%登山なのでルートに限定はありますが、気楽に飛び出します。高齢化と共に低山への傾向は続いているのは残念ですが当然のこととして楽しんでいます。

②山への誘いは限りなく、日々刺激ポイントを見出しています。○登山口への複数ルートへの挑戦 ○開山祭、市民登山、山小屋からのメール ○月間、年間計画、個人、グループ達成への励み ○好天気、住居地周辺からの好展望 ○単独行は熊にビクビク、自己責任達成感にゾクゾク ○自己の未踏峰山登頂年間3～4座 ○健康のバロメーターとして体力低下との戦い ○アルプス縦走を年1回になっても続けたい ○新山用具の使用試行(靴、ザック、スノーシュー等) ○グループ山行の責任、喜び、感謝 ○登頂の感激、下山時の達成感 ○昼食を食べに行く山行(朝好天の時の思いつき山行) ○マイカー登山の気楽さ(火打妙高の笹ヶ峰、梅池まで2時間30分の走行時間) ○新ハイ誌、岳人誌、山の新刊誌からの刺激、特に新ハイ誌の毎月の山行計画、実施結

果、更に支部計画と実施、参加人数などは励みです。新ハイ誌の山行報告は単独行にとっては大きな力になります。昔仲間の参加者名、せせらぎ欄は楽しみです。

③北海道、東北、九州、海外など未だ希望はありますけれど、山梨、長野両県のプログラムだけで、毎年未消化を続けている状況ですから満足すべきかと思います。特に高齢域に入っていることを考えれば山行を続けられるだけで感謝の日々なのでしょう。山行は唯々楽しみに徹し、全うできたらと願っています。

### 3. この20年間、山に再挑戦して、自らを顧みて

支部創立50年は山あり谷あり、それを越えて実に素晴らしく、その間どれだけの方々が励まされ、力づけられ、そして感動の輪を拓けて来られたか、ご苦労は計り難く、現在いささかですが受けたご指導の体験を引き継ぐべき立場にあって、一層実感を強く致しております。

今後更なる支部のご発展を願い、支部の思い出と現況報告をさせていただきました。皆様方の更なるご健勝を心よりお祈り申し上げます。



## ♪上を向いて歩こう♪

村田 真理

♪上を向いて歩こう♪ この歌は人々に愛され夢と希望を与えてくれました。  
上を向いて歩こう涙がこぼれないように・・・私も好きな歌です。

人は心配事があつたり、辛い苦しい時は無意識のうちに肩をすぼめ、肩を落とし、しょげこんで溜息をついて歩いています。それとは逆に、楽しい事があり未来は希望に満ち溢れている時は胸を張って顔を自然と上に向けて歩いています。青空が空いっぱいになり太陽が燦々と降りそそいでいる時は素晴らしい力が天空から降りそそいでいるかの様に勇気が自然とわいて、そんな気持ちにさせてくれます。それとは逆に、雲が低く垂れ込め暗くよどんだ空の時は、憂うつな重い気持ちになり、ああ今日は雨か・・・とってしまう。以前雨降りの日に飛行機に乗った事がありました。空港は暗く雨がシトシト降っていました。なんとなく気分まで重く、ふさいでおりましたが、機体が雲の中に入って行きやがてそれを抜けると快晴の素晴らしい天空がどこまでも続いておりました。後で考えるとあたりまえの事ではありますが、その時は大自然の素晴らしさに驚きと喜びで感動した日の事を思い出します。この地上に於いて、いかなる空の状態であっても天空はいつも快晴で太陽がいつも光り輝いています。

人の心は想い方一つで良くも悪くも選択した方の人生を歩む事になっているようです。明るく楽しく前向きな事を想えば心地よい人生が、暗く悲観的な後向きな事を想えばその通りの人生がやってきます。全て自分から発した想いで自分の人生を創りあげて行くなれば、私は残り少ないこれからの人生を明るく、前向きに夢と希望を実現させる為に♪上を向いて歩こう・・・と思っております。

(SHC NO. 30792)

## 思い出のガッシャブルムⅡ峰

高橋 巖

1998年、シルバートール登山隊の一員としてカラコルム山脈ガッシャブルムⅡ峰8035mに挑む。隊の中での役割は装備係である。1997年1月から登山装備になにを揃えて良いか戸惑う。BCキャンプ道具、登山道具などを揃えるのに苦労が続く。装備計画書は何回書き変えたことか。計画書がまとまったのが3月頃であった。なれない登山道具集めに戸惑う日々が続く。忙しい日々が過ぎていった。この忙しい中でも自主トレーニングは続ける。丹沢、富士山が主であった。

年が明けて、装備、食料の荷物が集まり、家の中は荷物でいっぱいになった。2月富士山で、隊員全員で氷壁と高度順応の、5月富士山火口壁で登攀のトレーニングを行った。1998年1月、北アルプス明神東稜でフィックスザイルを固定してユマールの扱い方のトレーニングがあった。4月終わりから荷物の梱包が始まる。25キロのプラパールにまとめて空輸で運んだ荷物の重量はNHKの機材も含めて約10トンであった。この後壮行会があり有名な登山家などがわれわれを支援してくれた。

5月24日、カトマンズへ装備を集めるため2名が出発した。カトマンズ隊の役割は日大山岳部のプラ樽5個を受け取ること、ハイポーターのプラブーツを購入すること、村口氏から酸素ボンベの道具を借用してくることである。5月29日、カラチ、パキスタンを経由してイスラマバードに入り本体と合流した。日本山岳会から譲りうけた装備と我々が日本から持ってきた食料などを仕分けする。6月4日早朝イスラマバードをあとにインダス川にそって大型のバス、中型バス3台に分乗して出発した。インダス渓谷の側壁につけられている道はカラコルム・ハイウェイと名前は素晴らしいが舗装がしてないジャリ道である。部落などに立ち寄ると仕事がないのか男がたむろしているのが多い。女性が人前に出てないのはイスラム教の世界だからだろう。また、男どうしが手をつないで歩いているのが多く見られおかしな国だと思う。インダス川にそって2日かかりでスカルドに着く。スカルドは遠征隊の基地でもありいろいろな登山隊が多い。日中の気温40度の中10トンの荷物を20キロずつに分け、ハイポーター・ローポーターの荷物を仕分けする。6月8日、トンガルに6台のジープで移動する。バルトロ氷河からの川は泥水の濁流となって流れている。道はジープ1台がやっと走れるぐらい狭い。1日でトンガル村に着く。登山隊の荷物をおかつぐためロ

一ポーター450人が集まり荷物の仕分けで大騒ぎであった。彼らにとっては重要な現金収入なのだ。三日間もかけて山を越えて来る。

6月10日、5000mの高度順応訓練があった。トンガル村から6日間かかるバルトロ氷河のトレッキングが始まる。部落を過ぎると広い川原を延々と歩くジョラの渡しは3人乗りのカゴで対岸に渡るため1日がかかりであった。パイユは多くの登山隊の休息場である。パイユからバルトロ氷河を歩く。荒涼とした河原を感じさせる氷河の回りの山々はドラゴンピック、マッシュャブルム7821m、ムスターグタワー7273mなどが空にノコギリの歯のように突き上げ、山々が続く。我々も氷河の登り下りを繰り返し、6月16日にコンコルディアへ着く。4720mあるコンコルディアからは世界第二位のK IIがピラミッド型に輝いて見える。ブロードピーク、バルトロカンリ、チョゴリザなど8000mの山に囲まれているキャンプ地で、その荘厳さに圧倒された。6月17日、アブリッジ氷河に入る。緩やかな登りが続くが空気が薄いせいかわりに苦しく感じる。やがて氷河の中ほどの小高い丘にあるBCキャンプに着く。氷河対岸にバルトロカンリ、チョゴリザ、正面には、ガツシャブルム、I峰、II峰と高い山に囲まれている。

キャンプ地は5000mにあり空気が薄い。13ヶ国の外国隊がいた。二日休養後、我々はCI(6100m)に荷揚げを兼ねて高度順化に専念した。CIへはアイスフォール(氷の壁クレバス)などの連続で、ザイルをコンテしてポーターや隊員達と注意して歩く。クレバス(氷の割れ目)は青く深い底まで伸びている。CIキャンプ地は我々のテント以外に外国のテントも多かった。CIで一週間、上のキャンプへ荷揚げを続けた。上のキャンプCII、CIIIからは絶えず不足している食糧、装備などをトランシーバーで指示される。CIキャンプ地は山に囲まれた盆地のようである。CIからCIVへは7000から8000mの山が連なり、空はコバルト色の濃い色であった。一週間の荷揚げが終わりBCキャンプに戻る。

7月21日第1次隊4名が頂上目指して登る。7月22日晴れ、4名が登頂に成功した。頂上に渡辺玉枝さんに託した私の孫が書いた国旗が翻った。7月24日、第2次隊が頂上を目指したが天候が悪くなり、頂上直下300m付近でフィックス(固定ロープのこと)が雪で埋まって見付からず、ボンベの酸素も少なくなったので登頂を断念した。7月27日、登山は終わりBCキャンプへ下山し始めた。7月29日、遠征隊より先にバルトロ氷河を経て下山した。後日NHKスペシャルでドキュメンタリーとして放映された。

(SHC NO. 8682)

# アクシデント

太田 繁信

皆さんは山登りの最中に突然登山靴が壊れてしまった経験をお持ちでしょうか。そのピンチに見舞われたのが、昨年（平成 17 年）夏の乗鞍岳登山のときでした。国民休暇村からのコースを登りにとったのですが、バスを下りたとたん足に違和感が。見ると、右の靴のソールのかかとの部分が外れ、ブランとしてしまっています。あわてて左を見ると、こちらはまだはがれてはいないものの、大きな亀裂が入っていてそのうち同じ運命になるのは必至の状況です。

このところあまり山に行かなくなってこの靴をはくのはほぼ 1 年振り、ロクに手入れもせず放置していたのが靴の傷みを早めたのでしょう。

とにかくどうにかしないと歩けるものではありません。幸いガムテープを一巻き新品に近いものを持ってきていたのが役立ちそうです。はがれた部分をガムテープで固定し歩き始めましたが、すぐに見通しが甘いことに気がつきました。10 分も歩くとテープはすぐに切れてしまいはいり直さなければなりません。さらにソールのはがれ自体がどんどん進み、肩の小屋までの行程の半ばでソール全体がはがれてしまったのです。思い切ってソールを外しました。内側の布とソールの間には薄皮があり、それが新しい靴底になりました。歩く分には違和感はありません。問題はこれがどこまで持つかです。

肩の小屋についた後、今後の行動を考えました。頭の中では頂上をピストンし畳平に下りバスで帰るのが賢明だと思うのですが、当初に予定した千町ヶ原コースの魅力が捨て切れません。何とかなるだろうという希望的観測にけることにしました。小屋までの行程では薄皮が結構丈夫そうに思えたのです。

結論から言うと、この選択は大失敗でした。頂上から下りコースに入り、1 時間も経たないうちに薄皮までがはがれ始めてしまいました。一度取り外したソールを再びガムテープでぐるぐる巻きにして薄皮の保全を図りますが、これとてすぐにテープが切れて補修を繰返さなければならず、ガムテープの減りがどんどん早くなります。

千町ヶ原コースは行程7～8時間というロングコース、歩き通すことが果たしてできるか不安がふくらんで来ましたが前進を続けるしかありません。靴の崩壊はどんどん進行し、足裏に地面の凸凹、石の感触がはっきり伝わってきます。気持ちの良いコースとして選んだ千町ヶ原ですが難行苦行以外の何ものでもなくなってきました。

下山口の乗鞍青年の家に着いた時、靴は両方とも薄皮もはずれ靴底は布一枚。その布も穴があき始めた状態でした。青年の家で事情を話し古い運動靴を譲り受けなかったら、帰りは靴なしで電車に乗らなければならなかったところです。皆さん靴底の傷みには気をつけましょう。そしてスニーカーなどの予備を万に備えて持っていった方が良いですね。

(SHC No.10710)



鎌倉・北山から大船方面

## 支部の思い出

鎌田 美英子

私が横浜支部に入会したのは、今から25年ほど前の事でした。その頃、まだ20代前半の私は山登りに興味がわき、山の本を見ているうちに新ハイの雑誌を見つけました。早速入会し、横浜支部の会合に出ました。月に1回の会合は楽しく、仲間と行く山行は慣れてきたら、月1回にとどまりませんでした。

近くの山、遠くの山、どこでも、行けば苦しい登りが待っているのに、もくもくと歩いて頂上へ向かいました。頂上に立つと、そのすばらしい景色に苦労も忘れえました。例えば谷川岳へ行った時です。やっと頂上へ着いたとき、右側の谷へ左側から雲がドーンと流れ落ちているではありませんか！滝雲です！

又、白馬岳では雷鳥の親子やコマクサを見る事ができました。そういう山行を支部の仲間と楽しく分かちあえたのは、今思うと本当に良かったと思っています。

あの頃、久保田さんは山行時に8ミリ撮影をしていました。帰ってからナレーション入りに編集したものをみんなでよく見ました。時には私も呼ばれてナレーションを入れた事もありました。BGMを流し、8ミリを見ながらナレーションを入れていくのは、楽しいひと時でした。今思うと、なかなか凝ったことをしていたものです。

そう、この「しだ」もよく編集しました。その頃は、ガリ版刷りでした。皆で手分けしてガリきりをするのですが、結構手が痛くなったりして大変でした。出来ると集まって印刷をし、製本して出来上がりです。「しだ」を読むと、この頃のことが思い出されます。「しだ」はとてもよい思い出です。

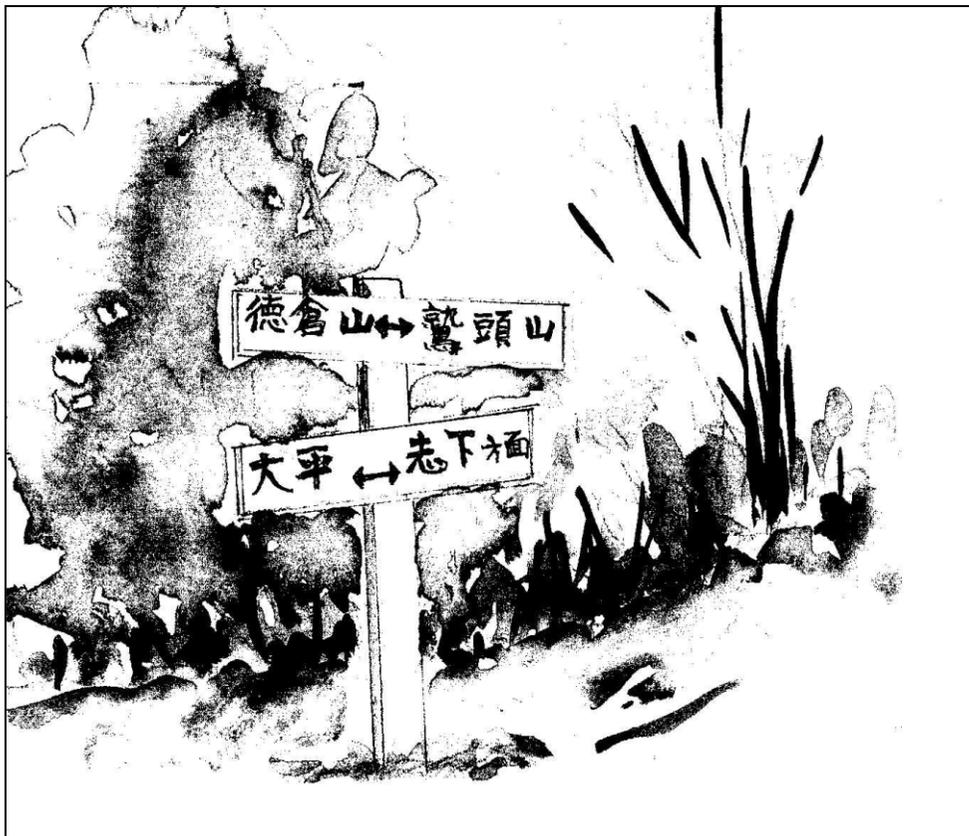
この頃、支部員の人数はかなりいて、支部山行はいつもにぎやかでした。こんな山行がありました。丹沢お月見山行。夕方集合して、月明かりを頼りに明け方まで歩きました。コースは忘れてしまいましたが、暗い林の中を月明かりだけで歩いていると、動物の目が光っていたり、大きな影がちょっと不気味に動いていたり、夜の山行はおもしろかったです。月が傾く頃、山の分校の軒下で仮眠を取り、朝帰りをしました。あるグループは、秋田駒が噴火したと言って、予定地を替え、秋田駒の噴火見物に行きました。なかなかきれいだったようです。

私はその頃、平塚に住んでいたもので、冬には雪が積もったから丹沢へ行こうと、友達とよく行きました。今はバカ尾根もきれいに整備されているようですが、この頃、

はつるつるで、好きなところを歩きました。雪も結構積もっていて、ちょっとした雪山気分でした。

こんな、あんなを思い出していると、支部に在籍中は本当に楽しい時が過ごせたんだなって思います。私が在籍していたのは10年ちょっとでしたが、一番楽しい10年でした。支部は50周年。これからも仲の良い、楽しい支部が続きますように！

(SHC No.7025)



飯島 和子

## カラコルム連峰

古谷 芳子

NHKの放映日時知らせくる岳友<sup>とも</sup>の喜びひたひたしむる

映像を設けてシルバー登山隊の吾が岳友<sup>がくゆう</sup>の姿に見入る

映像の陽にやけたりし笑顔にはシルバー登山隊の闘志みなぎる

銀嶺の八千メートルカラコルムのバルトロ氷河に魅せられにけり

銀嶺のこごしき連峰カラコルムのガッシャブルムに挑みし岳友<sup>とも</sup>は

吹き荒ぶカラコルム連峰を両手合せて晴るるを祈る

山頂をいさぎよし人諦むる斯くあるべしと我れ思ふなり

一步踏み又一步ずつ喘ぎゆくガッシャブルムに旗ひるがへる

日の丸の旗に孫等のサイン入りガッシャブルムに温き風みる

我が生涯八千メートルかなはざる眼裏<sup>まなうら</sup>の峰登りゆかむか

川 柳

長谷川 美江

山<sup>やま</sup>行こえる 趣味見つからず 古稀となり

若くなし 美人でもなし 頼<sup>あし</sup>り脚

あと何年 神のみぞ知る 山<sup>よめい</sup>余名

腰伸ばし 今年も支部の 中堅層

中年に 目標とされ 我老年

引退の 時期をにらんで 山<sup>くつ</sup>靴を買う

あなたなら まだ歩けるよ 友やさし

アイゼンの 雪を咬む音 春近し

木の名など どうでもよくなり 焚火の夜

木の実落つ 音を聴きつつ 一人行く

落葉舞う 一<sup>いっとき</sup>時前行く 友を消す

魚の目の 歩毎に痛む 生きてあり

## 詩

石部 正子

行きたい山はいろいろと、次々出てくる。

計画しているときは楽しく軽々と登頂。

だが現実には…『キツイ・苦しい・怖い』という波が押し寄せ、ヒーヒーと喘いでいるが

山の魔力にはまってしまっている。

見渡せば山並みが続き、雄大な　そしてこれから先もずーっとそこにいてくれる山。

決して動かず、そこにいる。

そんな姿を見ると、下界で自分を取り巻く物事のなんと小さく細々した事と思う。

山にひとつ行ってくると、その山に自分の分身　いわゆる悩み・苦しみ等を預けてくれる事ができる。

40歳から山歩きを始めた私には、横浜支部がスタートライン。

今こうして続いているのは支部の方々の優しい導きがあったからであり、

自分を取り囲んでいる様々な条件、家族そして仕事。

私にとって月曜から金曜までは、主婦であり、3人の孫のおばあちゃんであり、

そして仕事にも行く。

土日は自分だけの時間であり、好きな山に行く。

そして元気をもらってくる。

さあ、幾つまで頑張れるのかしらね。

そのうち孫にリュックを担いでもらい、口だけは元気でファミリー登山をしているのでしょうかね。

同じお金を使うなら、痛い痛いと言い病院につき込むより、山に使いたいものですね。

10年後も支部に在籍し、楽しい山行をしていきたいと思います。

## 北海道の旅

小倉 靖子

今年で何回目になるだろうか、北海道へ行ったのは？ 現在は登山とスキーで毎年訪れている。初回は高校の修学旅行だった。専用列車に乗り、青函連絡船にも乗った。期間は1週間あったが、洞爺湖までが精々だった。古いアルバムをひっくり返してみたら、写真は1枚しかなかった。親から写真代としてもらったお金は、山行きの旅費にしてしまったのを思い出した。お昼代を詰めて、丹沢参りに明け暮れていた、私の青春時代である。

あれから、数年間は北海道には縁がなかったが、子供を連れて行くなら、夏休み中、出かけて良いという亭主の言葉に、子供3人連れて東北道を走り抜け、北海道を一周した。テント2張りを積んだ乗用車は、荷で満杯であった。子供を連れていたので、山は望むだけのキャンプ生活を続けた。運転、食事、洗濯と若かったのに、くたくたになって帰浜した。その、自由な旅行を今年、11日間だけ再度実現した。今回は妹と2人だけ、大人同士なので本当に自由な旅だ。フェリーに自分の車を持ち込んだ。それも目的は沢山あると縛られるので一つにした。なんだと思います？ 今人気の旭山動物園です。新品の5人用のテント1張り、山をやらない妹なので、居住性の良い大きなテントを用意した。雨の時は、車で寝ることも考慮に入れていた。が、嬉しいことに、前日まで雨、翌日から雨という好天に恵まれ、キャンプ生活を楽しむ事が出来た。あの世から、亭主がいつも言っていた、「旅へ出たら、一つは山を登れ」と声が聞こえ、仕方なく？ 膝が痛いのを我慢して、支笏湖の外輪山の簡単な山、樽前山を登って来た。対岸の恵庭岳は以前、幌尻岳の帰りに登っているので、お花の豊富な樽前山を登ることにした。イソツツジが特にきれいで、イワブクロはまだ蕾が多かった。

北海道のキャンプ場は、どこも皆素晴らしい。また芝生上にテントを張れるのがうれしい。夏休み前の時期なので静かだったし、気候は良かったし、ラベンダーには少し早すぎたが、ジンギスカンは美味しかったなー。走りに走ることは止め、年相応にゆったり、温泉を楽しみながらのキャンプ。来年も、一山だけは登る自由な旅行をしようとして妹と約束して、フェリーに乗り込んだ。深田久弥の百名山をチェックしたら、関東人の一つ残し、四阿山だけが残っている私である。

## 故郷 小樽の天狗山に 48 年ぶりに登る

竹尾 亮三

2005 年 6 月 15 日～19 日に北海道 小樽潮陵高校の卒業 45 周年の同窓会、中学のクラス会などで帰郷した。小樽市街地は左右、後ろが山に囲まれ、東側が港灣になっており、両側から長い防波堤が伸び、船の出入り口の左右に紅白の灯台が立っている。市街地の背後にでんと構えているのが標高 533m の天狗山である。この山に最後に登ったのは、まだロープウェイがなかった、昭和 32 年、15 歳の 8 月 7 日である。クラスの仲よし男女計 7 名の年月日を記載した写真が残っている。

6 月 17 日、朝から快晴、小樽駅からバス 20 分でロープウェイの山麓駅に到着する。「天狗山登山道（地蔵コース）」の道標を見つける。48 年前の山道に、お地蔵さんがあったことをしっかりと覚えている。

今回はウォーキングシューズとウエストポーチにお菓子と地図、コンパスを入れての軽装で、ペットボトルの水を左肩にかけ、右側の肩からデジカメをかけてのハイキング気分である。11 時発、ゲレンデを 5 分登ると登山口の入口である。市街地、小樽港の展望はもとより、石狩湾/日本海の先を見ると、残雪の暑寒別岳<sup>しょかんべつだけ</sup>(1491m)がくっきりと見える。天狗山の全景を見上げると、エゾハルゼミの大きな鳴き声が、他の鳥の声と一緒に三重奏に聞こえる。音楽好きの自分を歓迎してくれているのであろうか？山道入口から 5 分登ると、立派な薄赤色の石像が石台にのっている。「愛染明王」と刻まれている。隣に「四番」と刻まれたお地蔵さんがあり、山道を挟んで石の仏像が 10 体並んでいる。未知の北の大地に来た人たちが信仰の山にしたのであろう。

山道を登ってゆくと五番、六番と上番のお地蔵さんが出てくる。何番まであるのかは記憶にない。ほとんどが落葉広葉樹の山で、登るにつれ白樺、山桜が現れる。終わりがけのスマレの花も目立つ。四十六番目を通過した後に「番外二十五」、番外六十七の地蔵が現れる。後から追加したのであろう。なぜこの位置にあるのだろうか？ハルゼミの声が一段と大きくなるが、私の近視眼では蟬を見つけることはとうとう出来ない。六十二番のお地蔵さんを過ぎると山道上に太さ 2cm、長さ 20m ほどのロープがあり、登り終わると視界がいっぺんに広がり、さわやかな風の広大なゲレンデに出る。腰を下ろし、小樽公園、裕次郎記念館、暑寒別岳<sup>しょかんべつだけ</sup>を見ながら一服する。

ゲレンデを 15 分登るとロープウェイ山頂駅隣のレストハウスである。12 時 15 分、

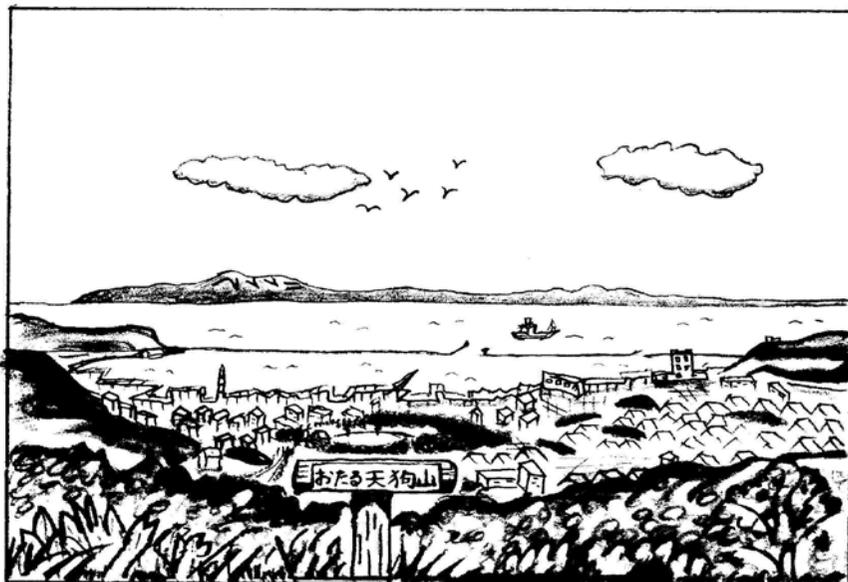
昼食にチャーハンとコーヒーを注文する。観光客は 3、4 人。見下ろす港には、兄とよく釣りに行った。岸壁の深い海で必死に立ち泳ぎを覚えたところでもある。

ロープウェイの山頂駅から上には夏、冬とも登った記憶がない。いつもここからスキーで滑降していた。48 年前はこの辺に山小屋があった。当時、無かった天狗神社のそばに山頂への道標がある。ダケカンバ、白樺にミズナラが混じり、スマレの花が満開の緩斜面を 15 分ほど登ると三等三角点 533m の山頂である。山頂を通過し東へ回り込むと、初めてとど松が現われ、展望所に着く。下方に奥沢水源池が、南南東の方向に雪をしっかりと残した余市岳よいちだけ (1488m) がそびえている。キロロスキー場のゲレンデはこの角度からは見えない。誰もいない展望所でハーモニカを吹こうと思っていたのに、横浜に忘れてきたのは年のせいであろうか。

さらに直進し、森林浴を楽しみながら、緩斜面を下り、小樽周辺をおよそ 240 度見渡せる第三展望台を経て、天狗神社に戻る。

ここから登ってきた道を一気に下り山麓駅前に帰還する。札幌勤務時代にスキーに来て仲間と泊まったユースホステルはペンション「山麓館」になっている。赤、紫、ラベンダー色など、6 色の模様植えのサルビアの花が優しく「お帰り」と云っている様である。14 時 57 分のバスでホテルに向かう。今夜は住吉中学 3 年 4 組の友人が待っている。二次会の皆で歌うカラオケも楽しみである。

2005 年 6 月 28 日 記



R. Takeo.

# 中国、花の四姑娘山

祖父川 精治

東方アルプス、蜀山皇后と親しまれて中国十大名山に数えられる四姑娘山（スークウニャンシヤン）6250メートル。この地域は、最近になって私たち外国人にも解放されてきた。成田から所要3時間で上海東浦国際空港着、国内専用の四川航空のエアバスへ乗り継ぎ更に2時間30分、四川省の省都の成都着。

登山口の日隆鎮（リーロンチン）まで240キロ、車で山岳道路8時間。成都は標高5000メートル、巴郎山（パーロンシヤン）4523メートルの峠越えが高山病対策の最大の関門となる。一気に4000メートルも高度を稼ぐのは非常に危険なので、中間の臥龍（ウォーロン）1960メートルへ宿泊して高度順化をして行く。途中、パンダ（大熊猫）の自然保護区があり立ち寄って見学する。

翌日、それでも臥龍から車で2時間高度差2500メートルを急登する。途中で料金所があり入山料10元（140円）を支払う。太古氷河の跡を残すU字形の溪谷、見上げると落差のある長大な滝を幾つも懸け上部は緩やかな緑のカーブを形成する。森林限界を超えた3500メートル級の東斜面には、色鮮やかなお花畑が数限りなく広がってゆく。最高点の峠では高度計の表示を見ると4300メートル。この車道はWWF（世界自然保護基金）他の援助により快適な舗装道路が完成、昨年までは土埃の物凄い悪路であったという。

巴郎山は、高度順化で体調が慣れた帰路立ち寄ることにして山岳道路を直ちに下る。この高所なのに周辺は金を採掘している露天掘りの坑口が見える。濃い雲の間から四姑娘山連峰が望まれ、主峰から右に三姑娘山5355メートル、二姑娘山5276メートル、大姑娘山5025メートルと続いている。大姑娘山（タークーニャンシヤン）はハードトレッキングとして短期間に5000メートル峰を踏むことができ最近では人気の峰のひとつである。

日隆鎮は、盛夏というのに段々畑は黄色い油菜の花で埋まり桃源郷とは正にこのことを指すのであろう。リーロンとはチベット語で陽の昇る所で、数年前までは招待所という簡易宿泊施設しかなかったのに、現在ではホテルの建設が盛んである。ホテルといっても民宿クラス風で、観光事業に投資しないかと中国語でパンフレットに記載されていた。一口10万元（140万円）とある。

車を利用し半日の予定で双橋溝へ向かう、溝とは深い谷のことである。入り口は狭く高い峡谷であるが、奥は大きく開けた森林帯と草原、湿原が散在する大渓谷である。五色山、尖山子、老鷹岩、牛心山といった4～5000メートル級の山水画的な岩峰や峻峰が周囲を囲む。人參果坪3500メートルはピンクのサクラソウに限りなく埋め尽くされた大湿原でゴム長がほしいミニ尾瀬の湿原風である。さらに奥へ進むと枯樹潭、潭とは湖沼のことでガイドの鄭さんは中国の上高地だと自慢している。正面に氷雪の高峰を望んで危うい仮橋の河童橋もある。フラワーハイキングを楽しみのんびりと日隆鎮へ戻ることにする。

朝起きると小雨、雨具を調べ弁当持参で鍋庄坪へ向う。この山道は大姑娘山への登山道でもある。苦しい標高差200メートルも登ると大草原が広がり、そこは一面のお花畑となる。優しい草原が上方へと高く幾段にも広がって行く。最大の見所は、夢のようなエーデルワイズの大群落で細長い花茎に白い苞葉が狭く、わが国のホソバヒナウススキソウと類似している。

小雨の中、私は興奮の余りカメラのシャッターを連続して36回も押してしまう。住み暮す土地の人たちには少しも貴重な群生地ではない。昔から大切なヤクや馬の放牧地だったのである。ゴミは少ないが、帰り路傍に捨てられたペットボトルを拾いながら下るとビニール袋いっぱいになってしまう。

途中で体調を崩した人がでる。夜は気温が大きく下がり、山のホテルでは電気毛布をセットしてくれた。高山病は風邪の兆候が現れるので、部屋の暖房より優しく体を包み暖めた方がより効果がある。息苦しくて幾度か夜半に目覚め、酸素の塊である水をガブガブと飲み幾度もトイレへ通う。大きく深呼吸もよろしいと教えてくれた。利用者が多いのか携帯用の酸素ボンベを販売している。

再び峠を越えて帰る日となった。3500メートル台の高地で宿泊を重ねて、体調が慣れてきたのか高山病様風邪も大分楽になってきた。幾度かお花畑横で車を止めては高度を稼ぎ、巴郎山峠へ着く。そこはチベット風の経文旗（タルシン）や岩を積み上げた仏塔（チョルテン）がある。高山的な岩場の周辺には幻のブルーポピー、他にレッドやイエローポピー、小型のエーデルワイズ等見渡す限り小さな花々が広がっている。

更に岩陵を踏んで苦しい登高を重ねて、4500メートル圏内の小さな氷河湖を探りに行く。そこには、実に世にも珍しいブルーのサクラソウの影を映して湖面が幽かに揺れていた。

平成12年7月の紀行

# 私的関西旅行

稲垣 裕

6月上旬といえば梅雨入り間違いなしですが、この時期にしか休暇がとれない所が辛いです。名古屋の妹宅に寄って愛知万博を1日雰囲気だけかじってから大阪の実家の老親宅に泊まってあわただしい親孝行(?)をすませる。84才の母のおにぎりを紀伊田辺までのJRの車中で味わうが握り方が弱くてボロボロくずれるのが何か感慨深い。田辺のビジネスホテルに泊まり、近くの温泉「弁慶のさとの湯」につかり英気を養い翌日からの山行に備えた。翌7時半、熊野古道中辺路コースの始点滝尻（たきじり）までバス40分。茶店もまだ閉まっており周辺は静かだ。滝尻王子からは一気に山歩きの登りで汗をかきつつゆっくり古道に足を踏みしめる。やがて後から中年男性が1人追い抜いていったがザックが軽そうでうらめしい。この人には翌日に逆方向から来るのに会ったので聞くと、青森から車で来て古道の一部だけをつまみ食い歩きしている由。近露（ちかつゆ）王子は温泉のある宿場町だがここで泊まると翌日の出発が1時間程遅くなるので先の継桜（つぎざくら）王子まで進み、TVでも有名な「とがの木茶屋」が今宵の宿。例の厚化粧のお婆さんが夕食時に顔を出して近くに横浜の大口から嫁に来た人がいて今も「～じゃん」としゃべっていると告げる。客は私1人、関西の夏らしく旬の魚鱧（ハモ）料理が出た。食後板長兼番頭のお爺さんと暮れゆく山波を見ながら話す。

翌朝は長丁場で、熊野本宮本社まで8時間半の行程。この辺りから古道といっても林道や国道の一部を歩くことが多く味気ないがカーブミラーで自写像を1枚。王子というのは古道のあちこちにある石碑や小さい社で、平安鎌倉時代の貴族達が護衛の武士や女官など数百人のお供を従えて熊野三山を目指した参詣道にある。京都から大阪を経て熊野本宮まで歩いたというのだが、古道のすぐ傍を車道が通っている時代では想像も難しい。苦しい登りの後三越（みこえ）峠で休憩しているとマイクロバスが到着して東京からのツアー客が20人位降りて昼食。私が滝尻から歩いてきたというところへえーっとあきれている。彼等より先に山に入って発心門（ほっしんもん）王子に着いたら先ほどのバスが待機していた。古道ツアーとはこんな便利なものだ。計画では本宮から大日越をして日本で二番目に古い湯の峰温泉へ向かうつもりが、もう疲れ果てたので旅館へタクシーで一直線。昨晚は民宿だから部屋、食事とも落差

が激しいがそれも良い。客も少なくてゆっくり湯につかる。

湯の峰からバスで15分の請川（うけがわ）へ行きここから小雲取越が始まる。中辺路を平成4年に歩いた皇太子の記念碑が古道のあちこちに建っていて（本人はご存知ないだろうけど）目ざわりである。地元の人も言っていたが彼が来る前に古道が整地されてしまい何んとも言いようがない。南アルプスにもそういう所があったのを思い出す。本日の行程は5時間半で楽勝。小口に着いたら公共の宿小口自然の家は客が1人ではコスト高なのでと近くの民宿「ももふく」を紹介。この民宿は良い。うまい地酒を用意しているし親父さんが山に詳しく明日の大雲取越のチェックポイントを教えてくれた。小口の民宿はこの1軒しかないからこれから繁盛するだろう。古道歩きのヤマ場大雲取越だが曇り空でアヤシイ。しかもTVでは今日から関西も梅雨入りと放送していたから雨具を使うことになるだろう。

本日は7時間半程の行程で那智大社、那智大滝へ向かう。越前峠まで2時間前後で歩いたら後はラクだと親父さんが言っていたのでそれを目標にして歩くが、やがて雨が本降りになって雨具がうつつしい。足元は石畳が目立って滑りやすいので歩みも遅れがち。山から紀伊の海が見えるという舟見茶屋はガスの中で、宿のおにぎりをあわただしく食べる。もう那智大社の方が近いという所で逆方向から登ってくる若い男女3人とオンブされた赤ちゃん連れに会う。今日唯一山で会う人。雨中に3人共Tシャツで小口まで行くとは大胆だなあと感心し驚く。2時半にやっとケバイ色彩の那智大社着。ここまで来ると観光客でにぎわっており、隣りの青岸渡寺（せいがんとうじ）の方が落ち着いた色あいでホッとす。御本尊の大滝まで行くと雨のためか水量が多くて迫力がありつい拝んでしまう。大門坂の石畳を下るのが最終の古道歩きだが、雨中に石段を歩くのはもうアキアキしたのでバスで那智駅へ向かう。駅前には丹敷（にしき）の湯があり汗を流し4日間の古道歩きを終えた。マグロ漁で有名な勝浦へまわり、刺身定食の夕食。ここからは池袋までの夜行バスが出ているのが有難い。

古道といっても本来の石畳の道はごく一部であとは普通（たとえば奥多摩の1000メートル未満の山の杉の造林地）の山道でした。途中の王子や地蔵や茶屋跡が往時をしのばせてくれるのが古道らしさでしょうか。雨量の多いことでは有名な地域ですから4日目に降られたのはこの時期では運のいい方だと思いました。

# 山旅；思い出館

茂木 武

## 北海道の名山を歩く

羅臼岳：山の仲間と道東の三山を登った。15日朝、岩尾別温泉前から出発。日本の東北端。オホーツク海に突き出る知床半島は全てが山だ。弥三吉水、銀冷水など水場は豊富。羅臼平から待望の山頂へ。多量の残雪で思わぬ雪山ムードに。羅臼岳から雪渓をくだる途中、どこかの一人が雪道を転がり落ちてきた。数人で必死に受け止めた。下方には岩場があり危なかった。

斜里岳：清岳荘前から出発する。最初から沢沿いの道に行く。下二股から沢の斜度が増してきた。羽衣の滝、方丈ノ滝など現れる。上二股で水流は殆どなし。馬の背から展望は開けた。ハイマツの稜線を登り斜里岳山頂に着く。知床連山、オホーツクの海岸線が印象的だった。

雌阿寒岳：深田久弥は雌阿寒岳は噴火で諦め、雄阿寒岳だけ登った。現在では標高の高い雌阿寒岳で決着か。17日朝、雌阿寒岳めざし出発。二合目過ぎるとハイマツ帯が続く。火山礫の荒涼とした斜面をジグザグに登る。火口壁を左回りに行き山頂に着く。眼前に阿寒富士が素晴らしかった。下山はオンネトーめざす。

小さいが青く澄んだ美しい湖がオンネトーだった。 (H6年7月歩く)

後方羊蹄山(シリベシヤマ)：北海道の単独行初日は雨。8月31日朝、比羅夫で下車。雨具を着けて出発。駅から歩く。羊蹄山は蝦夷富士と呼ばれ、道央では最高峰。樹林の中をひたすら登る。火口壁まで達し、やや右回りに進む。荒天で視界ゼロ。ピークを幾つか越え山頂に着く。頂稜の周回はやめ、同じコースを下った。

利尻岳：9月1日朝、稚内から船で利尻島に渡る。利尻岳へは正面から行かずタクシーで杓形コースを5合目まで入る。途中、小学校に寄って水を補給する。今日はすっきり晴れて登山日和だ。三眺山のガレ場のトラバースや、分岐を経て待望の利尻岳山頂に着いた。百名山病も遂にここまで来たかと思う。帰路は長官山を経て鴛泊(おしどまり)へ下った。有名な銘水「甘露泉」に寄る余裕も。

大雪・旭岳：2日朝、旭川に下車。街を歩いて美味しいそば屋が見つかった。旭岳はR/W利用の省力登山だったが、この時の写真は気に入り、四ツ切りにした。

十勝岳：白金温泉に泊り3日朝、タクシーで望岳台まで入る。避難小屋まで道は明瞭。火山礫の斜面を登りつめ、十勝岳山頂に着く。活発な火山活動は今も続き、時々道わきに噴煙が見られた。

(H6年9月歩く)

## 奥多摩三山

11月2日、紅葉たけなわの奥多摩三山を縦走した。五日市―数馬はタクシーで入る。8時30分出発。落葉を踏んで稜線へ。楨寄山は以外に好展望だ。褐色に染まる山並前景に白銀の富士山がくっきりと迫力。三頭山は人の気もなく山頂を独占。軽く食事する。鞆口、風張峠まで藪こぎ下半身ずぶ濡れになる。月夜見山過ぎ有料道路を横断。小河内峠から登ると、御前山はもう射程内に入る。

奥多摩の見える草むらで昼食にする。御前山の山頂はそのまま通過。稜線くぐりは快適だ。鋸尾根の分岐から右折する。いよいよ大岳山めざす。傾いた太陽に紅葉が一段と映える。15時40分、大岳山頂に立った。夕暮れ迫る山道を私は御岳めざし、ひとり急いでいた。

(H3年11月歩く)

## 丹沢主稜

10月11日、日帰りで丹沢主稜を縦走し宿願を果たした。朝7時に大倉を出発。今日の目標は日没までに西丹沢へ。時間管理と体調が成否を握る。塔ノ岳山頂はくっきり黒々と富士山はさすがだ。びっしりとした熊笹の稜線にススキがそよぐ。丹沢山はそのまま通過。蛭ヶ岳は登山者で賑わう。11時50分。ここで昼食。

いよいよ檜洞丸の登りとなる。檜洞の小屋は無人だった。がっかり。頂上からさらに犬越路へ向かう。途中の稜線付近で、丹沢には珍しい真紅の紅葉に思わず眼を見張る。幸運にも西丹沢17時10分発の最終バスに滑りこみセーフとなる。

忙しい1日だった。

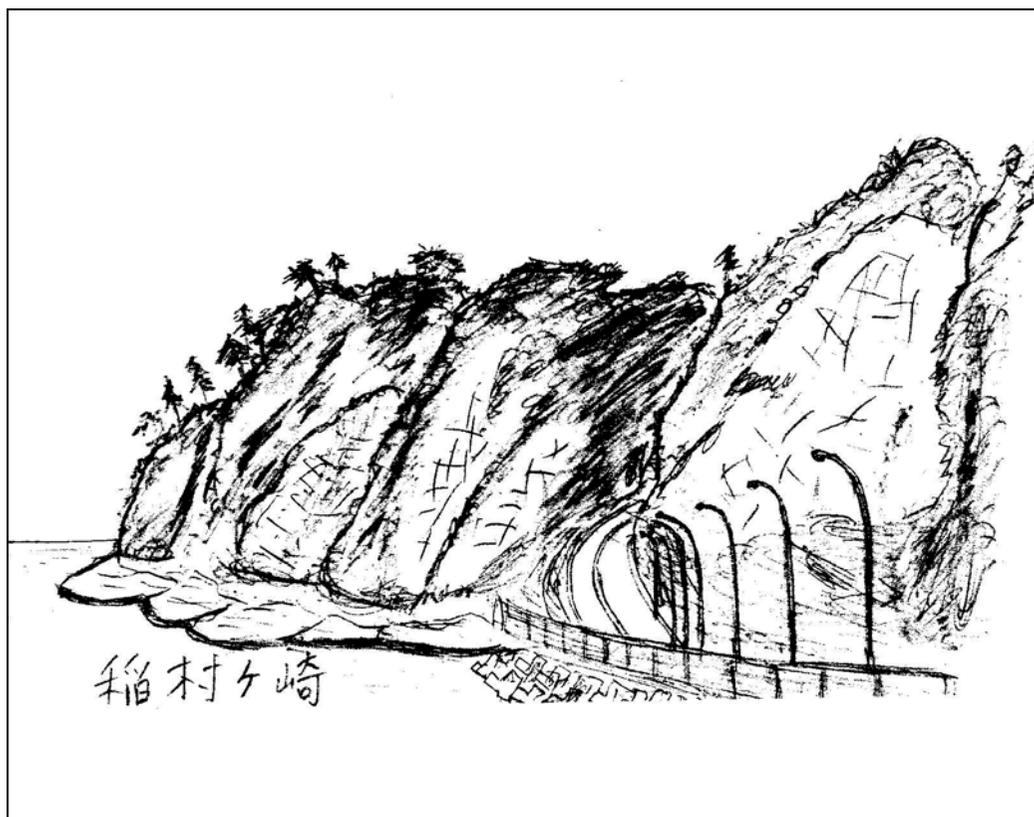
(H4年10月歩く)

## 火打山―妙高山

7月15～16日、梅雨明けを待ちきれず夜行を利用し火打山、妙高山に登った。駅からタクシーで笹ヶ峰へ。黒沢を渡り十二曲と高度が上がる。高谷ヒュッテを過ぎると池塘が現れ木道を歩くようになる。残雪の火打山頂からは雲の切れ間から焼山、雨飾山が望見でき幸運だった。その日は黒沢池ヒュッテに泊る。翌朝は激しい雨音で

目覚める。泊まった登山者の多くは下山の模様。私は雨具をつけ妙高山へ出発した。途中で雨は小止みになる。二度目の雪渓を横断した時に登山道を見失った。なんとか登山道に出ようと根曲がり竹のヤブの中で彷徨する。軽アイゼンもどこかへ紛失。結局、雪渓を戻ると対岸に道は直ぐあった。燕新道分岐に出る。雪渓の直進から左へ斜面を急登。間もなく妙高山頂へ。天気も好転。三角点から稜線を南へ。妙高大神の祠、鎖場を経て燕温泉にくだった。

(H元年7月歩く)



岡野 達

## 沖縄最高峰・於茂登岳

栗城 良

沖縄には本島に二度、宮古島に一度、仕事で行ったが石垣島は初めてで仕事でもない。定年退職後、此処に別荘を建てた友人（我々は彼を財閥と呼んでいる）に誘われて来たのだ。三月、横浜では春は名のみの寒さだが、空港に出迎えてくれた彼は、半袖のTシャツに短パン。空も海も蒼々と夏の息吹。車は大型のジープ。ヨット（数百万円だろうか。貧乏人には判り兼ねるが）を陸揚げするには、大型乗用車でも駄目らしい。濃緑樹の中を走る道路は広く、車は少ない。境界も解らぬ広い土地に建つ鉄筋コンクリートの別荘は、豆腐を寝かせたようで、台風銀座でも絶対安全だろう。目の前は海、五分も雑木林を下ると白浜。彼はマイ・ビーチと呼ぶ。ゴーグル・シュノーケルを着け、熱帯魚のような派手な魚や珊瑚礁を楽しんだり、彼のカヌーでマングローブが密集する川を遡ったり、西表島では船で中心部まで足を伸ばしたりと普通の観光旅行では味わえない一週間を楽しんだ。

そして、彼は山狂の私（当時、北海道利尻から屋久島まで飛び回っていた）に登山を勧め、於茂登岳（おもとだけ）に登ることになる。彼は麻生太郎氏が会長の日本ライフル協会、猪を追って石垣と長野の山を駆け巡るハンターで足腰に不足は無い。沖縄県最高峰とは言っても、標高は五二六米。石垣では何故か『山』でなく、総て『岳』。於茂登岳は群峰中の主峰である。名の由来は、この山系が島の大本（おおもと）であるとの伝承から大本岳→於茂登岳になったと言われている。登山口は島の南東麓の真栄里（まえさと）で、車が置ける雑木林に囲まれた空地に、数台駐車中。登山道は緩やかで、細い川岸を歩くが、砂利道で土が露呈してないので、滑る心配は無い。南国の太陽も樹々が遮るので汗もかかず、涼しいくらいだ。沢登りをするため、靴を履き替える数人の男性に追いつく。石垣は灌漑・工業・飲料用水をこの山系に頼っているのだから、別ルートで大きな川や沢がある筈。確かに遠く沢音が確認できた。山頂にはNHKの電波塔があったり、観光用の看板があったりで幻滅したが、沖縄最高峰の登山は思い出に残った。

# 朝日連峰山ある記

澤野 正明

## 鶴岡から大鳥池まで

夜行バスが到着した鶴岡は小雨模様だった。6月も下旬であり梅雨も真っ最中だから仕方がない。梅雨期でも晴れることが多い東北地方の北部とは違い、山形、新潟県境にまたがる朝日連峰は、晴れ間がそんなに期待できない事は最初から思っていた。タクシーを拾い泡滝までと言うと、今年になって朝日連峰に行く客は始めてだと運転手はいう。6月も下旬であり雪はもう溶けていて、登山客は当然入っている筈だと思っていた私は疑問を感じていたが、確かに登山客は皆無で我々だけの独り占めの山行となったのである。

この日は泡滝から大鳥小屋までの行程であった。この頃は泡滝ダムまで車が入るようになり、非常に楽に入山出来るようになっていた。以前はバス終点の大鳥集落から歩いて登り、しかもルートも違う長いアプローチと大変な労力を要したとの事であった。

泡滝から大鳥川に沿って深いV字谷を眺めながらのゆるやかな道が続く。立派な吊り橋が掛かる冷水沢を渡り七つ滝沢まで、新緑が茂るブナの大木の原生林が美しい場所である。七つ滝沢を渡ると道は急登になる。途中で2、3人が下って来るのに会うが、どうも大鳥池からの釣り人のようだった。沢が左に曲がるあたりからジグザグの急登が始まる。この地点は、太古の頃大規模な山の崩壊、地滑りで自然に出来た巨大な堰堤と云われる所である。この堰堤によってせき止められて出来た大鳥池はこの上部に存在する。標高差は200m位あるだろうか、しかし、ジグザグに切られた道は登り易くひょっこりと堰堤の上部の平坦な道となる。すぐに今夜の宿泊地である大鳥小屋に着いた。大鳥池はガスでけぶっていたが、雨も上がり快適な行程であった。

## 大鳥小屋から竜門小屋まで

今日は絶好な晴天であった。これから登る以東岳までは2通りの道がある。1本は直登の急な道、1本は三角峰経由の尾根道、遠回りになるが美しいと云われる後者を私達は選んだ。大鳥小屋の管理人氏によれば、三角峰からうつぼ峰に至る地点で強風が吹く所があると言っていたが、まさにその通りだった。何故こんな平坦な所で強風

が？と腑に落ちなかったが、あとで地図を見れば大鳥池から吹き上がった風がこの平坦な地形を越えて、出谷川の谷へ吹き下る風だったとみた。

この附近は別天地の様相を見せ、綺麗な花又花の道でもある。

さて、この秘境と云われる朝日連峰にその昔、人馬が通っていた時代があった。慶長年間（西暦1600年頃）越後の上杉家は会津に移され、米沢、庄内地方の領主になっていたとの事。しかし、米沢と庄内の間の通行には他の領主の地を通らなければならず、世は戦国時代、有事の際には困る。そこで必要なルートとして米沢の長井葉山から大朝日岳、以東岳、三角峰から北へ伸びる尾根に道を作ったと云われる。当時は只の山道ではなかったそうで、殿様から女、子供までが馬に乗って通れる道だったようである。その距離は60数キロといわれる。今でもその痕跡はかすかに残っているそうだが分らなかった。その当時もこの稜線は春から夏の花々、秋には紅葉と今より美しかったと想像される。

三角峰に登るまでの間、太陽が上ってくるとぶよの大群が襲いかかってきて一行の中には、顔やら手やら刺されて気の毒に腫れ上がった人もいた。これを避けるには私のやる手だが、根曲り竹を折って顔の前を左右に振るとまずやられない。

うつぼ峰から東側は断崖絶壁で非対称山稜をなしている。岩稜沿いの尾根をいくつか登降を繰り返して以東岳に向う。左前方に見える縦走路の稜線の斜面には不思議な模様の雪が残っているが、稜線上にはもう雪は無かった。はるか右下に大鳥池が熊が手足を広げている様な感じで見えた。以東岳からの縦走路はお花畑の連続だった。ハクサンイチゲ、ミヤマキンバイ等、虫取りスマレもあった様な記憶もある。中先鋒を越えると狐穴小屋がある。ここで昼食をとり寒江山に向かうが、ここもびっしりのお花畑であり、花又花のオンパレードで見事だった。とにかく花の種類も多く、花々に見とれながら三方境に着く。左方の天狗相撲取り山からの道を見送り縦走路を竜門小屋に向う。はるか前方に明日行く大朝日岳が見える。寒江山を過ぎ下りにかかる頃、西側から厚い雲が急速に迫って来た。これが明日の強風雨の前兆だった。明日の事を気にしながら竜門小屋に入る。

竜門小屋から朝日鉱泉へ

竜門小屋には誰もいなかった。新しい2階建ての小屋は我々だけ、夕食が終る頃、明日の行程が思いやられる様な風雨が非常に強くなって来た。夜っぴてこの風雨は

益々強くなり、小屋の壁に当たる風の音はすさまじく、2階に寝ていた女性達が怖くなって1階に降りて来た程であった。早朝の出発予定で朝食をすませて外に出て見ると、強烈な嵐の真っ最中で歩くところではない。竜門小屋から朝日鉱泉までは地図で確認すると約6時間40分程の行程であり、休憩時間を含んで8時間あれば行けるとふんでいた。従って今は見送り、少し遅く出ても明るいうちに朝日鉱泉に着けると判断していた。9時少し前、弱まって来たと感じたので思い切って9時に小屋を出た。しかし、弱まるどころか横なぐりの強い雨は体を叩き苦しい道のりであった。只、雨の中は濃霧と違いある程度見通しが効き、前方がかなり見えるのが幸運だった。大朝日の小屋に着いた頃は雨は小降りになってきた。昼食を済ませ、大朝日岳の頂を踏んで中つる尾根を下る頃は止んでは来たが、沢はかなりの大増水で登山道を洗っている状態にも遭遇した。道を踏み外したら一完の終わり危険だった。結局、朝日鉱泉に着いたのは19時だった。10時間も掛かっていたのである。あと2時間遅く出発していたら、当然、暗くなり灯具があってもあの沢の増水の道では危険で歩ける状態ではなく、ビバークは避けられなく、予約してあった宿では、我々が到着しない為に遭難騒ぎになっていたのではと思うとぞっとする心境だった。

本来ならば、小屋に停滞するのが当然であり安全なのであるが、宿泊の予約をしてあったので出発したのである。山で相当強い雨の中でも歩く経験もしているが、この日は想像を絶する様なすさまじい風雨だったが、事故もなく歩けたのは幸運であった。

近頃は携帯電話があり、朝日連峰あたりでも通話ができるのではと思うが、当時はそれもなく、無線も持っていないし、連絡手段がとれない事がこの様な事態を招く事になってしまったと思う。

朝日鉱泉の主人は、事情を察してくれて親切に対応してもらえた事は嬉しかった。梅雨の真っ最中、見事な稜線の美しいお花畑に心が和んだり、強風雨の中の歩行と相反する山行であった。悪条件の中、文句も言わず同行してくれた仲間に感謝する次第である。

# 祖母山

服部 八重子

3月末に春休みを利用して、九州の祖母山に登った。7:30 民宿の車で1合目の滝まで送って戴いた。650m 地点、山の上から太陽がピカッと光を射した。昨年同時期にプランを立てたが来れず、こうしてあこがれの山に立ち、胸躍らせた。表示のない5合目小屋迄20分も早く通過したので、これが小屋とは認識が薄かった。

9:30 ポツリ！ “なーにこれ、そのうちに白いものがヒラヒラ…。国観峠付近ではかなり降ってきた。初めて出逢う二人連れは、この上は雪がすごいので引き返したと言う。5合目から国観峠までの歩程、昭文社の地図は2時間、JT B 「るるぶ」は1時間、山溪百名山ガイドは1時間30分、この差はなんでしょう。9合目小屋では春の雪の本降り、三々五々、みんな雪ダルマになって入ってきた。ストーブが嬉しい。

尾平と道標のない方面に下山したのは、私1人だった。頂上直下にあるというハシゴが見当たらない。ガレ場を5分程下ると、大きな石が、行く手を塞いでいた。ロープが有り、下を覗くと、しんしんと降り続く雪の彼方に、道は見えない。ロープが有るから道は下に有るだろう。上るのも大変とお尻でロープを伝い岩を下りる。“アッターはしごが、貧弱なアルミのはしごが少し間を置いて3ヶ所有った。良かったー。ルートは間違っていない。笹が切り払われて、その上に雪が積もり深さが解らない。転げる様に下をめざす。1400m付近で雨に変わり、三葉つつじの鮮やかな花が溪谷を彩りやっとならしくなってきた。尾平の道標に心がほぐれて、川上溪谷の川音を聞きながらコーヒータイムにした。無事生還の喜びのオカリナの音は川の流れとハーモニー、苦い音色で、溪谷に響いた。

巷の天気予報を、信じてはいけない。1500M以上の気圧配置図を気象庁に問い合わせる事も必要です。目ではなく心で地図を読む。そしてイメージする。山へのあこがれは私の青春！ 畏敬の念を抱きつつ一瞬煌々未知を求めて旅を続けるでしょう。

# 離れ島停滞の思い出

小池 廣治

九州南端の屋久島の更に南方に奄美大島に向かってトカラ列島が散らばっている。七つの有人島と二つの無人島から成っているが、何故か行政区域は十島（としま）村と云い村役場は鹿児島港のそばに置かれている。平成13年10月各島にある一等三角点を探る本部山行が企画されたので参加することにした。

私はまだ三角点に関しては素人だが、ただただ未知の土地に行ってみたい一心で参加したが、台風21号の影響で思わぬ経験をしたので、以下時系列順に見聞を書いてみることにした。因みにトカラの漢字は吐喝喇列島。

10月13日(土)

前日23時50分発のフェリー「としま」に鹿児島南港より乗船、中之島に7時に着いて先発の本隊8名と合流した。船は千四百トンの新鋭船でレストラン完備。同船した島巡りのツアーの客と話したが、トカラ全島を巡ると云ったら大変羨ましがられた。本隊は5日前に鹿児島を出発して宝島、中之島の一等点を探訪していたが、私は例会の関係であとから単身参加することになった。小宝島に12時15分着。直ちに三角点（標高102m）に向う、頂上付近はハブがうようよ。地上ばかりでなく木の枝からぶら下がっている奴も居たが、人が登ってこないこともありぜんぜん攻撃的でなかったが、何しろ気持ちが悪かった。島に一軒しかない民宿に泊まった。海岸の天然温泉は奇趣満点であった。

10月14日(日)

8時出航の鹿児島行のフェリーに乗船。屋久島に近い次の目的地口之島へ向かった。14時口之島に到着。2泊の予定が台風のため6泊におよぶ停滞がはじまるとは思いもしなかった。

10月15日(月)

朝食のあと弁当を持って民宿ふじ荘を出発。三角点（628m）に向かった。この頃台風は東シナ海を通過していた様だが山登りには影響はなかった。島にはハブは生息せずその点は安心だが 三角点を取りまく竹やぶを切って広げたときに素手でやったため2・3日あとから手に水泡が出来て、完治するまで2週間くらいかかった。島の人に聞くと、山負けと云うそうで、竹につもっている古いほこりのせいだと云う。島の人は長い手袋で完全武装して仕事をするそうだ。山から帰ると翌日出港の船が来ないらしいと云う悪いニュースを聞かされた。2・3日は仕方がないと覚悟することにした。

10月16日(火)

6時発の悪石島行のフェリーは欠航。これから長い停滞がはじまった。民宿には新聞は来ず情報は村役場の広報とテレビに頼るのみ。島の中央にあるコミュニティーセンターに温泉があり3時から無料で入浴出来るので毎日一番にのりこむことになった。

10月17日(水)

台風は本土へ向かったが台風の余波で船が岸壁に近づけない。こう云うことはときどきあるそうで、離島のくらしの大変さがよく判った。晴天つづきなので島中の散歩と温泉で一日を過ごす。

10月18日(木)

欠航つづきでそろそろ退屈してきた。それよりも持ってきた前立腺の薬が無くなりそうで心配になり島の診療所を訪ねた。はす向かいの郵便局の局長さんの奥さんが看護師で親切に相談に応じてくれたが、置いてある薬を横浜のかかりつけのドクターに電話して聞いた所、かえって状態が悪くなると云われて飲用を中止。しばらく模様を見ることにした。それにしても島の人口150人のうち中高年が殆どなのに、島には前

立腺肥大の人は居ないという。温暖な気候と日頃体を動かして働いているせいだろうか。

#### 10月19日(金)

海岸に散歩に出掛けるが沖合を眺めているとときどき船が通り過ぎることがある。鬼界島に流された俊寛もこの様に沖合の船を眺めて泣き叫んだであろうか。身につまされるものがあった。昼頃全員が集まって対策を協議。島を脱出する方策を話し合った。漁船で種子島に渡ることも出来るが費用が高過ぎて見送ることになり、いつ帰れるか不安になったが、午後3時ごろ村役場から20日に来船すると云う情報があり、一同喜び合った。民宿のサービスは良かったが、食事は海にかこまれた割に魚が採れず貯蔵の利くマグロとか牛肉が多くて閉口した。

#### 10月20日(土)

午前6時待ちに待ったフェリーが到着、民宿の人達に送られて一同満面笑顔で出発、思い出多い口之島をあとにした。10時悪石島で三角点探訪を続けるため7名が下船、その熱意には感心するのみ。最長老のTさんと私は止む得ない事情でそのまま名瀬まで乗船し、最終便の飛行機で帰京することにした。名瀬からのタクシーでは道すがら道路にはい出したハブを見つけると車を止めて捕らえて、あとで保健所へ持って行くと3千円から6千円の報奨金をもらえると云うドライバーの話に、客を待たせてハブを退治する様子を想像して、いかにも牧歌的な南国情緒を感じさせられた。

長い旅の終りの土産話です。

# 初めての山行

和智 邦久

今から45年前に、尾瀬の話を兄から聞いたのがきっかけで尾瀬にいったのが私の初めての山行でした。上野駅から夜行列車で沼田駅へ、着いたのが午前2時すぎで夜行バスはないので始発まで約4時間駅前で待ちました。待っていた登山者はわずか10人ぐらいだったと思います。大清水から三平峠・三平下へ（当時バスは、大清水と富士見下だけでした）。初めて見る尾瀬沼、バックに燧ヶ岳の眺めに感動し尾瀬に来てよかったと思いました。三平下から船で沼尻へ（長蔵小屋付近からも出ていましたが、沼が排油で汚れるとのことで何年後かに廃止されました）。下田代十字路に着いた時、尾瀬ヶ原にまたまた感動！！。

8月中旬というのに登山者はまばらでした。元温泉小屋での初めての宿泊（お米2合と宿泊費を払う）。翌日は、平滑ノ滝・三条ノ滝を見て、下田代十字路に戻り竜宮十字路へ。尾瀬ヶ原の湿原の荒れ方に驚き失望しました。現在のように木道などありませんでした。湿原の上を歩くために普通の道になってしまったのです。この頃は、尾瀬の保存にあまり関心がなかったようでした。この場所が水源開発のため、ダムの底に沈んでしまうというような話がありました。

竜宮十字路から山ノ鼻・至仏山へ。途中で至仏山に登るという方にお会いしました。私の初めての山での出会いでした。お願いして一緒に登ることになりました。心細かったので助かりました。至仏山への登山道は荒れていてほとんど直登の状態でしたが、いろいろアドバイスを受けながら、至仏山に登ることができ、その時の感激は今でも忘れません。翌日は、山ノ鼻からアヤメ平へ（現在の鳩待峠までの登山道はありませんでした）。山ノ鼻からの登山道は、山ノ鼻小屋裏付近から山道を登るすごい道で、現在の鳩待峠からアヤメ平に行く登山道の途中に出るようになっていました。アヤメ平は湿原ではなく草地になっていたのには、またまた失望しました。富士見田代から富士見下バス停へ、ここで初めての山行は終わりました。尾瀬の湿原には失望しましたが、雄大な景色を忘れることのできない思い出の場所になりました。その後30数回いろいろな場所を歩き回っております。「初めての山行・初めての出会い」今でも鮮明に覚えています。

# 中国世界自然遺産九寨溝・黄龍を尋ねて

丹下 友恵



昨年の10月19日から9日間かけて祖父川さんから勧められていた中国九寨溝、黄龍のツアーに参加して行ってまいりました。九寨溝の名は九つのチベット族の寨(村)のある谷間からきております。Y字形に形成された溪谷で、その全長は約55キロ、1320平方キロに及ぶ風景区の中に114の大小の湖沼と17の瀑布群が点在しています。入り口の標高2000m、最も標高の高い湖は3150mもある。私が実際に観光した10月21日も入り口は紅葉真盛りであったのに頂上ではラッキーにも雪に見舞われ雪景色を楽しむことが出来た。構内の五花海、熊猫海等の湖沼全てが透明度抜群で湖底に横たわる枯木も鮮明に見え、そのコバルトブルーの美しさは筆紙では表現出来ない美しさであった。湖沼の静の美しさに対し、瀑布(滝)は動の美しさはその圧倒的水量で迫っ

てきます。近くを歩くと飛沫がとんできます。九寨溝は中国の奥地にありますが、九寨黄龍空港がオープンしてからは中国国内でも人気の観光スポットになり、日本からも上海、北京、成都から行けるので手の届く観光地になりました。構内はシャトルバスが運行され好きな所で降りて徒歩で観光します。なにしろ九寨溝は一日観光では時間が足らず出来れば二泊してY字の二つの谷を一日ずつ歩いて観光するのがベストだと思います。空港から九寨溝入り口までバスで2時間、ホテルが数多く建設されています。私は入り口近くの九寨溝シェラトンに泊ったが、その設備の良さにも圧倒されました。

もう一つ今回の旅行で中国人観光客の多いのにもびっくりしました。今中国の人口13億とされています。その内3分の1の人々が中流意識を持つとされています。4億以上の人々が我々の生活レベルに近づいていると言われるが、九寨溝・黄龍の中

国人観光客を見てもそれが実感出来、日本人と較べて若い人々が多く見られてその元気に圧倒されました。この中国が道路が整備され日本の様に車社会になりその石油の消費量を考えると、元石油屋の私はどんな世界になるかと戦慄を覚えます。



九寨溝から約100キロ離れて黄龍風景地区があります。ここは「彩池」と呼ばれる石灰化した大小3000以上の池が山の傾斜地に棚田状に約4キロ続くそれはすばらしい所です。因みに九寨溝・黄龍共に世界自然遺産に登録され前者はその美しさを童話世界と称され、後者はこの世の仙境と称されているそうです。黄龍は入り口でも標高3100m、一番の見所の五彩池、黄龍寺は標高3500mあるので完備された遊歩道をゆっくり上り、下りもゆっくりと下るべきである。念の為に酸素ボンベは携行した方が良いでしょう。一般的にツアーでは黄龍観光に4時間とりますが半日で廻るには勿体ない所です。入り口近くにホテルがありますので朝から一日かけて観光したい所です。10人位集まればツアーを組めると思います。

その後私はパンダの里臥竜で一泊、四姑娘山麓の日隆に行き山麓を少しハイキングして帰国しました。九寨溝空港のお蔭でこの二つの世界遺産が身近になりました。素晴らしい景勝地なので機会があったら是非行かれることをお勧めします。

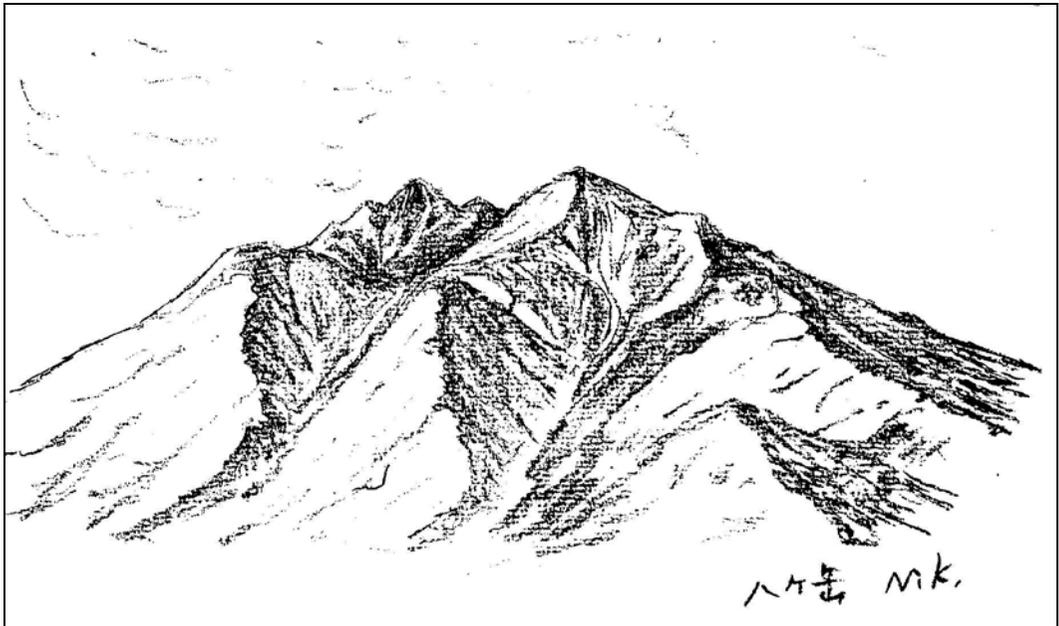
## 集中登山の金時山

服部 八重子

3月の金時山（1213m）は青空を背にドッカと雪を抱き絵の様でした。初代金時娘の父は、源氏の大將、源頼光に仕え、名を坂田金時と改めた武將の子孫で、188kgの方位盤を担いで白馬に登り、新田次郎の受賞作「強力伝」のモデルになった人です。

平日登山の為、ゆっくり金時娘さんとお話しが出来ました。直腸ガンで闘病したり、交通事故で大怪我をするなど、そんな人生の中で「皆さんに、支えられて元気になりました。」と淡々と話して下さいました。

7ヶ月で80回富士山に登り、その足で金時山に登ってくる元校長先生や、80才で3000回金時山登山記録を持つ田島笑子さんがおられる。私の誕生日と同じ高さの金時山ですが恥かしくて、私の山などと言えなくなりました。でもパワーを戴ける山です。



川野 奈津子

# アルプス交響曲

細井 陽子

リヒャルト・シュトラウス（1864-1949）という作曲家の名前をご存知でしょうか。「英雄の生涯」や「ツァラトゥストラはこう語った」などの交響詩や、「薔薇の騎士」などのオペラを作曲したことで有名ですが、1914年に「アルプス交響曲」という大作を作ったことは案外知られていないかもしれません。

シュトラウスは、南ドイツ・ミュンヘンの南西約60kmのガルミッシュというところに別荘を作り、創作活動を行っていました。そこは、アルプスを目の前にした山地で、彼のお気に入りの土地だったそうです。

シュトラウス自身は登山家というわけではなかったようですが、若いときに登った体験をもとに「アルプス交響曲」を作曲しました。この曲は、全体で一楽章となっていて、表題がつけられています（実際は楽譜にメモがつけられていただけのようです）。

- (1) 夜 (2) 日の出 (3) 登り道 (4) 森への立入り～小川のほとりの旅
- (5) 滝 (6) 幻影 (7) 花の牧場 (8) 山の牧場 (9) 林で道に迷う
- (10) 氷河 (11) 危険な瞬間～頂上にて (12) 見えるもの
- (13) 霧が立ちのぼる (14) 日はしだいにかげる (15) 悲歌
- (16) 嵐の前の静けさ (17) 雷雨と嵐、下山 (18) 日没 (19) 終結
- (20) 夜

山で遭遇する様々なドラマが1日のうちに詰め込まれているようです。私はヨーロッパアルプスに行ったことがないので、想像するしかありませんが、オーケストラは大編成で、雷鳴装置や送風機なども加わり、150種に近い楽器をつかっているというだけあり、迫力があります。また様々な主題が展開され、情景がうかんできます。好きなところは、「日の出」の厳かさ、「頂上」での感激、「日没」「終結」です。何か人生を感じさせる展開でもありますね。廉価版のCDも出ていますので、ぜひ一度聴いてみてください。

最近はおっぱら「逗子アルプス」を歩いております。初めての道を登ったり、新緑や季節の花をみつけて感動したり、身近なところにある幸せを感じたりもしています。これからも自分のペースで、よい仲間と「アルプス」を楽しみたいと思っております。

## 深田久弥像の一側面

春日井 孝行

雑誌『山と溪谷』03年12月号に、深田久弥の長男・森太郎が『父の逝った日』と題した文章を書いている。私の目にとまった3点について触れてみよう。

1点目は、深田久弥は庭をのっそりと徘徊するガマがお気に入りだったとのこと。それはスマートで軽快よりも、素朴で鈍な方を好んだせいで、写真から感じる通りの人柄に思わず私は握手したくなる。

2点目は、有名になっての功罪両面を受容した息子の最後の一文「深田久弥と日本百名山はもう私たち遺族の手を離れて、多くの人に担がれていることを実感する」との世間を見る眼である。これには私も担ぎ手の一人かと反省する次第だが、実は私は現在の百名山登山にはどちらかと言えば批判的である。それは、山名だけが大手を振って歩いており、深田作品とは遊離しているように見えるからである。本を片手に、深田と同じコースを登ろうと「文学山歩」をしている人が何人いるのだろうか。また私は金をかけて百名山に登るのより、近場の山に10回と考える単なるケチ、貧乏である。

3点目は、親を見る眼で最も冷静さを感じた以下のくだりである。「戦前の姦通罪があるころ、結婚していた父を愛した母であった。その想いは息子たちには到底はかり知れないものがあつたであろう。父の胸の上に両腕と顔を置いてじっとしている母の姿からは、まだ結婚して日が浅かつた私などにはうかがい知ることのできない、夫婦の深淵を見た気がした」と坦々と述べている。深田像を知らなかつた私は、この一文に一種のショックを受け、作家論の本を探しまくつた。

安宅夏夫『「日本百名山」の背景(深田久弥・二つの愛)』という本を読んで、離婚、再婚の詳細を知つた。サブタイトルに「二つの愛」とある通り、深田は2人を愛したのであつた。別に大騒ぎすることもない内容なのかも知れないが、私にはびっくりであつた。深田の先妻・北島八穂のある本の巻末に、白柳美彦が『北島八穂、その死、人と文学』という一文を載せており、その一節には下記のようにあつた。「カリエスをわずらい、長いあいだ病床に呻吟した末、後遺症のために歩行困難の障害者となつた。病床にある間に、夫が他の女性に子を生まれ、破婚にいたつた」

次いで私は、田澤拓也の『百名山の人(深田久弥伝)』を読んで、これまたびっくり

した。それには、昭和9年に深田が書いた文章に「或借金を背負ってしまった。向う五ヶ年間、毎月約五十円宛の支払い」とあり、またその頃のことを書いた北畠八穂の自伝的作品に「お手伝いの女性が妊娠、父親の名を明かせない子を産んで去って行く」話が、いかにもという感じで出てきたからだ。

雑誌『国文学・解釈と鑑賞』の北畠八穂特集号を読んでみたが、更に私の知らなかったことも出てきてこれにもショックを受けた。それは、深田は病気の妻八穂に小説を代作させていたとあったのだ。五十嵐康夫は、深田を「小説の書けない小説家」「エッセイ文士」とまで呼んでいる。私も読んだことがある『津軽の野づら』がそうだったとは。この代作のことについて鳥越信は、「今では誰もが知っている深田久弥の影武者」と言っているが、恥ずかしながら私は、今の今まで全くそれを知らなかった。また、上林暁の小説『山に死す』には、次のようにある。「F君が専ら登山家・登山文学者として重きをなすようになったのは、故意に文学的な仕事から遠ざかったのか、それとも三穂さんと別れて、創作的な刺戟が得られず、止むを得ず書けなくなったのか」

雑誌『山と溪谷』03年3月号に近藤信行がこう書いている。「『日本百名山』で読売文学賞を受賞した直後、深田夫妻が鎌倉に小林秀雄氏を訪問したときである。『お前さんには山があつてよかつた』と小林さんに言われたという」

小林は友人として、小説の書けない小説家とまで言われた深田に、こう慰めの言葉を掛けたのではなかつたのか。

作品の評価と私生活との話になると、すぐ思い浮かぶのは太宰治の名である。そこで、その太宰の『狂言の神』に鎌倉文士・深田久弥が登場することについて、最後に触れてみよう。今夜、自殺しようという主人公は、死ぬまでの数時間を幸福に使いたいと考え、会ったこともない尊敬する作家・深田久弥を訪ねるのだった。蓬髪花顔のあるじに迎えられ、将棋を差して寛いだり、2人で庭を眺めたり、主人公は深田の小市民の生活を知った気がするのだった。大家にならずともよし、傑作を書かずともよしの、作家らしからぬ作家に会えて心とんだのであつた。

神格化された深田久弥像にも陰の一側面があり、我々と何ら変らぬ一人間と知り、普通の山好きと見直し改めて深田ファンを続けることにした私である。

# パソコン・デジカメ・インターネット

齋藤 郁夫

なにやら三題話といった感じのタイトルですが、その通りくだけた内容のものを、思いつくままに適当に、書いてみることにします。

世の中IT時代とかで、猫も杓子もパソコン、携帯電話、デジカメ、インターネットと騒々しい、慌ただしいことになっています。この手のいわゆる「デジ物」に私自身も否応なしに巻き込まれており、苦労話や楽しいことなど、幾らでもあります、かいつまんで書くことにします。

まずはパソコン(以下PC)、私の場合には定年退職の5年程前(1995年頃)から、零細企業の私の職場にも導入されて、当初は余り乗り気ではなかったものの、触れているうちにその機能に魅了されてしまいました。確かに業務がPC処理を前提として、日々変化して行くのですから、何とか追いつくのに四苦八苦でした。もともとカメラを触るのが好きでしたので、仕事の機器とは思わず、趣味や遊びの世界にもPCを応用できないかな、と発想を切り替えました。当時は幸いにも、静岡市郊外に単身赴任し、職場へはマイカー通勤で片道10分、残業も余り無く、自由になる時間だけは相当あり、もし私が男前で金があったなら、華麗な単身生活を楽しんでいただろう、と思える良い環境でした。地元のPC専門店でも適当に一式揃えて社宅で使い始め、インターネットもNIFTYに加盟し、PC通信で色々な情報を入手、提供できることを体験しました。特にNIFTYの「山のフォーラム」には、様々な各地の山の最新情報が玉石混交とはいえ、印刷された文書・雑誌などより遥かに早く、有益なもので溢れていました。社宅に帰り、簡単な夕食を手作りし、ビールを飲みつつPCの画面を見て、食事をする「ながら族」となり、テレビは殆ど見ないようになっていました。

インターネットの活用分野は、恐らく無限と言えそうですが、PCの画面を追いかけていくうちに、思いがけない「お宝もの」に出会うこともあり、また、世界の著名な美術館、博物館、名所、旧跡、観光地のホームページ(以下HP)などを辿っていると、時間を忘れて熱中することもありました。特に最近HPごと日本語に翻訳することも可能となってきて、言葉の壁は気にすることもなくなり、殆ど大意は伝わりますので、実に有難い良い時代になって来ました。

デジカメは、ここ4～5年の間に急速に発展・普及し、今やフィルムカメラを壊滅

状態に追い込んだ感じがあり、毎年のように高性能・廉価な新型が発売されますので、PCと同様に購入時期の決断がつけにくい「デジ物」商品です。

デジカメの良い点は、本体一式とメモリーの購入費用以外に電池を充電または交換するだけで、何枚撮影しても費用がかからないことです。従って目にした風景や物を何でも記録しておき、後でPCの画面で選別し、気に入ったもののみを、自分でプリントするか、カメラ店でプリントさせるのが良いと思います。

私は、フィルム時代の一眼レフカメラのレンズを流用できるデジカメを使用し手当たり次第に何でも写して楽しんでおります。但し、人物を写す際には要注意、見知らぬ女性、幼児を撮ると、あらぬ疑いを掛けられる恐れが多分にあります。そこでお勧めしたいのが、山歩きに持参して、特にコースタイムを書き留める代わりに、活用することです。機材も小型化・軽量化が進み、タバコ箱以下のサイズもあり、フィルム代わりのメモリーカードも廉くなりましたので、惜しげ無く撮影することが可能です。私は山行以外も、外出の際には必ず持参し、特に近所で季節の草花を片っ端から撮影し続けて、「ご近所の花地図」の完成を目指しております。日用品、食材の買い物と散歩を兼ねて、毎日のようにコースを変えて歩きつつ、草花や風景の写真を撮り、我が家から片道5KM程度の地域は全て歩き終わりました。暫く行かない中に宅地造成工事で、見事な山林が切り崩され、お気に入りだった里山風景が、失われてしまった場所も何箇所もあり、記録しておいて良かったな、と思う場所が少なくはありません。

インターネットの楽しさは、既に書きましたが他にメールの利用があります。電話、特に携帯電話の手軽さには及びませんが、使い慣れると写真や図面まで添付して送れるので、実に便利なものです。更に深くなると、個人でのHPの開設・運営もあり、また最近ブログと称するものも出現してきて、奥が深いようです。

PCは苦手と思い込んでいる方達には、先ずはデジカメとのセットで、始めてみることをお勧めします。初期費用も維持費用も気にされるほどにはなりません。

適度に頭も指も使い、能動的にインターネットでの情報入手も出来ますし、受動的なテレビ相手よりは、遥かに楽しい時間が持てると思いますので・・・・・・。

私は、中高年齢層こそPC、デジカメ、インターネットを活用すべきと考えます。要は仕事ではなく、遊びで使うのですから、マイペースで触り続けることです。

ここまで、この拙い文を読まれて、PCを始めてみようかな、と思われた方!! 私でも、何がしかお役に立てるかも知れませんので、お気軽に声を掛けて下さい。

# わが登山人生

金本 勲

我が登山人生の始りは、昭和31年大学3年生の時に同じ研究室の仲間に誘われて高尾山に登ってからです。当時は下宿生活ですので弁当を作ってもらえず、パンを持参しました。当日は快晴で頂上での昼食が実に美味しかったです。これが登山への病み付きです。それからは高校時代、大学時代の友人を誘って、大菩薩峠、入笠山、吾妻耶山、尾瀬ヶ原、その他、多々登りました。

昭和33年、22才で就職してすぐ、会社の山岳部に入部しました。先ずはトレーニング。丹沢の大倉尾根を、夜懐中電灯を持って、砂袋を入れたザックを背負って、先輩に尻を叩かれながら登り続けました。

昭和33年ごろのザックは現在の縦長でなく、横巾が広く、布地のキスリングでした。縦走となると山小屋が少ないため、テント持参になりますが、布地でポールも鉄製であり、雨に降られたら、テントとキスリングが水を含み、おまけに乾燥野菜も無く又家庭用の米を持参し、飯盒で炊いたので、荷物が大きく、重くてキスリングを背負うと肩にめり込んで痛く、何でこんな辛い山登りをするのだろうと思っていました。

入社して初めての本格的な山行は昭和33年7月19日～21日テント持参での南アルプス鳳凰三山の縦走でした。夏休み利用ですので、台風の予報がありましたが日程変更ができず強行しました。予報通り途中風雨が強くなり、前にも後にも行けず、予備の食料も少なく、テントの中でお腹が空かない様に横になり、天気のリcoveryを待ちました。一方会社連絡は当時携帯電話も無いためサブリーダーが強風の中を下山して電話をしました。結局一日遅れで無事引返すことができました。この体験により、それ以降の登山は安全第一をモットーに登山活動を続けました。

昭和34年に後立山連峰（白馬岳～鹿島槍ヶ岳）をテント持参で縦走しましたが、キレットが恐くて死ぬ思いをした記憶があります。平成14年8月30～9月1日に新ハイキングクラブ横浜支部山行で小倉さん、山田さんと3人で後立山連峰に再挑戦しましたが、キレットはよく整備されて楽しく登山ができました。近年は登山道も整備され、山小屋も増えて登山が安全で、楽になった様に感じます。

昭和36年に八ヶ岳をテント持参での縦走では好天に恵まれすぎて、7名全員が唇にケロイド状の火傷をしました。

昭和38年に潤沢にテントを張り穂高連峰をアタックしたことがあります。初日に女性がお腹が痛くなり、サブリーダーが連れて下山した事もありました。

私も一度だけ高山病にかかったことがあります。富士山を息子と二人で登ったときです。私が48才頃、息子は高校時代山岳部に在席した実績がありますが、まだ息子には負けないと過信して五合目より八合目迄早登り競争をしました。翌日、目を覚ますと吐き気がして高山病の症状です。息子にザックを2個持たせて、私は空身でやっとな登頂する事が出来ました。

いろいろとトラブルを列記しましたが会社勤め38年間に楽しい登山も沢山有りました。思い出の筆頭は槍ヶ岳の家族登山です。妻を槍沢ロッジに待たせて、息子と槍ヶ岳を登ったことが有ります。槍岳山荘に着く頃には風雨が強くなったので私は槍岳山荘で待機し、息子は単独登頂して、無事2人で妻の待つ槍沢ロッジ迄戻り、翌日河童橋で遊んだ楽しい登山でした。

40才代、50才代は会社の仕事が忙しくなり、あまり登山が出来なくなりましたが、平成8年に会社を定年退職してから登山ざんまいを決め込んで、川崎に事務所があるハイキングクラブに入会して第2の登山活動が始まりました。北アルプスから東北の山々まで高い山から低い山までバスをチャーターしたりして山登りしました。当クラブの会長は私以上に安全登山をモットーにして、危険なところは避ける、必ず下見をする、体調の悪い人や歩けそうも無い人は参加させない等いろいろ厳しく指導して頂き、私の安全登山は増幅しました。

平成10年に更に巾広く登山するため、新ハイキングクラブに入会して第3の登山活動が始まりました。北海道から九州まで多くの山々を登っていますが風雨が強くなると安全ルートに変更したりして、安全登山を楽しみながら続けています。しかし最近体力の衰えを感じ、現在スポーツジムに通い、身体を鍛えています。何才まで登山が出来るか！

長年にわたり先輩達に指導して頂いたお陰で怪我もなく、事故もなく登山を続けることが出来ました。微力ながら少しでも御恩返しが出来ればと考えています。

## 岐 路

岡野 達

平成7年、私が横浜支部に入会して6年が過ぎていた。性格が災いして今一つ支部の皆に溶け込めないうでいた。体力、脚力が弱かったので強化したいと思ひ、その年の10月からジョギングを始めた。その後走友会に所属し、週一回の朝練、マラソン大会への出場と走ることが楽しくなり、ハイキングの方は足が遠のいていった。ジョギングを始める前の私は消極的で引っ込み思案の性格だった。最初は走るのを見られるのは恥ずかしかったが、だんだん見られることが快感に変わり前向きな性格に変わっていった。以来、横浜支部の例会、山行にはたまに顔を出すのみだった。支部ニュースに花のスケッチを月一回掲載して貰う程度で、私と支部は一本の細い糸で辛うじて繋がっていた。

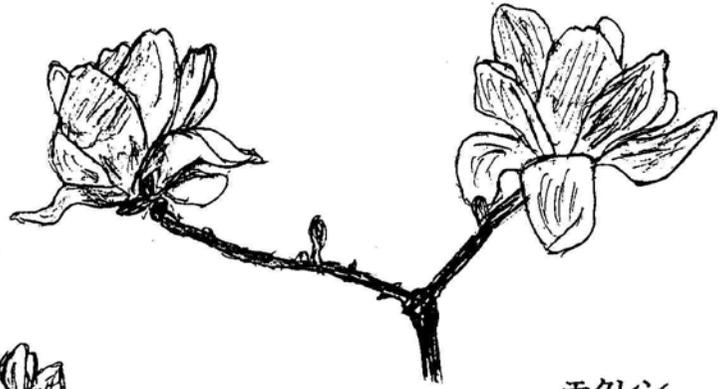
平成14年になり、新ハイに在籍していることに疑問が生じてきた。「新ハイを辞めようか」という考えが私の頭の片隅にちらつくようになった。12月に入りインターネットであれこれ検索しているとスノーシューという言葉が目に止まった。さらに検索していくと八ヶ岳歩こう会主催のスノーシューイング飯盛山に参加を呼びかけていた。是非スノーシューを体験したいという思いが日増しに募っていった。思いきって支部のKさんに手紙を書き同行をお願いしたら、快く応じてくれた。そんな事がきっかけとなり横浜支部の方へ足が向くようになり、私が支部の山行係を引き受け、皆を引率して歩いてみたいと思うようになった。平成15年に6件も山行係を引き受けてしまったが、今考えても、なぜいきなりそんなに引き受けたのか自分でも解らない。堰を切ったように突っ走ってしまった。

性格が変わらなかつたら、スノーシューに出会わなかつたら、Kさんが応じてくれなかつたら今の私はないだろう。今は山行係を引き受けたことにより、長いブランクを乗り越え支部の輪に入れるようになった事を感謝している。いっそう、支部の役に立ちたいと心から思っている。

(平成16年12月)

その後、平成17年から支部ニュース、羊歯の編集に携わり、支部の皆様のお役に立てたことを誇りに思っている。

# 春



モクレン



サクラ

# 爛



キブシ



レンギョウ



トサミズキ

# 漫

岡野 達

# 富士バルラインによせて

佐野 淳一郎

富士スバルラインの終点、富士五合目は、夏の間、山頂を目指す登山者と景観を見ようと車で来た人でにぎわう。かつてうっ蒼とした森の中であって、信仰の富士として崇められ、富士講の昔から登山者が登る前に必ずお参りをした御嶽神社は立ち並ぶ食堂に追いやられてしまっただけでどこにあるか分からない。

その代わりに食堂から音楽が流れ、客の呼び込みがスピーカーから響く。喧騒な音楽も、いかにも安っぽい色どりの建物も「どうせ一度しか来ない」という観光客と受け入れ側の思惑が一致してのことだろうか。亜高山地帯にある日本を代表する観光地としてはあまりにもお粗末な光景だ。

富士スバルラインは昭和39年、日本では初の山岳観光道路として各方面の脚光を浴びて開通した。

山に向かって進む道路は途中右折して一旦富士山西側の大沢の手前まで行き、そこから左折して高度をかせぎ五合目の森林限界にあたる2300mに達する。この観光道路のおかげで富士山にも簡単に登れるようになり、素晴らしい自然を肌で感じることもできるようになった。その反面、道路に沿って自然破壊が目立つようにもなった。道路は巨大な富士の中腹の四分の一周を>の字に削り取ったのである。

亜高山地帯に入るとトウヒ、シラビソ、ツガなどの針葉樹が道の両側100m以上にわたって白く立ち枯れて無残な姿をさらしている。建設後10年の間に1年1万本以上のシラビソが枯れ続けたといわれている。50年近く経った今でもその破壊は進んでおり、朽ち果てた樹木の後には未だに大木は育っていない。

道路建設によって、谷側の森林には残土が捨てられたため、苔や樹木の根が土砂で埋められて呼吸困難となって枯れていった。山側は森の中に日光が差し込み、さらに削り取られた道の壁面から水が流れ出るため土の水分が不足してコケが枯れ、森の中の土壌がかわき水分を十分に必要とするシラビソなどは枯れていった。

10年位経ってからこの自然破壊に気づいて草の種をまいて緑化を進めたが、帰化植物や里にはえる草が繁殖して今までの植物が追いやられている。ノリ面に吹き付けた種子が外国産であったためである。また、殆ど毎年おきている道路を埋め尽くす砂礫なだれもすさまじいの一言に尽きる。

地域活性化、森林の再開発を謳って盛んに「OOライン」が建設されてきたが、道

路建設による自然破壊の傷跡は、スバルラインに限らず多くの林道に残されている。

白く立ち枯れた樹木の姿は植物社会の秩序を考えない人間の一方的な開発だったことを教えている。

このごろ自然保護の声が聞かれるようになった。「木に会う」の著者高田宏氏は、書の中で「さんざん乱開発しておきながら、自然保護という言葉の傲慢な響きが恥ずかしくなる。人は長い間、自然を敬ってきたのにいつの間に自然を保護すると考えるようになったのか」という。こんな基本的なことを私たちは長い間忘れていたようだ。

夜の吉田口登山道は五合目から山頂まで登山者の灯が絶え間なく続く。昼間に来て夜登る人たち、朝着いてそのまま登る人たちいずれも疲れの限界をさまようようにひたすら頂上を目指している。この人たちのゴミの持ち帰りは余り見られない。それどころか何処にでも捨ててしまっている光景も見られる。

かつて富士山を「世界で私の見た一番汚い山の一つ」とイタリアの登山家ラインホルト・メスナー氏は評価した。

その後、10年振りに来日した折「初めて登った時に比べ、きれいになっているのに驚いた。やればできる、というモデルにしてもいいのでは」といった。これは彼の登る前に行われた清掃による成果でもあった。清掃は静岡県側では三千人近くの人々、山梨県側では千人余りの人々の参加を得て大規模に行われたのだ。

山好きの人たちのゴミの持ち帰りはようやく定着してきたようだが、10人で山に入れば山道の踏込み、苔の踏付けなど細かな環境破壊はどうしても免れない。山に入ったらこんな思いを一度は持ちたいものだ。こんなことを思うようになったのは年のせいだろうか。

こんな汚れているといわれる富士山にも美しい自然と美しい環境が秘められている。森林限界にあたる五合目の雑踏を避けて、中道を西に進めば褐色の砂礫の中に緑色のオンタデと空の青さのコントラストが素晴らしい光景を見せる。風雪に耐えた背丈ほどの落葉松やダケカンバの見事な林が続く。点在する寄生火山の噴火口を過ぎて大沢に着く。

大沢の崩壊はもの凄い。かつては山開きになると大沢の手前のお助け小屋のオヤジさんが横断の道をつけてくれていたが、今はそれどころか沢に入ることもできない。

天狗の庭に戻って一步旧登山道の森林地帯に入れば、無数の植物群と小鳥が顔を見

せる。針葉樹が太陽の光をさえぎり、苔むした大地がうねって旧道の三合目まで続く。北八ヶ岳の苔むした光景が浮かんでくるが、規模はその比ではない。

こんな光景に浸かることもなく登山者はひたすら頂上を目指し、車で五合目に来た人たちはキーホルダーとか絵ハガキなどを買い漁り、岩の富士を眺めてあたふたと帰っていく。

勤勉という美德を身につけてしまった私たちは、遊ぶことにも目的に向かってまっしぐらに進むようだ。周りの人の迷惑や心配も気にせず、ふらつきながら体力の限界で歩いて頂上を目指す、そんな光景によく出会うが、それでも頂上に行ったという満足感を持つ人たちには何と評価していいのか分らない。

こんな目的一辺倒が、一方では莫大な国の税金を使ってがむしゃらな自然開発を推し進め、登る人たちは環境汚染を繰り返してしまったのだろう。安っぽい色どりの建物も喧騒な音楽もそうかもしれない。

どっかりとかまえる岩肌にもたれて、広大な風景の中にまどろんでしまうような、ゆったりと過ごす山歩きができれば、山の印象も山の思い出も変わってくるだろうに。

(雑誌 『新ハイキング』 掲載の一部です)



岡野 達

# 思い出すままに

北村 襄

山仲間の友情に包まれ気がついたら、はや三十年の年月が流れ、私の人生の三分の一近くを横浜支部と過ごしていた事になり大変嬉しく思っています。

思い起こせば頂上迄、あと50m位の所まで登って居るのに、突然の激しい雷雨の為、登頂を断念し30分程降りて来たら、辺り一面に赤トンボが舞っていた越後の荒沢岳。本当に山の天気とナントヤラを痛感させられました。

また氷河時代の生き残りと言われる、高山植物の北岳草に会いたくて何度も登った日本第二の標高を誇る南アルプスの北岳、四度目にやっと会うことが出来た純白の花、よくぞ何千年もの永い間、風雪に耐え生き抜いてきた生命力に感動させられました。その姿は写真に撮って今も私の居間に飾ってあります。

また高山植物の宝庫でもある秋田県の森吉山も何度か訪れ、斜面一面に咲く花々に疲れも忘れシャッターを押し心の底から癒されました。

北海道の十勝岳では、頂上で出会った北キツネが麓のバス停近くまで付いてきたり、その夜、宿泊した旅館でキツネ目をした仲居さんが出て来てビックリしたり。

また山小屋では、いろいろな不思議な事が起こるものです。私が実際に経験した事を幾つか記して見ます。それは支部山行の雪山訓練でのこと、冬の一夜を過ごした大菩薩の福ちゃん荘での体験です。夜中に戸を開けるコトコトとする音に目覚め寝返りをしようとしたが金縛りにあった様に動けず、明るる朝、そのことを話したら自分もそうだったと言う人が複数も居ました。

秩父の甲武信岳の山小屋で夏休みの間だけ来るはずのアルバイトの二人の女性が予定の日を過ぎても来ず、行方不明になっていると、夕食後、小屋の主人から聞かされ、その夜は母屋から離れて居るトイレに一人では行けず仲間と連れだって行きました。その日も複数の仲間が金縛りにあった様に身動きが出来なかった経験をしています。よく疲労が重なるとそのような状態が起こると聞くが単に、それだけでは無い理解に苦しむような現象があるのでは……？

ちなみにその女性たちが見つかったとは、いまだに聞いていません。

とにかく山は私の人生にとって善きにつけ悪きにつけ自然という偉大な師匠であり、また健康の源でありました。

# 徒歩日本横断の進め方

茂木 武

私は平成2年夏に「歩く日本横断」を達成しましたが、日頃から登山に励んでおられる皆さんにも、「歩く日本横断」に挑戦するのはどうでしょうか。そのお手伝いが出来たらいいなと。その進め方について書いて見ようと思いました。

まずご自分で「日本横断をやろう」と決断してください。そして極く日常的な登山行動の、長年の積み重ねの結果達成されるものです。誰しも最初は単山登山ですが、次第に縦走に興味を持ちます。特に夏山の縦走こそが登山の醍醐味です。

「徒歩日本横断」も最初是一个の縦走から出発です。その縦走を積み重ねます。大体お分かりかと思いますが「日本横断」は太平洋から日本海までです。

- 1 方法としては①登山実績の継続方式を。②登山家なら著名な頂稜に行くべき。
- 2 ルートは湘南海岸—箱根—丹沢—奥多摩—奥秩父—八ヶ岳—霧が峰—美ヶ原—北アルプス—日本海までとなります。
- 3 歩く方向は原則は北へ、西へですが、こだわらずに逆でも良いと思います。
- 4 地図を用意する。地図は20万図で横須賀、東京、甲府、長野、高山、富山の6枚です。実際に使用する地図は2.5万図、昭文社の各地図となります。  
(地図上に貴方の足跡を、赤線で記入してゆきます)

次に主な縦走の内容を記します。

- 1 湘南海岸—湯本—明神岳—金時山—矢倉岳—新松田 縦走
- 2 新松田—最明寺—寄(やどろぎ)—雨山峠—鍋割山—塔ノ岳 縦走
- 3 塔ノ岳—丹沢山—蛭ヶ岳—焼山—伏馬田 縦走
- 4 伏馬田—石砂山—石老山—相模湖—陣場山—和田峠 縦走
- 5 和田峠—三頭山—奥多摩湖—石尾根—雲取山 縦走
- 6 雲取山—甲武信岳—金峰山—瑞牆山荘 縦走
- 7 瑞牆山荘—信州峠—横尾山—飯盛山—野辺山 縦走
- 8 野辺山—赤岳—天狗岳—北横岳—蓼科山—白樺湖 縦走
- 9 白樺湖—車山—和田峠—扉峠—美ヶ原—松本駅 縦走

- 1 0 松本駅—鍋冠山—常念岳—大天井岳—槍ヶ岳—双六岳 縦走
- 1 1 双六岳—烏帽子岳—針ノ木岳—鹿島槍岳—五竜岳 縦走
- 1 2 五竜岳—白馬岳—朝日岳 縦走
- 1 3 朝日岳—犬ヶ岳—親不知海岸（日本海） 縦走

その他、細かいことですが、ルート中にバス利用がある時は後で歩いて下さい。  
全ルートを通して、歩き残しの空白埋め作業は必ず、最終回、朝日岳—日本海の  
縦走の以前に完了しておいて下さい。貴方の挑戦と、ご成功をお祈りいたします。

次に私の「徒歩日本横断」の場面の一部を参考までに再掲しました。

8月25日朝、夜行で白馬駅に着きタクシーで猿倉へ。晴天には恵まれる。猿倉を6時に出発する。白馬尻では雪解け水が音を立てて流れていた。むろん雪渓は通行不能で、右岸沿いに秋道を登る。周囲はすっかり秋の気配だった。白馬岳からは縦走路を快適に進み北へ。三国境、雪倉岳を経て朝日小屋に入る。「梅海新道はかなり荒れていますよ」と小屋の人の話だったが、今さら後には引けない私だった。

翌26日はいよいよ待望の終曲。5時半に小屋を出発。まず朝日岳に登頂する。北へくだって梅海新道に入る。途中2度ほど道を見失ったが地図、コンパスで元に戻り事なきを得た。白馬連峰がしだいに遠ざかる。犬ヶ岳に着いた。ここがほぼ中間点だ。梅海山荘を覗いて見たが、人の気配はなかった。普通ならここへ泊るのだが、先へ進む。

黄蓮という水場探しで時間を浪費する。白鳥山、尻高山と過ぎ、鉄塔の所で休憩する。見ると前方に日本海が広がっていた。なにか波の音さえ聞こえる。

「とうとう、やって来た」大きな感激だった。山道を駆けるようにくだった。日没の迫った親不知の海岸は、岩礁に荒っぽい波しぶきを上げていた。

(平成2年8月歩く)

## 山女を休業して

谷 真理子

山が大好きというこの私、元気な時は体が動くし、頭の中も働かせて冗談も言っていたけど、五体満足の有り難みを忘れてしまいがちでした。

私にとって今年4月下旬、誕生日の前日に、仕事への出勤途上で、駅ビルに入ろうとした所で、もう少しでぶつかりそうになった見知らぬ中年女性をよけようとした時、どういうわけか靴先が床に敷きつめてあるセメント（粒状）にひっかかり、棒が倒れるがごとく前に転び、左膝の関節の骨の一部を剥離骨折してしまいました。

その後、一ヶ月松葉杖を使用し、そこから先は山用の登山杖を使用して歩行訓練をしました。山に入っている人はリハビリの回復力が早いと、医者が言っていました。

8月より仕事に復帰しました。今ではウォーキングをしたり、里山へ入れるようになりました。あせらずにゆっくりと、足を元の調子へ戻して、皆様と山行を共にさせていただきたいとおもいます。そのうちまた、賑やかな私ですが、ご一緒させていただきます。

P. Sです。靴屋さんが言うことによ、安物の靴は先端が、下へ向いていると言っていたのを、松葉杖をつきながら思い出したのでした。当日使用した靴は全く、その通りでした。（今では、後悔先に立たず ～～～～～～）



岡野 達

## 皆様と歩く楽しい思い出

鶴巻 勉

創部 50 周年の歩みの継続は、皆さん方の結束と歴代の支部長及び係を務めて来られた方に、唯々敬服を致します。

入部歴 6 年の私、多くの思い出を作らせて戴き有り難うございます。入部許可試行の第 1 回目は大山三峰山を思い出します。約 20 名の参加者が私をホローして頂きながら歩いた暖かい気持ちと、下山して林道のトンネルを過ぎたとき、本日のおまけの山と称して鐘ガ岳に昇り部員のパワフルな脚力を見て以来、今でも通勤途上の階段は、自分の足では昇っています。

横浜生まれの私が始めてハイキングを経験したのは、中学 2 年の国語の教科書に「笛吹川を逆登る（西沢溪谷）」の紀行文が終了したときに教師から歩いてみないかと誘われ、クラスの数人と参加、さらに、夏休みに富士山に登ったときに、非常食の持参や海拔が高く成ると気温がどんどん下がる体験をした思い出、丹沢縦走途中の原小屋の女ご主人（宇治市出身）から頂く抹茶が美味しいと、妻から誘われ、数度お茶を頂く昭和 40 年—26・7 才の頃のハイキングの思い出、その後原小屋の女ご主人は当時の蛭ガ岳の主人と結婚して原小屋は廃業となりました。

また企業内で深田さんの 100 にかぶれた人や他の人を含めて 23 名全員で終了したときは私 58 歳の思い出のハイキング、年金暮らしになってからこの会にお世話になりハイキングを続けて来ましたが、近頃、年を重ねると共に、自分の歩ける山に、限りが見えて来たこの頃ですが今後も思い出作りと健康保持のために、歩き続けたいと思っています。



川野 奈津子

## 天城万三さんの手紙

熊谷 松治

前略「夢のあと」拝見。驚きました。奇遇ですなあ。私も古河の人間です、いや「でした」。

昭和 13 年商業学校卒で古河電工入社、一時退社（退職金つき）しましたが、昭和 20 年 1 月再入社。昭和 25 年古河電池独立に伴い移籍（また退職金もらった！）以来 55 歳定年までロクをはんで、昭和 51 年退社。こんどこそサイゴの退職金をもらって、そのカネで海外旅行一。名作（迷作のマチガイ）『八方破れ…』の（ネタ）となる。

昭和 25 年から数年間は購買担当で、モチロン古河炭を使いますから、「好間炭」は毎月購入していましたぞ。

さて、「添乗記」は作家気取りで「老添乗員が山旅の思い出を語る」というスタイルで、「フィクション」というつもりでしたが、ノンフィクションと見破られましたか。いかにも、私の旅の思い出を、ああいう形にまとめただけのことで、落としたザックは私のもの。

これがあなた、出てきましたゾ。後日、タクシー会社から（たしか洋服のボール箱に詰めて）拙宅へ（当時は宅急便なんて便利なものはなかった）送ってくれました。正月の事で、餅を入れてあったのが、カビが生えて一。あんなこと（「ガラのわりい炭鉱夫」）なんてとんでもない。善意の人たちばかりでした。タクシー会社へは、礼状と和菓子をおくりましたっけ。

いやはや「ガラのわりい」なんて、まことにご無礼を申し上げました。お許ください。読者サービスのため、つい心にもないことを書きましたので一。へい、どうも、ではこれにて御免こうむります。

あ…、申し遅れました。「私、駅前の旅行案内社の添乗員でございます。」いまはトシくって（72 歳）小さな出版社（新ハイのこと）の顧問ということで、月刊雑誌編集の手伝いをさせて頂いております。毎晩、2 合のショウチュウを水でうすめて 4 合に水増ししてのみ、それが生き甲斐だでえ、暮らしをしておりますが、ときには生身の女性を抱きたいとも思いますんで一（以下略）ガ、ハ、ハハハ。いや、「古河」と聞いて、なつかしくて、ついペンが滑りました。古河電池の本社は昔も今も「星川町」ですが、「六ッ川」というと「海老名」寄りですか。草々

### 【あとがき】

この手紙は、9年前に私が『新ハイ』の随想欄に投稿した「夢のあと」に対して頂いた私信です。ご本人の承諾を頂いてから発表すべきですが、残念ながらこの世に居りません。かつて常磐の古河炭鉱で、働いていたことのある私が、天城さんが初めて上梓した単行本『八方破れひとり旅』に寄せた、読後感のようなものでしたが、採用にはなりませんでした。月遅れのお盆の近い06年8月、故人を偲びながら記しました。

(熊谷)



飯島 和子

# 横浜支部の思い出を辿りながら

石原 弘之

横浜支部創立 50 周年を皆さんと共に喜び発展することを願っています。

振り返れば入会して 20 数年、長いようでもありあっという間に過ぎ、いつのまにか支部の最年長になってしまいました。其の間の思い出を紐解きつつ記してみたいと思います。

## 1. 山行の係りとなって

係りとしての最初の山行は扇山の天ぷら山行で参加者皆さんの協力を得、無事終了しましたが途中沢蟹をとって唐揚げにした北村さんの姿は忘れられません。

その後 10 数年続けて天ぷら山行を行いました。御園さんの山菜の天ぷらもまた格別の味でした。山行の係りも数多く行いましたが、八ヶ岳の完全縦走や鶴見川の河口から源流までのような山行は一回では無理なので数回に分けて実施しました。特に八ヶ岳の南の荒々しい山容、北の緑と池の静けさ等は忘れられません。

鶴見川の桜並木もすばらしいものでした。奥秩父の笛吹川上流東沢を遡り甲武信岳までの山行は滝の連続で、丸太橋を渡ったり膝まで濡らしたりの急登でしたが無事甲武信小屋に着きました。本によるとこのコースは健脚向きの一つ上である熟練者向きとのことでした。桧洞丸は 5 月最終日曜日の山開きに合わせて毎年の様に約 10 年程続けて登りましたが、年毎で白やしおの咲き具合が異なり運よく満開の時に合うと思わず万才を叫ぶ程うれしいものです。最初に登った時は木で造った記念バッチでしたがそれが金属のバッチに変わり、無料が有料となり次には山頂ではなく登山口で渡される様になりました。

## 2. 山小屋の思い出

仙丈岳の馬の背小屋に泊った時、シーズン中のせいか満員で広い部屋に横に並びそのまま寝かされ夜中に起きて又寝ようとする。体の入れる場所がない有様、皆さんもこの様な経験が有るのではありませんか。八ヶ岳の双つ池の小屋は建物も古くしかも小屋番はお爺さんと男の子の孫と二人でしたが非常に親切にしてくれました。数年を経て再度泊った時には新しく建て直され立派な山小屋になってはいましたが前の古い小屋が年のせいか懐かしく思われました。五色が原から薬師への縦走の予定が雨の為二泊することになった際小屋のご主人が雨の中を高山植物の案内をしてくれ其の上

夜にはスライドも見せてくれました。雨に降られたお蔭で楽しい一日を過ごすことが出来ました。

### 3. 温泉の思い出

白馬岳の下山路を鐘ヶ岳にとり最も高所にあるという鐘温泉は登山道が風呂の横にあり入浴しながら通る登山者に挨拶を送ることが出来気持ちの良いものでした。

高天が原温泉は小屋から 10 分位の所に有り沢に沿って造られ温度の調節は沢の水を入れたり止めたり自分で行うように出来ています。女性用の風呂は小屋の中にあり言い伝えによると白蛇が住みついているとか、苗場山の下山路にある赤湯温泉では囲炉裏を囲んでの夕食、その後行灯を借りて河原の露天風呂に入ることが出来何とも言えないよい気分です。くろがね小屋の温泉は真黒、本沢温泉は茶色、それぞれ特色があって忘れがたい温泉でした。

### 4. 高山植物

コマクサを一番最初に見たのは燕岳だったと思う。ピンクの美しい花が礫地にいる姿は高山植物の女王といわれているとか、その後白馬から朝日岳の縦走路で見たコマクサの大群落はすばらしいの一言です。東北の山、岩手山、秋田駒から見たコマクサは可憐という言葉がぴったりの咲き方でした。高山植物には自生している山の名前をつけたのが非常に多くその代表的なものの中、ハヤチネウスユキ草、キタダケ草、白山コザクラ、庚申草等の中で残念ながら北岳に登っていながらキタダケ草だけは見ることが出来ませんでした。しかし櫛形山でアツモリ草が見られたのは幸運でした。又花畑では三伏峠で見たものが一番印象に残ります。

### 5. 忘れられぬ山行

丁度 70 才を迎えた直後の山行が巡礼峠でした。峠のすぐ先の広場で星野さん、飯島さん、御園さんを初め支部委員の方々が音頭をとって私の古希の祝いをしてくれました。大きな横断幕を張り、花束まで頂戴しました。その後の食事会も盛り上がり、踊りや歌なども飛び出す程の盛況振りでした。私の生涯で忘れ得ぬ会であったと痛感し山の仲間の友情に感謝した次第です。今後ともよろしくお願いいたします。

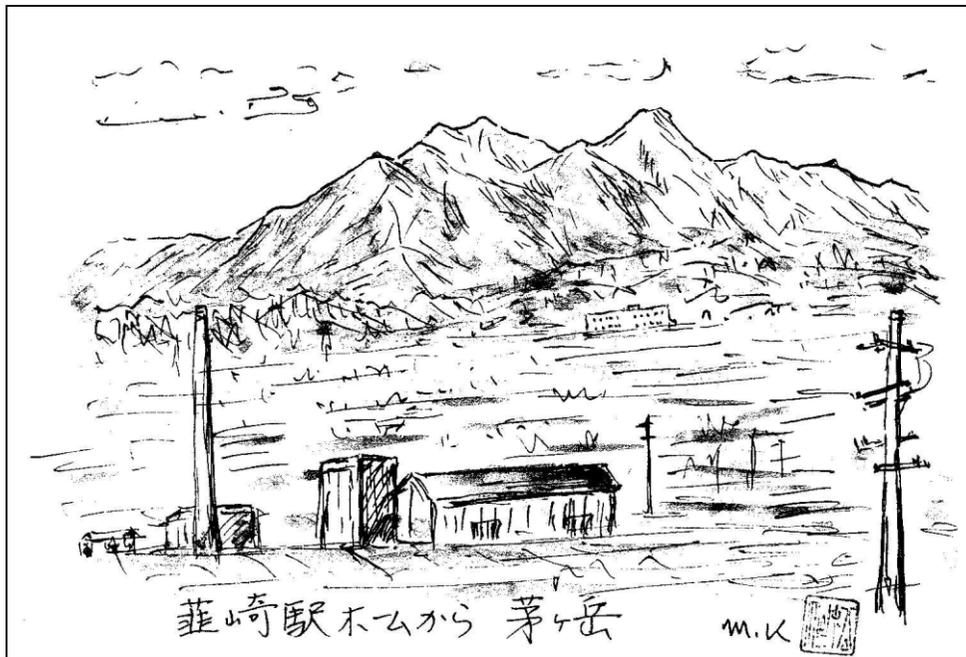
## 今が一番輝くとき

一九 幸夫

早いもので、横浜支部で5年。創立50周年の年に「健康」で支部山行に参加出来る―「身体」―になりました。新ハイキングの雑誌を「手」にしたのは、昭和60年9月の「359」号でした。雑誌はその後も愛読し、「家族で登れる山」を選んで夏には「アルプス」まで登頂を重ねてきました。しかし家族の一人一人が成長しそれぞれの道を歩み出した頃、丁度「定年」を迎えた節目に横浜支部に入会しました。

最初は近隣の山から登り、里山にも足を運び、「楽しい会話」の山行から今迄経験しなかった事もあり、「入会して良かった」と思う事も度々ありました。

それからは、「〇〇を歩く」、「〇〇の山々」とかの山の情報を集めたり、「装備」も積極的に揃えました。又体力づくりの一助にと自宅周辺の「散策コース」を決め毎日歩を進め、体操教室にも顔を出しています。今後とも体調を勘案して、新ハイキングの山行に参加します。更に「新しい目標」を発見し、楽しい人生を送りたいと思っています。



# 茨城一人の山

小澤 勝太郎

SHC 横浜支部にしばしの別れを告げて、福島県に近い茨城県の常陸大宮市の会社に単身赴任したのは2003年4月のことで、はや丸3年が過ぎてしまいました。SHC 横浜支部メンバーの最近の名簿を拝見すると、入部された10名もの方が存知上げない名前になってしまいました。

私が住む1Kのアパートは南の筑波山(876M)は車で2時間、北の茨城県最高峰である八溝山(1022M)までは1時間程度のところ。近くには花の百名山の高鈴山(623M)、久慈男体山(654M)、SHC月刊誌で紹介された籠岩山(501M)、冬は凍結で有名な袋田の滝の月居山(404M)など、低山ばかりで一日の行程は3時間程度の山がほとんどです。山は広葉樹が多いため、春の新緑や秋の紅葉時には鮮やかな自然のパッチワークを見せて楽しませてくれます。そんな時期は1週間おきの月2回の自宅帰りの時間が惜しい感じです。年間24回程度、近くの山に入っています。

ハイキングに行くのは何時も一人です。何せ山の中に住んでいるようなもので自宅から登山口まで車で30分もあれば到着してしまいます。逗子の自宅から丹沢の大秦野まで渋滞の中を車で2~3時間もかかっていたのが夢のようです。朝9時ころ家を出ても午後3時頃には戻って来れます。帰りは山近くの温泉に浸かって汗を流して戻ります。ただ横浜にいた頃のように反省会で仲間と一杯できないのが本当に残念です。アパートに戻って一人で缶ビールを傾けています。

最近、山の中で「これはいい」と思い、続けていることがあります。単独山行ならでのことですが、それは3~4時間歩いた後、山中でシートを敷いて仰向けにひっくり返し、空を見上げ、雲を見ながら15分くらい休むことです。ちょっと歩いた疲労と充実感、広がる空と目に入る緑の自然が、静けさの中に自分を解放してリセットしてくれる気がします。山に来て良かったと思える瞬間の一つだと感じています。

またこれで明日から頑張れる。そんな茨城での一人の山行です。いずれSHC横浜支部にカムバックできる日を楽しみに、それまでは茨城の山で頑張りたいと思っています。

# 車窓の山旅記

芹沢 隆仙

私は去年(H17年)の右の踵を痛め、またそれを庇うあまり右膝まで痛めてしまい、大きな山行が出来ず、忸怩たる思いをしていた。いわゆる山屋の職業病になってしまった。現在整形外科に通っているが思うように完治しない。そんな折、目に入ったのが JR 東日本で会員を募集していた「大人の倶楽部ミドル」だった。ジパングの割引率が 30%なのに、5%の割引で、大したことないし、初めは入会する気もなかったのだが、今入会すると他に色々特典があることに気付いた。その一つが土日きっぷであった。普通なら 18,000 円なのに、入会すると期間限定で何と半額の 9,000 円ということだった。この倶楽部自体が団塊の世代と云われる我々をターゲットにしているのは明白だが、ヨシッ「鉄ちゃん」をやってこよう。どうせ登れないなら、日本百名山を中心にどの位の山が見えるか確認できるか挑戦してみようと考えた。私が敬愛するあの深田久弥氏も車窓から山々を見るのが好きだったようだ。百名山の北岳の項に平家物語の一節「北に遠ざかりて、雪白き山あり…」を引用し、戦前住んでいた鎌倉から東京へ出る時、横須賀線の六郷川鉄橋あたりで、白峰三山を見逃さなかったと書いている。

まず経費節減のため、日帰りで行く。1 日目は東北新幹線、山形新幹線を乗り継いで土日きっぷの北限である酒田まで行く。そして酒田から新潟へ出て、上越新幹線で帰ってくる。2 日目は山岳展望の王道である中央本線—大糸線—中央本線—小海線—長野新幹線で帰宅。決行日は平成 18 年 2 月 18,19 日にした。嬉しい事に指定席も 4 回取れるのだ。幸い、1 日目の東京—新庄、新潟—東京、2 日目の東京—南小谷、佐久平—東京の指定席が取れた。しかしこの計画の大前提は一にも二にも晴れること、更に空気が澄み渡っていること、雨が降ったら計画はオジャン、そして日の出から日の入りまでが勝負なのだ。また「山座同定」というのは実に難しい。正直云って富士山以外見る角度が違えばもう迷宮入りの世界だ。そこでこの計画をサポートしてくれるのは以前から蔵書の藤本一美・田代博編著「車窓展望の山旅」及び山村正光著「車窓の山旅・中央線から見える山」それとカメラである。

2 月 18 日(土) 最寄りの衣笠駅 05 時 42 分発に乗る。まだ薄暗い、その薄暗い中、左手(西)に黒いシルエットの大楠山を見る。この山が私の故郷の山だ。わずか 242

mだが三浦半島一の高さで冬の晴れた日には富士の背後に南アルプスを望むことができる。しかしここも近接してゴルフ場やゴミ処理場ができ、大きく自然が破壊された。痛々しい限りだ。天気はうす曇り、北鎌倉と大船との間で左窓に見える筈の富士は見えなかった。南は視界良好とはいえない。多摩川を渡る際も残念ながら白峰三山を望むべくもなかった。

山形新幹線「つばさ 103 号」の座席は進行方向右側の前部の一番ドア寄りの席だった。車窓展望の場合は左側がいいのだ。車内は結構混んでいる。席を自由に移動できる状態ではない。幸いドアが一番近いので、デッキへ出るには最適だった。北に進むにつれ、雲も切れてきた。まずは赤羽を過ぎた頃から右側に双耳峰の筑波山がビルの合間越しに見えてくる。幾度か登った山だ。ある時は胎内潜り等の巨岩をぬけた弁慶茶屋で飲んだ熱〜い甘酒。ある時は3月だというのに霧氷の花が咲いた山頂。関東平野に聳える姿は風格十分である。筑波を見たら今度はデッキの左窓である。これからメインの山々が次々と現れてくる。利根川鉄橋あたりからは左手後方に富士や天城や丹沢が見えると書いてあるのだが、残念ながら南は依然雲多くいずれも見えなかった。小山から宇都宮に近づくと日光連山の男体山、大真名子、小真名子が朝日に輝いた白銀の山容を愈々現わした。上空に雲は無い。山名を確定するにはまず円推形の男体山を同定すればいい。その右に大真名子、小真名子、女峰山、赤薙と続く。その男体山と大真名子の間に奥白根がチョコッと顔を出している。シラネアオイの薄紅紫が今でも目に浮かぶ。

更に北へ進めば、塩原の高原山火山群、そして那須連峰だ。これも青空の下ははっきり見える。噴煙たなびく茶臼岳を中心に左に南月山、右にニセ穂高の異名がある朝日岳と三本槍岳、三本槍は本家槍ヶ岳のような急峻な頂が3つある訳ではない。江戸時代三藩の国境確認のため、槍を3本立てたことが由来という。

そして、郡山あたりから安達太良山が見えるのだが、生憎雲がかかっていたため、はっきりとしない。磐梯山も残念ながら確認出来なかった。しかし福島に近づくと雪をかぶった円錐形の吾妻小富士を真ん中に左に東吾妻、高山、右に一切経山、家形山と鮮やかに見え出した。浄土平の駐車場から観光客も登る吾妻小富士が新幹線からこんなに良く見えるとは改めて知った。

福島を過ぎて東北新幹線と分かれると周囲は急に雪が多くなり、山が迫り、視界が狭まる。次のお目当ては月山と蔵王なのだが、雲多くしてどちらもはっきりと確認出

来なかった。山形駅近くで蔵王らしき雪白き山をカメラに捉える。

山形新幹線は新庄が終着。ここからは陸羽西線、通称「奥の細道最上川ライン」だ。ここまで来ると積雪は駅名を示すホームの表示板を半分埋めている。この路線の右（北）側に鳥海山を期待したが、雪雲におおわれ、遠くは見えない。雪原の中に風車が7、8機見えてきた。そうかこの辺りは風が強いのか。昨年12月25日羽越本線の北余目近くの最上川鉄橋付近で特急「いなほ14号」が強風で脱線事故を起こし、多数の死傷者を出したばかりだ。ワンマンの運転士はその鉄橋を渡る際、徐行する旨の車内放送をした。ブルーに塗られた鉄橋は鉄橋らしい鉄橋だった。河原に作業員が何人かいたのはまだ事故の後始末をしているのか。

やがて終点酒田12時07分着。駅に降りると激しい雪が降りしきっていた。予定では学生時代行ったことがある本間美術館を再訪するつもりだったが、雪と寒さで断念した。次の電車まで1時間余りだったので、近くのセルフサービスの蕎麦屋で地元の高校生や女学生と一緒にソバを食べていたら、もう時間が迫ってきた。

ここからは日本海沿いに羽越本線の各駅で村上まで行き、村上からは特急で新潟へ向かう。旅好きの私には降りしきる雪景色の日本海を眺めながらの各駅列車の旅もまた良しなのだ。途中駅で写真愛好会らしき一眼レフを持った中高年のグループが乗り込んできた。記録的な豪雪に見舞われた雪国と日本海を撮りに来たのだろう。リタイア後はこういう過ごし方もあるなあと思った。雪は吹雪になったり、小止みになったり、村上で特急に乗り換えても変わらなかった。晴れていれば飯豊連峰や五頭連峰が見えるのだろうけど、それも果たさず新潟駅へ着いた。16時32分着。雪は止んでいた。2月の日は短い。

上越新幹線の指定席は幸い2階建ての左側だった、それに空いていた。右窓に見えるのは角田山と弥彦山か、それと長岡を過ぎるとやはり右側遠くに米山が浮かんでいる。夕闇が迫り来る中、浦佐付近で左窓の雪の街並みの彼方に雄大な雪山が2つ見えてきた。本を見るとこれぞ左奥に魚沼駒ヶ岳、右前が八海山だった。圧倒的な迫力だった。支部山行で八海山の八峰の岩峰群を緊張して踏破したことを思い出した。そして湯沢駅へ着く頃には街の灯りが光を増してきて一日目の山岳展望の旅は終わった。

翌朝二日目、新宿発7時30分の「あずさ3号」に乗る。天候は曇りである。中々見通しが効きそうにもない。指定席は右側で決していい席ではない。そこで車掌

に頼んで空いていた左の窓側に替えてもらう。最初のポイントは立川を過ぎた多摩川鉄橋だ。ここは右窓に丹沢山塊と富士山、そして大岳山などの馴染みの奥多摩の山々が見えるポイントなのだが、残念ながら薄曇りのため確認できなかった。このまま薄曇りの天候が続けば今日の成果は昨日の半分以下だろうと危惧した。しかしその杞憂は勝沼ぶどう郷駅を過ぎたあたりから消えた。北岳、間ノ岳、農鳥岳の白峰三山が見えてきたのだ。だが南の聖、赤石は見えない。間ノ岳と農鳥岳の縦走路の途中で御岳の噴煙に遭遇したのは遠い昔になってしまった。そして後方を見るとやっと富士山が見えた。鮮明ではなかったがようやく逢えた。日本百名山完登の最後の峰が吉田口の富士浅間神社から登った富士山である私にとって富士には特別な思いがある。何処の頂に立ってもその方向に富士の姿を追い求めた。最も遠くで富士を見たのは紅葉の平ヶ岳だった。

小淵沢付近では鳳凰三山、北岳、甲斐駒ヶ岳と南アルプス北部の雄姿が勢揃いする。地蔵岳のオベリスク、早川尾根の上に頭を出した北岳、そして豪快な甲斐駒、完全に晴れた空ではないが全容が見える。余りに見とれて右窓の奥秩父、八ヶ岳を見過ごしてしまった。富士見駅を過ぎると白く輝く北穂と奥穂、常念、横通が見えてきた。そしてその中心にあの槍ヶ岳が見えると、山村さんの本には書いてあるのだが、肉眼でははっきり判らなかった。しかし撮った写真をPCで拡大してみると確かにあの槍の穂先らしきものが見えた。

茅野を過ぎると穂高連峰は勿論、驚いたことにこれも写真で確認したのだが、霞沢岳が見えるのだった。徳本峠からぬかるみの山道を長時間往復した霞沢が見えるなんて本当に感激だった。松本駅に近づくと常念が益々その存在感を増す。山都松本の人々はまさにこの常念を見て育ったのだな。松本を過ぎると大糸線の沿線に入る。町並みの建物や電線で優美な常念も美しくは見えない。そんな中デッキの右窓に王ヶ鼻（美ヶ原）を確認する。一登りついて不意にひらけた眼前の風景にしばらくは世界の天井が抜けたかと思う。一詩人尾崎喜八は何処から美ヶ原の頂上に出たのだろうか。私は三城牧場から百曲りを登った時こういう思いになったことがある。

さあ、これからは北アルプス後立山連峰の個性ある面々がその姿を現す。その前に常念、横通とその前方に有明山が大きく見える。そして信濃常盤あたりになると素朴な山小屋が今も印象に残る餓鬼岳、大町付近では2年前縦走した蓮華岳が大きく現われる。その奥に隠れている針の木岳があるのだなと思う。更にその北方に3峰と2峰

の白き山、爺ヶ岳と鹿島槍岳だ。爺ヶ岳は残雪の雪形が種蒔き爺さんに似ているのが山名の由来と聞いているが、その山名故にいささか損をしている嫌いがある。お隣の鹿島槍に押されてやっと 300 名山にその名が出ている。しかし今白銀におおわれた山容を堂々と張り出している。そうは云っても鹿島槍の両槍を結ぶ吊尾根の優美さは魅惑的である。殊に青木湖あたりから前山の上に、白き両槍を見ると厳粛な気持ちになる。というのは高校時代の友人が就職も決まった大学 4 年の夏休みに、中綱湖で遊泳中水死したのだ。彼の姿はいつも学生服姿で私の脳裏に浮かぶ。

沿線の雪量も多くなって、白馬駅に近づけば云わずと知れた白馬三山、それに五竜岳。唯唯見惚れるばかりである。あの大雪渓を越えて、白馬、雪倉、朝日と縦走したのはいつだったか。そして白馬三山が南に遠ざかると山間に入って、終点の南小谷に到着する。(11 時 41 分着) ホームに降りて改札口に向かわずホームの先端に行ってみると線路は雪に埋まっていた。南小谷以北は大雪のため運行を休止しているのだった。代行バスが運行されていた。ホームの最先端に行ったのはそれを確認するためでも、あずさ号をカメラに収めるためでもない。ここから見える百名山、雨飾山を確認するためだった。まさに田代氏の作画に描かれたようにあの雨飾がその頂をちょこんと覗かせていた。これも感激の一瞬だった。

さて次はすぐの各駅で取って返し、白馬駅で降り、白馬の見えそうなソバ屋の 2 階で昼食。陽が射し込み暑いのでビールと冷酒も注文。だが残念ながら白馬の全体像が見えない。その代わり五竜の御菱が白く耀いている。白い八方尾根に点々と黒く見えるのはリフトだろうか。爺、鹿島槍、五竜を縦走し、唐松岳から下った折、八方池で仰ぎ見た白馬三山は今も忘れがたい。雲上の鏈温泉もよかったなあ。珍しい干し柿の天麩羅を食し、今度は特急に乗って小淵沢まで行く。午後の光は午前中の陽光と微妙に違う。大気も水蒸気を含み、鮮明さが薄れてくる。途中下諏訪あたりで諏訪湖の後方に白い山が見えたのは中央アルプスの木曾駒なのか、しかしこれは特定できなかった。

小淵沢着 15 時 34 分、16 時 03 分発のワンマン 1 両きりの小海線の後部に座席を確保し、まずは甲斐駒をじっくり見る。竹宇駒ヶ岳神社から標高差 2200 メートルの黒戸尾根コースを往復したのはまだ 5 合目の名物小屋主の古屋義成さんが健在の頃だった。今の脚の状態では悔しいけど到底登れないだろう。

小海線といえば八ヶ岳なのだが、落葉松の林が前を遮り意外と良く見えない。やっ

と清里を過ぎるあたりから良く見えてくる。初めての八ヶ岳は新宿発 23 時 55 分の夜行列車を乗り継いで甲斐大泉から天女山、権現岳から赤岳だった。初めてブロッケン現象を見たのも権現岳の岩の頂上だった。山日誌を読み返したら 1975 年の 6 月のことだった。天気雨とある。もう 30 年余りも前だったのだ。

右窓に尖った頂を見せたのは金峰山か、中央線から見える金峰はよく知られているが、小海線からののは知られていない。だから確信は持てない。小海線はよく高原列車のモデルとなるが、あれは被写体として八ヶ岳をバックに列車自体を撮るとそうなるのだが、山岳展望としてはそれ程でもないことがわかった。もう一つ、北八つの更に北にある蓼科山を探し続けたが、特定できなかった。既に夕暮れが近づいている。北中込あたりでは槍、穂高が遠望できるとあるがその方向に夕焼け空を見ただけで、これも同定出来なかった。そしてほぼ闇に包まれる直前、前方にあの浅間山が大きく浮き上がったのだ。ほんの短い時間だった。

からまつの林を出でて、  
浅間嶺にけぶり立つ見つ。  
浅間嶺にけぶり立つ見つ。  
からまつのまたそのうへに

白秋の詩の一節だ。落葉松の芽吹き時、或いは黄葉時、浅間山を仰ぎながら、落葉松林を逍遙するのは私の憧れでもある。

既に日はとっぷり暮れて、窓ガラスに自分の顔が映しだされ、佐久平に到着し、私の 2 日間に渡る車窓の山旅は終わった。今回は初めての試みであったので、準備不足は否めなかった。それに写真を予想以上に撮ったので、デジカメのメモリーが不足して前に撮った何枚かを消さねばならぬ失敗もした。私が登った山々、特に百名山に幾つ逢えたであろうか。今回は本を見ながらの同定であったが、やがては何も見ずに山々に出逢うのが夢である。

— 完 —

(平成 18 年 5 月 7 日)

## 年齢を重ねて想うこと

有山 好子

バスの敬老特別乗車券を戴いてから、バスに乗る回数が増えました。歩いた方が健康に良いと思いながらも、便利なのでつい乗ってしまいます。優先席が空いていても、乗って来る老人を見ると三人に二人は「私はまだまだ元気だよ」と言わんばかりの顔をして普通席の方へと行きます。見ていると面白い。

義母と夫が病気になってから病院に行く回数が増えました。どこの病院も病人の多いのに驚きます。病人の手を引く人、車椅子を押す人、心電図やレントゲン、血液検査と、あっちこっちを引っ張り廻され、老々介護の身ではとても大変です。

年とっても体に気をつけて、病気にならないように頑張ろうと重重思いました。

夫は病人になってからは気がめっきり弱くなりました。とても元気で威張っていた人が、私のことを「お母ちゃん、お母ちゃん」と情けない声を出して呼ぶようになってしまいました。「何よ。あんたのお母ちゃんじゃ無いよ」と、心の中では叫んでしまいます。私も病人になったら「お父さん、お父さん」と呼ぶようになるのかなーと心配になりました。

新ハイで山を楽しんでいる人達は皆元気で浚刺としているのに驚きます。夫が元気だった頃は、私は思うがままに海外の山も含めて、沢山の山へ行く事が出来ました。その夫に感謝しながら今は看病に専念しています。私の経験から、友達に「前向きに出かけられる時が一番幸せな時で、この機会を逃しては駄目よ」と話しています。

同じ目的を持った山登りの友人が、男女を問わず大勢出来た事は、私にとって宝です。老々介護の身でうつ状態になりかけた時も、くじけずにこの年齢まで元気で登山できたことは、この友達のお陰と感謝しています。

登山靴をはき、ザックを背負うと、家の事など何もかも忘れて、身も心も軽くなります。春の雑木林の芽吹き、新緑の森、夏の岩場に咲く可憐な花々、秋の紅葉、冬の雪景色、何と心が癒される事でしょう。これからも、この美しい自然を求めながら、友達と歩いて行けたらと念じています。

# シリングル大草原を吹きわたる風

玉川 恵子

「大学院の見学に上京するので泊めてくださいますか。」と電話が入ったのが午後10時。もちろんOKだが、翌日夕方に着くという。遊牧民らしいなあとニヤリ。真冬には零下40℃になるという厳しい自然の地で、何千年の間お天気まかせで羊と共に暮らして来た彼らには、先方の都合が悪くて会えなくてもそれは自分の運命という時間の感覚がある。経営学を修め国に帰って故郷と民族に貢献しようという固い決意のムチリさんだ。

2003年夏、私は中国・内モンゴル自治区の中央部に広がるシリングル大草原の東の端に位置する新興地方都市 シリンホト（錫林浩特）に英語教師として滞在した。かつてここに攻め込み草原を踏み荒らした漢民族は、土着のモンゴル人インテリから敵意を込めて「中国人」と呼ばれるが、庶民の間にはそれぞれのタブーに抵触せず他民族の文化を尊重しながら生きざるを得ない、北京から遠い辺境の人々の諦観と優しさが感じられる。

そのシリンホトへは、出迎えのマイクロバスで建設中の国道を2泊3日かけ900キロを走破し到着。国道が途切れる部分は草原に降り道なき道を走るがむしゃらさに呆れたが、さすが騎馬民族の末裔だ。

草原を貫いて走る国道から遠望できる羊の群れ。360度の地平線。頭上には真っ青な空。衝撃的な静けさ。標高1,500mの広大な平原を吹きわたる快適な天然の冷却風。8月上旬で16～18℃。草原がそよぎうねる。フビライカーンの夏の宮殿があったセイランキ（青藍旗）の町の郊外に保護されている本来の草原を見た。草だけではない。高山植物が緑の草の間にぎっしりと花を開き、まるで精巧な絨緞を見るような美しさだ。しかし、中国政府が奨励し人間の定住化が進んだ楽な生活を保証する街はといえば、一転、石炭発電、下水道、ゴミ処理など現代の都市が避けて通れない環境問題に直面しているのを目の当たりにした。嘆息。自然と共生する道が課題である。ムチリさんの故郷シリングル大草原の昔ながらの自然が守られ、変わらない美しい風が吹きわたり続けることを祈りたい。

# 山 哭

中村 純平

“山”は私に執って心の“ビタミン”である。

終戦後、中学三年を迎えた晩秋の頃、同級生 O 君の義兄が飛騨高山市・気象庁高山測候所に勤務していた。

当時乗鞍山頂に高山測候所支所が置かれていた、のちに日本のコロナ観測所となる所である。その観測所に O 君の義兄が交替で勤務していた、二人で義兄を頼って二泊三日の予定で山頂に遊びに行くこととなった。

今では、山頂までハイヒールで登ることができるが、当時は軍用道路が山の中途までできている状況で終戦を迎え、その後はまったく整備されえていなかった。地図を頼りに高山から重いリュックを背負い草鞋を持ち、当時としては最高のおみやげである“餅”を詰め込み徒歩で登山することになった。

朝早く家を出て、途中木材運搬のトラックの材木の上に跨り、山頂近くに着いた頃は、すでに夕暮れに近づいていた。

雷鳥はすでに色を変えつつあり、這松は冬の準備に入り、あたり一面の紅色の高山植物は着換えを終わっていた。

山頂に近づくと雪が降り出し、風が吹いて様子が一変し細かい石と砂、そして雪が激しく襲い動けなくなり、突然四方が白いカーテンに覆われ、斜面を登るがまったく視界が効かない。二人とも初めての経験である。とりあえず一休みし風の収まることを待つことにした。しかし雪と小石が猛烈に容赦なく劈く。

二十分ぐらい経つと、漸く風が止み小雪になった、少しずつ先が見えるようになり、地図を見ていると先方に人影が見える。4～5メートル先で遠くはない、よく見ると美しい女の子が立っている。川端文学の「伊豆の踊子」の“薫”より可愛い美少女で、中学生の我々にとっては、天から降って来た佛のように眩しく燦然（サンゼン）と輝いていた。

それは警畢（ケイヒツ）にも似た驚きの様（サマ）であった。背を向けて登って行くではないか……、  
我々も気を取り戻して後を追う……。

60～70メートルも登らない内に女の子の姿が消えてしまい、ふと見上げると先方に薄らと測候所の山小屋のアンテナらしき物が見えてきた。二人は手を取り合っ

感涙し、小さな心の中でお互いの命が助かったことを喜び合った。

そして女の子の事はすっかり忘れ去っていた。二～三年前に、同じ所の近くで女子中学生が遭難したことを後日、義兄から聞かされた。

あの時の事象は、いったい何だったのであろうか、今でも解明できない。まして脆弱な少年の心の中で理解できることはなく、また永遠にそのことは消えない。そしてそのことは、広い時空の領域をとめどなく彷徨（ホウコウ）することとなる。

その後 O 君は上京し建築学科に入学した。私は彼のために東京神田に下宿を世話し、そして二人で青春を煩悶（ハンモン）し、そして謳歌した。

しばらくして、家庭の事情のため大学を中退し故郷で家業の建築業を継いだ。

「お前の家は、俺が故郷（クニ）で建ててやる」逢う度毎に口癖であった O 君は、50歳中途にして逝った。未（イマ）だその約束は果たされていない。

しかし、雪山に登る度に、O 君とのあの情景が100号の真白色の新しいキャンバスに、ペインティングナイフでオーロラピンクを一気に塗込んだような、淡い甘美な、そして豊潤な香りにも似た遠い感性が思い出となって蘇る。



岡野 達

## 「マナー」をどう考えましょうか？

渡部 道明

深く抉れた登山道、その傍には使われなくなった階段道、汗をかきかき登って景色の良い所での一休み、至福のときでありながらキャンデーの袋・飲み物の空容器などが目に入る・更に登っていると下山中のグループが登高中の人々に構うこと無く我先にくだる・貴重な草花根こそぎの盗掘跡を見た、など一度ならず出会われた事でしょう。又里山のトレッキング中でも人目につきにくい所への不要になった家電製品・家具・自転車・はては自動車まで捨てられているのを見聞きたいします。

山・山村のみならず都会においては、私ごとき年配人には理解できない「おこない」が多くなりつつあります。例えば少数ですが若い女性が多くの人々の乗車している電車内で化粧に熱中してる姿・コンビニなどの店前で地べたに腰を着け飲食談笑している若者グループ・走ってる車より空・又飲みかけのペットボトル・食べ物残渣の袋を道路植込みへの投げ捨てなど「ハテナ」と思わせる場面に数多く出会います。

なぜと問えば、マナーの荒廃・人間生存の場での道德観の欠如と指摘されます。

「マナー？」 マナーを良くするとは 様子・因習・態度・習慣・行儀・作法(広辞苑)を良くする。「道德」とは或る社会で成員の社会に対する・或いは成員相互間の行為を規制するものとして、一般に承認されている規範の総体、法律のような外面的強制力を伴うものでなく、個人の内面的なもの(広辞苑)。とあり、 道德意識は良し悪しを知り・判断し・邪悪を除き・心(良心)であり自分の行為や心の問題ではあるが、他人の道德意識にも関係する。とあります。

戦後61年、戦争を知らぬ世代が社会を構成しております。少子高齢化・核家族化と言われております。即ち5年世代間ごとの人口比は15~19才で5.07%、以下では4.69・4.61、0~4才では4.38%まで少子化が進んでおります。一方高齢化は65才以上260.62万人、5年間ごとの比率は各々5.83・5.26・4.17・2.78、85才以上2.37%となっております。総人口1億2千772万人、世帯数49020戸、2.6人/戸となっております。20才~64才の就労者世代に於ける社会変動は就業条件に伴う家庭環境の変化、更にネット社会の進展に伴う異文化の融合など、新しい枠組みと価値観の多様化により世代間の考え方、格差が大きくなり共通の言語を失ってしまったと考えられます。であるからこそ「守らねばならぬマナーや時代の要請で新しく認識しなければな

らぬマナー」について皆で考え、浸透し、守り続ける事で魅力ある生活の場を確保し得るのではないのでしょうか？言い過ぎでしょうが地球温暖化対策にもつながるかな！

作家 倉本聡氏は、森の木の葉が空気も水をも造るとして1枚でも2枚でもつくりたい。そのため年間5000本以上の植林をしている。又毛利衛氏は、科学技術を基に物事を見るとの価値観が大切とし自然の力は人知を大きく超えておる。今もし人知で自然のバランスを崩す事で水が無くなる。即ち火星化の危険性をも示唆されております。

私は今森林ボランティアに参加しております。土壌保全につながればとの想いです。土壌保水力を増し植生を豊かにし少しでも森林面積が増えることを願っております。

又グループで今棲んでいるところ、行動範囲で個々の固有のマナーにつき世代を超え共感できるものを明らかにし、心の豊かさに繋ぎ魅力ある生活の場を創ればとの考えから、まず各世代にアンケートし、必要とされるマナーの定義を確定し、マナーアップにより、諸問題の減少を図る活動を行うべく準備中です。1人でも賛同者の積み重ねによるマンパワー化が夢です。

皆様「マナー問題をどのように考え実行すればよいのでしょうか？」御意見、御助言戴ければ誠に幸いです。是非お願い致します。



横浜市瀬谷区  
より  
岡野 達

# 横浜支部との出会い

佐々木 静子

40歳を過ぎた頃、膝に痛みが出て階段を下りるのに手すりにつかまるような時がありました。整形外科を受診すると、「骨、異常なし。加齢、運動不足による筋力低下！」という診断でした。

そこで、筋肉を鍛えるために何かしなければならぬと気づき、学生時代に少し経験のある登山を始めようと思ひ立ちました。ある山の会に入会している高校時代の友人に紹介してもらい、会員になりました。そこで月に1～2回の山行に参加し、ジムにも通い筋力をつける努力をしました。いつの間にか膝の痛みは全くなくなりました。山の会の先輩たちに登山に関するマナーや高山植物の名前などを教えてもらいながら、美しい花や景色を見て歩くのがとても楽しく、地図を読んだり、写真を撮ったりということは少しも上達しませんでした。

そのうち、職場で異動があり東京での例会に出席することが難しくなり、横浜あたりで比較的少人数で山行する会はないかと探していたところ雑誌「新ハイキング」の支部報告をみて「ここだ！」と思ひ、当時支部長さんだった石原さんにお電話をして入会させていただきました。

それから、横浜支部のお仲間に入れていただき、実にいろいろな山に連れて行っていただきました。一生涯登れないだろうと思っていた憧れの山にも登ることができました。本当に支部の皆様のお陰と感謝しております。いつまで経っても連れて行っていただくという域を脱出できませんが、どんな山でも自然の中を気心の知れた皆さんと歩くというのが私の至福の時なのです。体力的にはあと2～3年が限度だと思いますが、今後ともご指導をよろしくお願い申し上げます。

## 雪山への誘い

小笠原 利満

長年、雪山に行きたいと願いつつ、なかなか機会に恵まれずにいた。一人では不安があり友を求めている所、Mさんに誘われ、八ヶ岳に行く機会に恵まれた。

2002年1月下旬、美濃戸口より歩き赤岳鉱泉泊り、翌日硫黄岳に向かう。意気揚々と出かけたが、赤岩の頭で硫黄岳方面の視界が悪くなり撤退。行きたかったがMさんに撤退する勇気を教わった。途中、横岳直下の大同心、小同心の素晴らしさに感動した。厳冬期の雪山をアイゼンをきかし、ピッケルを突く心地よい境地を味わう。しかし冬山の恐ろしさも経験した。翌年3月にまた機会に恵まれ、Mさんと一緒に山に入った。翌日、天気が良いれば赤岳に登山という事で、興奮してなかなか寝付かれなかった。明朝は快晴、赤岳鉱泉を出発。行者小屋は雪に埋まっていた。文三郎尾根にはトレースがついていたが、夏道と冬道では随分違っていた。快適に登り続けて頂上直下の岩場を慎重に登り、遂に頂上に立った。憧れの雪の赤岳山頂に立つ事が出来た。

1人時間を忘れ、360度の絶景に酔いしれ、感激していた事を昨日のように思い出す。下りは岩場でちょっと足を踏み外したが、無事、行者小屋まで戻った。いつまで雪山に行けるか分からないが、この感激を忘れず、無理をせず、撤退する勇気を持ち、新ハイの素晴らしい仲間といつまでも山歩きをしたいと願う今日この頃である。

横浜支部に育生まれ、ここまで成長できた事を感謝しています。又、色々な方にもお世話になりました。今後リタイア後は、支部の為に恩返しをしなければと思っています。こんな私ですが、今後とも宜しくお願い致します。

# 私と推理小説

茂木 武

私にとって初めての試みですが、私と推理小説との関わりについて、書いてみようかなと思いました。人は普通の生活をする中で、これは「小説の世界での出来事」とか「映画の世界での話」という様に一応区別して現実とは「違う世界」として見ています。私も全く同じ立場ですし、極めて普通の人間と思っています。

でも皆さんの中にも映画、小説を見て「感激した」「考えさせられた」ことは有ると思います。私は若い頃から推理小説の愛好者です。戦前は探偵小説と呼ばれ、代表的な作家としては、江戸川乱歩、木々高太郎、横溝正史、坂口安吾等が活躍し、謎解き、奇抜なトリック、犯人当てが興味の中心。戦後になって松本清張が登場して、従来の探偵小説に、社会性、人間性、犯行動機の重視、等の新風を吹き込み、推理小説と言う呼び方が全国に定着しました。昔からあった捕物帳にも少し触れます。銭形平次、半七、右門、大岡越前と、それぞれ身分は違っても探偵役が出て事件を解決しました。捕物帳、探偵小説、推理小説と時代や社会は異なるが出てくる探偵に共通するのは、(1)謎の解明 (2)隠れた真実の追究 (3)善を助け悪を裁く、と常に正義の味方だったのです。また清張の世界に戻ります。

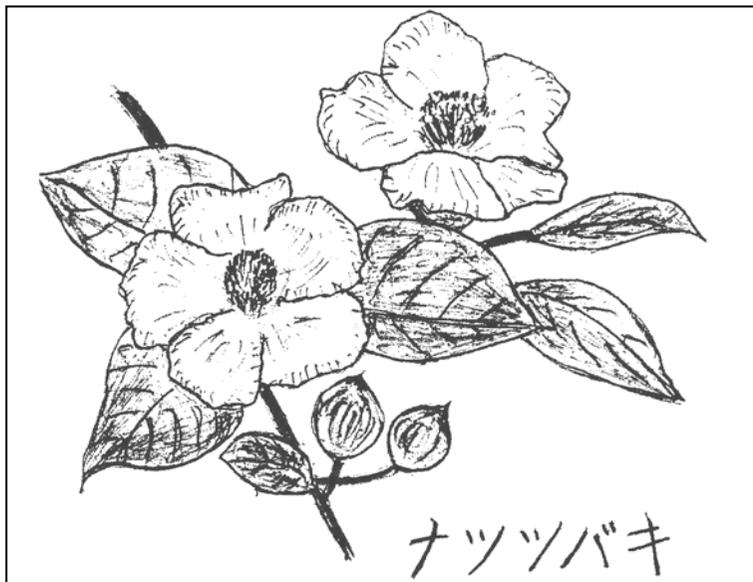
「主人公の禎子は、新婚早々に失踪した夫を追って金沢へ。追求を始めた夫の兄が突然の死。小雪の降る、能登の断崖で死んだ男女の謎は・・・」松本清張の秀作「ゼロの焦点」を私は夢中で、長編一冊を一気に読んで仕舞った覚えがあります。

推理小説は面白くなければ、誰も読みません。清張の「点と線」では小説の手法として初めて国鉄（従来）の時刻表をもとに事件が構成され、犯人側と捜査側との激しい攻防が展開されます。この頃「アリバイ崩し」等は新語でした。

推理小説の世界でも登山を舞台にしたのも有ります。松本清張の「遭難」では鹿島槍ヶ岳の山行記録をもとに、遭難で凍死した人の身内が、当時のリーダー格、Aと再度、鹿島槍を訪れ、コース、時刻、歩行速度など記録を正確に追い、犯罪性を検証するという内容。これは「推理小説の世界の出来事」なのですが、私は昭文社の鹿島槍の地図をだして「遭難」という小説を検証して見ます。一行3人は鹿島槍の南峰を過ぎ、北峰へ近くなって風雨が強まり引き返した。布引岳に着いたと思ったのは錯覚。そのピークは南峰から西に派生する牛首岳だった。冷池小屋へ帰れる筈が、方向違いの西へ向かい遭難したという内容。この後二度目の山行が解決編ですが、私達は推理

小説の中に入り込むことも出来るのです。

「本格的」推理小説というのが有ります。ストーリーを通して論理性が一貫している、辻褄が合っている。捜査陣の「アリバイ崩し」に十分に耐えられる構成が確かなのが「本格物」なのです。」次に清張以降の好きな作家を寸時ご披露します。水上勉、土屋隆夫、梓林太郎、内田康夫、推理以外ではトップは藤沢周平ですね。忘れてならない別格は、「日本百名山」の深田久弥です。



岡野 達

## 靴を磨く

井上 忠秋

靴を磨きながら考える。

「今度の山行はどんな山だろうか、標高も在るし行程も長いな、装備はこれで良かったかな、登山道は安全かな、天候はどうだろうか、晴れたらいいな。」

ワックスを塗りながら思いを巡らせると膨らんで来る来る夏雲のようだ。「草花の咲具合はどうかな、今はなんの花がいいのかな、可愛い鳥が姿を見せてくれるかな、楽しく行けそうだな、でも、みんなについて行けるかな。」期待と不安がよぎる。

「この靴との付き合いも結構続いているけれど、なんとなく俺の膝と同じに草臥れて、滑りやすくなっているな。ま、今回は宜しくな、その後はゆっくり休ませてあげるからな。」

靴の紐を締直しながら考える。

「今日はリーダーのお蔭でみんな順調のようだな。でも、俺は少し疲れているかな、適度に栄養補給をした方が良いな。みんなに迷惑をかけない為にも早め、早めに水を飲んで、甘いものでも食べよう。紐の締め具合は良いかな、強くはないかな、丁度良さそうだ。これから下りだから気を引締めて行かなくてはな、浮石や草すべりもあるし、木の根っこなども要注意だな。最近では眼も弱くなってきたから十分注意して転ばないようにしよう。もう少しで山小屋に到着出来そうだし、後はゆっくり休めそうだな。夕飯は何かな、カレーかな、ハンバーグかな、デザートも付くかな、楽しみだな。」

靴を脱ぎながら考える。

「やっと小屋についた、やれやれホットしたな。あの岩場は長い上に傾斜もきついし足場が無くて、短い足では苦勞するな、懸垂で攀じ登ったから肩が痛くなったな、ちょっと筋力も落ちたな。渡渉では川底の石が動いてヨロヨロしたな、大分疲れていたからな、みんなは元気だな。」

「そうだ、仲間が色々な花の名を教えてくれて有難かったな。でも、あまり覚えていなくて申し訳ないな。確かあれは〇〇りんどう、えっ、りんどうって沢山あるんだ、エゾだ、チシマだ、タテヤマだ、トウヤクだ。似たのがトリカブトか。何がなんだか分からなくなってきたな。纏めて、ミヤマりんどうで勘弁してもらおう。」

横浜支部の皆様、とりわけ歴代委員の皆様には大変お世話になり、深く感謝申し上げます。この場を借りて御礼申し上げます。

盛夏

## 私 の 名 峰

花島 幸子

今年の正月に NHKBS ハイビジョンで放映された日本の名峰という番組を見た。数年にわたって撮影した日本を代表する美しい山々が画面いっぱいに広がるのは壮観だった。空にそびえる山頂、大地の目覚めを思わせる日の出、山と谷にたたく雲の映像。この番組のために作曲されたヴァイオリンと津軽三味線、そして和太鼓のアンサンブルが流れると感動が胸いっぱいに広がった。山と音楽がよく合っている。

番組では美しい日本の山々の映像を見せながら「あなたのおすすめする山はどの山ですか」と問う。答えるのは著名な俳優や女優、登山家などである。名峰の条件は「なんといっても高い山」「高さでなく屋久島や尾瀬のように縦走路を長く楽しく歩ける山」「雪解けの広大なカールいっぱいに咲く花や高山植物がある山」「すがすがしさに心洗われる信仰の山」とおのおのに対する思い入れを語っていた。

私は名峰の条件など考えなくても良いと思っている。これらのことすべてを感じながら歩いていると思うからだ。山に登る前には安全を心の中で念じ、帰りには元気な活力に満たされる。山は私にとってすべて名峰だ。



湊 沢 飯島 和子

## 夢の途中

飯島 和子

キリスト教の信者でもない私達は聖ヤコブ（キリスト十二使徒の一人）の遺骸が安置されている、スペインの北の果てにあるサンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼路をひたすら歩く計画を立てた。山歩きが好きな二人は単純な好奇心で、フランスとスペイン国境のピレネー山脈を越え総距離800KMもあるルートをし、どこを切り取って歩くのか、全行程を歩くと若者でも40日間は掛かると云う。

サンチャゴ巡礼は徒歩や馬で100KM以上、自転車でも200KM以上を達成した人に、巡礼証明書『クレデンシアル』が発行される。スタート地点での巡礼宿で、御朱印帖にスタンプを押してもらい、最終地、サンチャゴまで歩いたら、証明がもらえる。折角歩くのだから、是非とも手に入れたい、そう考えての計画ではあったが……

季節・装備・日程・ルート・言葉の問題など計画は決して甘いものではない。歩程200KMで計画してみよう。途中交通の便の悪い町はバスで通過し、是非寄りたい町村をリストにあげる。宿泊は修道院・巡礼宿・ユースホステル・安いホテル……と計画が進んで行く。

丁度その頃旅行会社のツアーでサンチャゴ巡礼の旅の企画があり、下見も兼ねて参加した。但しスペインだけで行きたいピレネー山脈は予定なし。バスで巡る路のここかしこに帆立貝のマークがあり、車窓から巡礼者が大きなリュックを背負い長い杖を持ち、首から貝殻をぶら下げて歩いているのが見えて、感動で胸が一杯になった。

巡礼とは？ 罪を悔い改めて天国に行けるように願う、又自分の地位名誉のため、そして単なる娯楽・好奇心の人等、いろいろの人生を背負ってひたすら歩く。帆立貝は巡礼のシンボルである。身につけていると巡礼者同志国籍・男女・老若を問わず仲良くなり、情報交換も出来る。又その土地の人達からも何かと優遇してもらえる。昔も今も貝は『新生、再生』を意味している。巡礼を終えた者は新しく生まれ変わり、人間が大きくなる…… とか。

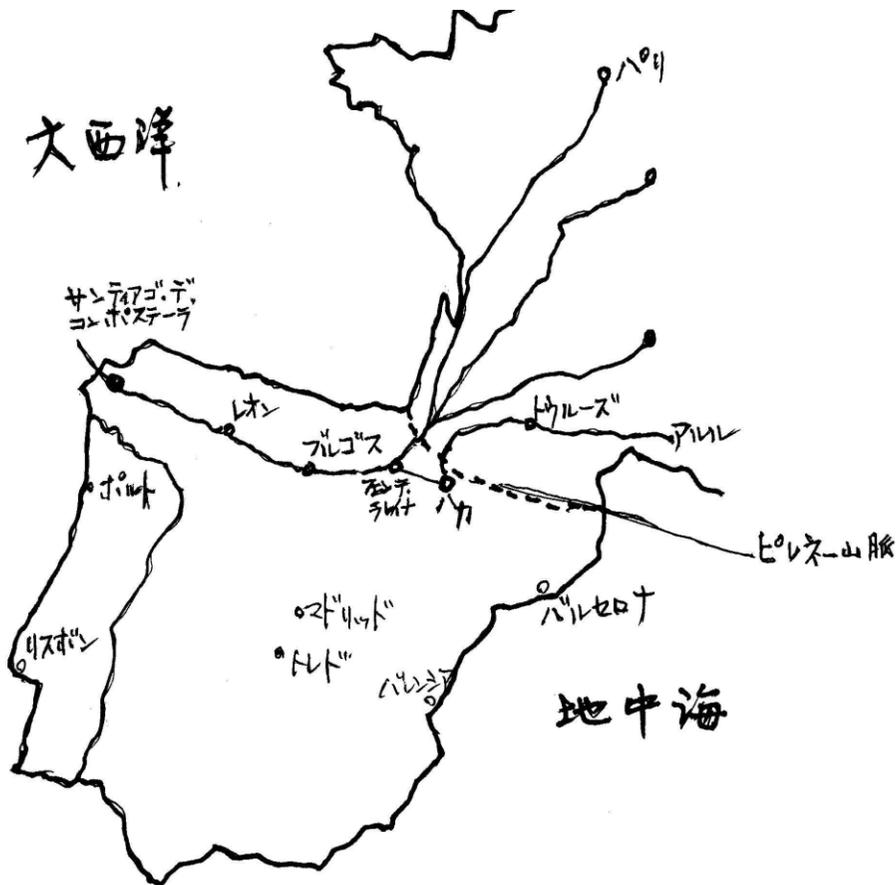
計画を練れば練るほど、ピレネー山脈の村々でゆっくり歩き回ろうかなんて、楽な考えに走ってしまう。スペイン観光局に行き、路線バスの時刻表を揃えたり、自分の足

腰を鍛えたりと忙しい内に時間が流れた。おおよその予定は9月半ば頃より15日間と立ててみた。往復の航空券と一泊目の宿の手配、二日目は寝袋を背負って何処の宿になるのかな……。少しずつ実感が湧いてきた。同行の山友とは一度だけ北海道の山歩きで、ヒッチハイクに成功したことがあった。

あれはヒグマの臭いがした芦別岳を下山した時だったが、スペインでは無理だろうな……。きっと。

そんな計画の最中に私の父親の容態が徐々に悪化し、看病のきも無く親の死と向き合い、予定を延ばさなければならなくなった。

夢は叶うものと信じている。でも、あまりゆっくりしてはいられない。タイムリミットが近づく私達なのだから……………。



# 思い出の山々

## － テクテク てくてく 北から南まで －

鎌田 善子

横浜支部に入会して四半世紀になります。支部の人と入会前に桧岳に登った。前日に降った雪がとても美しく楽しい山行だった。その次は笹子の雁ガ腹摺山に登った。麓から雪があり、急坂を滑りながらも結構楽しみつつ登った。山頂より少し下ったところで昼食、皆で温かいラーメンを作って食べたのを思い出す。縦走するつもりだったが、雪が多く登ってきた道を帰ることにした。朝踏み固めた道はひどく滑り、ブレーキが効かず尻餅ばかり。その帰り三崎方面に帰る会員の方から、横須賀線の車中で「今度は支部会員になって、また一緒に登りましょう」と誘って戴いたことを思い出す。すぐに支部会員になって、初めての伊豆ヶ岳から数えて今日まで何回の支部山行に参加したのでしょうか。

丹沢山塊は大山の南稜や北尾根、日向薬師から見晴台を越えて大山へ雪の中を登ったり、宮ヶ瀬から長峰南山、華巖山等計画に入らないが、のんびり山野草を眺め、山菜を楽しみながら登った山々です。

入会后始めて3泊の山行に参加した。北アルプスの太郎兵衛平から笠ヶ岳まで。計画の時には8人も申込者がいたのに結果は4人。折立からはたゞたゞ樹林帯を、草尾根を登るばかり。草花や池塘が慰めだったが、整備された階段は歩きにくい。疲れた頃薬師岳が大きく迫り、一登りで太郎平小屋。翌日は太郎山から双六岳を目指したが、三叉路で予定を変更し三俣山荘へ。黒部五郎のカールで遊び過ぎたな。黒部五郎小舎でもまた一休み、うなじに西日を受けて登った時のきつかったことを思い出す。山荘に着いて飲んだコーヒーの美味しかったことと、夕食にステーキを食べた記憶がある。翌朝早立ちして、笠ヶ岳に向かう。双六池の辺には黒百合が群生していた。秩父平がとても暑くきつかったこと。秩父岩の前に、抜戸岳の稜線にキヌガサ草や紫の深山リンドウの群落を見た。寝転んだり、写真を撮ったりと、山旅3日目の疲れた体には、とても癒される暫しの稜線漫歩だったが、笠ヶ岳山荘が見えた頃は疲れも最高、やっと、ようやく到着、と言う感じだった。その夜は星空が美しく素晴らしかった。翌朝笠ヶ岳に登り、ご来光を拝み、クリヤ谷を下る。「危険・禁止」の表示もあって、

今までの登山の中で最もスリル感のあった急激な下りだった。錫杖岳を右に下っても下っても、下り甲斐のある下り。槍見温泉にようやく、やっと着いた。

また烏帽子岳から双六岳までに参加した。北アルプス三大急登と言うブナ立尾根は7時間登りっぱなし、小雨が降ってきつかった。その前に南アルプスの仙水峠から早川尾根を歩き、広河原に下る足慣らしを済ませては来たのだが……。夕方、烏帽子小屋の前で眺めた虹と夕焼けは、実に素晴らしいものであった。翌日は雨の中、野口五郎岳を越えて水晶小屋に泊る。次の日は水晶岳を往復。ブロッケンがいつまでも消えない。鷲羽岳の手前でリーダーがメロンを食べさせてくれた。鷲羽池を下に眺めつつ山荘に下った。あと一頑張り、三俣蓮華岳から流れて来る水で、冷やした海草サラダの昼食。岩稜帯の道を双六山荘まで行き泊る。最終日は鏡平、わさび平を経て新穂高温泉に下った3泊4日の山旅でした。

北アルプスでは3泊4日は最低の所要日数、太郎兵衛平～薬師沢～雲の平～高天原温泉～太郎兵衛小屋まで。燕岳～大天井小屋～西岳を通過して槍の肩の小屋、翌日槍に登り、氷河公園に遊び横尾まで。燕～常念岳～涸沢へ、パノラマコースを屏風の頭から徳沢に抜けて上高地へと、支部山行に参加することが多かった、と振り返る。

個人山行も支部の方達と、常念岳～大滝山、剣沢～仙人池を経て阿曾原へ、水平歩道を通り樺平までを2度歩いた。徳本峠から新島々まで、桂の木が真黄色に黄葉した道を下り、岩魚留小屋に泊って帰った。私だけかも知れないが、北アルプスに入り始めると、限り無く北アルプスづいて、同じ山でも何回も登る。白山に行くと3年も通い、御嶽山に、木曾駒、空木、越百に、南木曾の山にも登る。白山は、加賀禅定道を下ったことがある。暑い日で水場が無く、歩いて歩いてやっと下山、岩間温泉に辿り着いた。露天風呂から見た星がきれいだったこと、宿のお婆さんが唄ってくれた民謡など、胸が痛くなって来る程懐かしい思い出である。

白馬岳から蓮華岳、雨の中を朝日岳～蓮華温泉まで。平成13年白馬岳から天狗の小屋に泊り、前と後ろを助けられながら不帰のキレットを越え、唐松岳から八方尾根を下ったことがある。いい年をしてと反省しきりだが、これを最後にしようと思ひ必死の覚悟であった。八方尾根の花がきれいで、生きている喜びを、恥ずかしい程に、じーんと感じた。懲りずに翌週友人と八方尾根に登り、唐松岳の小屋に泊り、五竜岳まで行って、遠見尾根を下ったことがあった。その翌年有山さん達と、鹿島槍に急に登る計画を立てた。種池山荘に泊り、翌日の夜、冷池山荘で赤岩尾根のスライドを見

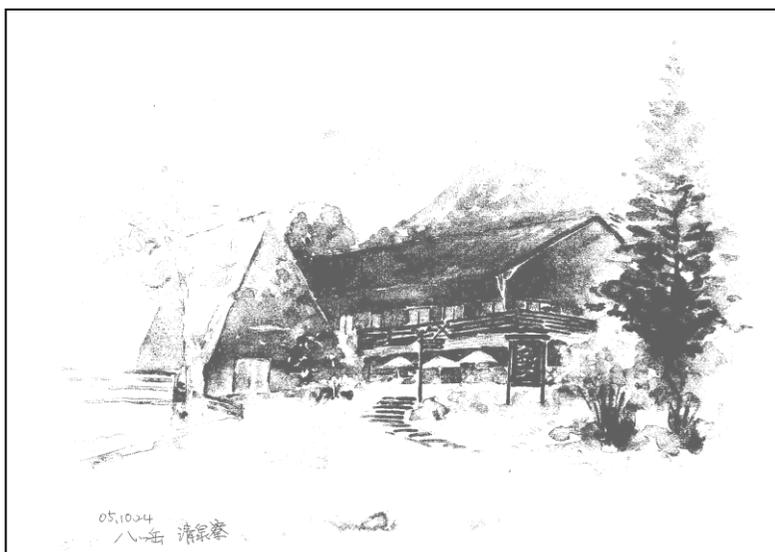
たが、危険な処ばかり。でもその翌日赤岩分岐に来た時、気をつけてここを下って見ようと一決。思っていたより不安も無く下山出来た。そしてその翌年有山さんと、五竜に登り、遠見尾根を下った。その秋には、有山さんと鳳凰三山を歩き、白鳳峠から広河原に下った。

東北の山々にも行き始めると、やはり良く出掛けたものである。岩手山には何回も登った。入山禁止もあったし、風の強い時もあった。岩木山、栗駒山、真昼岳、八幡平、蔵王、船形山、葉山、仙台神室、山形神室、面白山に大東岳等々。そして、朝日連峰、飯豊連峰、吾妻連峰、佐渡の山、日光の山々、奥秩父の山々、九州は久住の山、阿蘇の山にも何回も登りました。荒島岳は私の日本百名山の百山目になったので、元支部の会員だった人に一緒に行ってもらい、山頂で「冷たい水」で祝っていただき、喜んでもらったのは、もう8年も前のことだ。

北海道から屋久島、宮の浦岳までテクテクてくてくと、実に良く歩いたものである。

北から南まで良き仲間にも恵まれたからこそ、長い年月歩き続けられたのである。今は体調を崩して山行も出来ず、山行記録や写真を見て振り返って居るが、登れる時に「ガムシャラ」に登り、歩いておいて、良かったとつくづく思う此の頃である。

支部の繁栄をたゞたゞ祈るのみ。



八ヶ岳 清泉寮  
飯島 和子

## 古 参

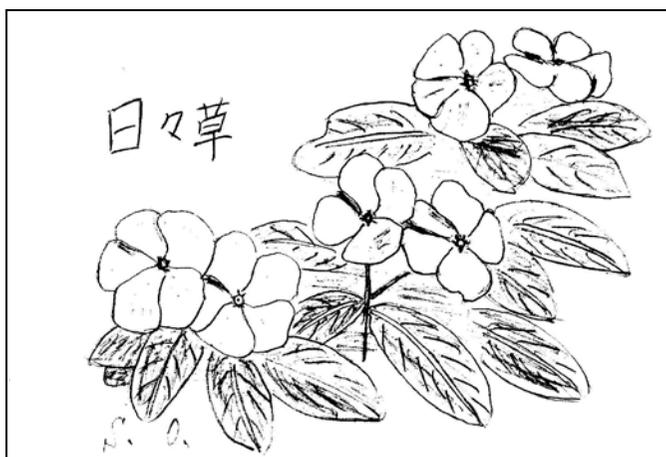
横山 勝利

古くから名簿の二番目。もうほとんど知らない人ばかりに・・・・・・  
でも、一緒に歩いてくれた人達が現在活躍されている事は、嬉しい限りです。  
古いだけで何もしないのは、心苦しいが、仕事と山がなかなか昔のように、両立  
できなくなってしまい残念。 体力、気力とも限界などとは思っていない・・・・  
考える事に問題ありかも。

東に福寿草が咲いたと聞けば見に行く。節分草も・・・・。  
いつの間にか自分が過去見向きもしなかった山々に足を向けている。  
新しい発見もあり楽しんでます。 行ける時に、あの山、この山、登っていて  
良かった。荷も担げたし気にもならなかった。機会があればと思いつつ、また  
日々が替る。

我が家から天気の良い日は、大山と富士山が良く見える。冬の澄んだ日には、  
南アルプスまでもが見える。そしていつも思う。  
初冬の富士を登った記憶が、山の厳しさ、怖さを、美しさが。

何事もなく楽しい山行を続けること、当たり前がなかなかむずかしい。



岡野 達

# 私の赤線病

齋藤 郁夫

この題名から文章の内容が、不謹慎で不潔な内容のものではないのか？と思われるのが、普通の中高年の日本人であると信ずるが、「山屋」である皆さんは思わずニヤリとされるのが、これまた普通の山の好きな「山屋」ではないかと思う。

そう、これは地図の上に辿ったルートに赤鉛筆（最近サインペン？）でなぞって行き、自分のトレイル（足跡）を繋げて行くことを、楽しみとしてきた、私の病歴と現状を、拙い文章に纏めたように思いつき、書くことにしたものである。

当初（昭和30年代）は全く発病を自覚することなく、社会人となつての初めての1958年（昭和33）の5月の連休時に、未だビーナスラインなどの発想すら無かった、美ヶ原～霧ヶ峰～蓼科山を歩いた時に、このウイルスに感染してしまったらしい。その後世帯を持ち子供が生まれるまでは、計画性も無く手当たり次第に、遠近の山をさまよひ歩き、小さな山の会にも属して、沢登り、岩場の基礎訓練、テント泊など様々な山の楽しみ方を味わっていた。30代前半から40歳になるまでは、山を休業として、仕事と家庭に打ち込んできた（？）つもりだ。

40歳の夏休みに約10年振りの北アルプスの立山、剣岳を単独で歩き、その後も北アルプスに通いながら、赤線病も徐々に進行してきた折、仕事で静岡市に単身で赴任。定年まで2度で通算約6年間、地の利を生かしての南アルプスにはまり、ますます重症になって、意識的に地図上の赤線を繋げるようになっていた。

その間に八ヶ岳や、中央アルプスにも足跡を印し、いつしか日本海～太平洋までを極力稜線伝いに歩き繋げることを夢見る、もはや赤線病患者としては末期的な重症となつてしまっていた。別に期限を設けず、順序も北へ辿ろうが、南へ下ろうが、要は自分の足で歩き続けるという点にのみ、拘りを持ちながら、スローペースでその達成を目指してきた。

歩いたコースを羅列しても、無意味なので概略のみとするが、北は親不知～梅海新道、後立山、裏銀座～槍・穂高、徳本峠から松本平を横断し、冒頭に記した美ヶ原に繋げ、北・南八ヶ岳。その山麓を歩いて釜無川を渉り、南アルプスには甲斐駒の黒戸尾根から入り、仙丈ヶ岳、塩見・赤石・聖・光岳と主稜線を経て、寸又川林道へ下り、

大井川沿いに現在はダム湖底に沈んでしまったルートを辿り、山伏岳から奥安倍の山々を南下して、静岡市北部の竜爪山へ。最後は初冬に清水市の高山から三保の松原＝羽衣の松へと市街地を歩いて辿りついた。この時私流の日本海から太平洋までの足跡を、繋げるというささやかな目標が達成できたので、火照った足を冷たい駿河湾（太平洋）の海水に浸して、ビールをあおったのは当然のことであった。この親不知～三保の松原間の詳しい距離は、計算していないが直線で結んでも、南北で250KMあり、東西へのはみ出し、山道での曲折などを考慮するとざっと350KMはあるのではないだろうか。

詳しい距離はいずれ、2万5千分の1図の関連部分を購入して、マップメーターを使って、算出してみたいと思っている。

生来のだらしなさと怠慢のため、当初は記していたコースタイムや、当時の地図（前半は単色の5万図）が殆ど行方不明で、惜しいことをしたと後悔をしているが、救われるのは全行程で必ず写真を撮っており、（当初は白黒写真）ネガ、またはカラースライドが多数手許にあるので、時系列でのデータ（最低でも、山行年月日、歩いた範囲など）の整理も、足腰が弱ってきて山から足を洗わざるを得ない時期が到来したなら、実施したいとは考えている。理想としては写真とそれから思い出される事柄を、アルバム形式で整理・保存をして置きたいものである。

今思い出しても、やはり最も印象的なのは、北端の白馬岳から親不知までの、長くかつ暑かったロングトレイルだ。後半は疲労と猛暑でバテバテ状態で親不知海岸のホテル到着、缶ビールを購入し、空身で海岸に向かい、登山靴を脱ぎ捨て、晩夏の日本海の冷たい海水に膝まで浸かりながら飲み干したビールの爽快感は、いまだに喉に焼きついている。この後予備日を利用して佐渡ヶ島に渡り、ユックリと過ごし、美味しい魚介類、地酒、観光会館での佐渡オケサ、相川音頭の踊りなどの観光も、厳しく辛かった山歩きの印象に加わって、忘れられない思い出でとなっている。

ついでには、南アルプス南端の茶臼～光岳經由寸又峡温泉までのコースである。テントを背負い、錦秋の畑薙ダムから入り、鹿の鳴き声を聞きつつ単身テントで寝た仁田池、光岳から降り立った柴沢で、林道に張ったテントから仰いだ見事な星空、最終日の気の遠くなるような寸又川温泉までの長い林道の見事な紅葉。最終バスの時間を気にしつつ入った温泉、3日振りに飲んだビール、の開放感と、長い行程を歩き通せた

満足感は、今でも鮮明に脳裏に刻み込まれている。

若い時から通算して約40年、実質30余年かけての成果は、何も形としては残っていないのだが、我が青春の、否人生の大きな部分を、占めていることには間違いは無い。今まで66年間生きてきたが、これと言って世間様にも企業にも、お役にたてたことは思い浮かばないが、反面、特に迷惑も掛けずに済んできたはずで、極めて平凡な生活の繰り返しであったことは、胸を張って言える。

せめてこの日本中部横断完歩に関しては、他の方達とは変わったルートで、やり遂げた山好きな変人が、ここにもいると主張することを、お許し願いたいと思う。

さて、一旦は完全に抹殺できたかに見えた赤線病ウイルスが、昨今また活発に活動を再開してきたようである。支部に入会して、早6年が経過し、今年は創立50周年と言うことで、今春、僭越ながら「県内の山50山」を提案し、認めてもらえた。

私の出す「支部山行計画」の殆どが、これらの山々を対象としている。50山の全てを完登済みでは無いし、身近な県内の山や峰を、季節を変えて再び、否、何度目でも、更に登りたいと考えているからで、丹沢の主な尾根は、若い頃から長年かけて既にトレース済みではある。西は不老山から東は日向薬師に連なる稜線は、完全に赤線で繋がっている。

だが、しかし、私には若い頃から果たせなかった夢のような計画がある。

それは丹沢山塊の地図を広げていただければ、明瞭であるが、西は三国山から北上し、山梨県との県境の山々を東に辿り、丹沢主稜に連なり、蛭ヶ岳で主脈コースを併せ、塔ヶ岳からは表尾根をヤビツ峠へと下り、大山へ登り直し、日向薬師へ下山する長大なルートである。三国山の前に不老山～湯船山を追加、また大山から更に高みを南下して、浅間山、高取山を経て鶴巻温泉にと繋がるルートを加えると実に大規模な縦走コースと成りうる。取りあえずは、このコースの完歩を意識して、細切れ状態で、順次歩き繋げたいとの思いで、現在の支部山行計画に取り組んでおり、そして、何年後かの想定は不可能だが、支部の旗をリレーしながらの一气通関方式で、歩き通してみたいと、夢のような事を考えている。

40年程前に私が夢見た頃とは、道路・交通事情、山麓の宿泊場所、通信手段など

も大きく変化し、特に避難小屋や、テント利用を前提として考えなくとも、時間さえ掛ければ可能ではないかと、暇にあかせて、あれこれと勝手気儘に検討（否、妄想？）している状態である。今回の症状が、昔の発病時と異なっているのは、各種情報の入手が容易になったこともあり、安易に歩けるに違いないとの妄想や錯覚、思い込みが、病症に加わってきたことであり、正に年寄りの冷や水現象で、「要注意状態」と少しは自己分析を、行っているつもりではいる。

しかし、このように目的を意識して山歩きに取り組むのは、悪いことではない。何年か前からの、百名山やら何百名山も同様のことと、私は受け止めている。

私は、今後この「丹沢長大縦走」と言う、夢物語と一緒に追いかけてくれる物好きな仲間の出現を期待しており、それが現実となれば実に嬉しいことであるが、私に残された、持てる気力・体力の許す限り、「県内の山50山」の完登と、再発してきた「赤線病」の治療・克服（？）に対処すべく、丹沢山塊を主とした山歩きへの取り組みを、マイペースで、かつ、積極的に続けて行く所存である。

追って

最近になって、既刊の「羊歯」第29号（1993年＝平成5年3月発刊）に、現在も会員として活躍中の 茂木 武 さんが「歩く日本横断に挑戦」と題して、投稿されているのを、拝見する機会がありました。

氏は持ち前のエネルギッシュなスピードで、白馬山麓の猿倉を早朝に歩き始め、その日の15時には朝日小屋へ着き、翌日は梅海新道を親不知海岸まで、極めて短時間で歩かれたようで、正直なところ驚きました。

私は後年同じ時期に、白馬大池小屋を早朝に出て、三国境から白馬岳山頂を往復したものの、4日間掛けてようやく、日本海に辿り着けたのですから・・・。

横断に用いたルートは私とは異なるものの、同じ目的を達成なされた先輩がおられることに、大いなる感銘を受けているところです。

# 避難小屋に泊ろう

春日井 孝行

私は今から45年程前の若い頃、もちろん日帰りのハイキングから山を始めた。次いで、ちょっと遠出をとり、当時は夜行日帰りの山行が大人気で、ご多分に漏れず私も、新宿23時55分発の列車に大分お世話になったものだ。座席に座れなくても、通路に窮屈に座り、あるいは座席の下に潜り込んで横になって寝て行く、4等寝台のぜいたく気分もよく覚えている。両夜行の強行軍も何回かやったが、若いから出来たことと今では懐かしい思い出だ。

さて、その次は山中に泊る山行へと進んでいき、今は全く見ない横長のキスリングに衣食住を詰め込んでのテント泊り山行ばかりとなった。それこそ、日帰りや夜行日帰りは10回に1回ずつくらいになっていただろう。

当時は、テント泊りが当たり前のこととっていたので、営業小屋にも避難小屋にも全く目をやることがなかった。小屋に泊る人達を、うらやましくも思わなかったし、「テント生活の方が面白いよ」と優越感を持っていたこともない。ただ、我々とは違う人種と、ぼんやり見ていただけだった。それと、登山は若い人達の遊びで、小屋に泊っているのは30歳か35歳を超えた、一風変わったおじさん達と見ていたのかも知れない。

その後、細々と山歩きを続け、いわゆる中高年になって、世の中は昔の逆、山には若人は来ず、おじさん、いや、特におばさん連中が押し寄せて来たのを実感した。山仲間も昔からのメンバーは極めて少なくなり、新しい仲間との泊りは営業小屋しか出来ないことを知り、その上、自分の体力、気力の衰えも自覚、自然と楽な営業小屋泊り山行へと移行していったのである。

小屋泊りのいいところは何か？

八ヶ岳・赤岳頂上小屋に泊った時に実感したのは、「ここは、絶好の宿泊地、だが幕営禁止。でも泊れるのは小屋があるお陰」との、ちょっとひねくれた感想である。もう一つは、やっぱりテントの弱点の裏返しになるのだが、「テントで一番嫌なことは、雨、特に風雨の中でのテント設営・撤収」、これから逃れられるのが小屋泊りの良さとなろうか。

営業小屋の悪いところは何か？

多分誰もが第一に指摘するであろうギュー詰めの混雑だ。あとは私の、これまたひねくれた感想になるが、「山小屋らしからぬおいしい食事」と銘打って吹っかけられる高額料金である。こうなると、テントの方がいいかなとなってくる。

そこでテント、営業小屋の両方のいいところを拾って出てきた答えは、そうです！お待たせしました、それが本題の「避難小屋泊り」なのである。

避難小屋泊りと言うと、ある種の偏見をもって受け取る人がいる。私にしてもそうだったが、避難小屋という呼び名がいけないと思うのである。避難小屋は、多分どれもが都道府県の管理下にあるものである。どこだったか、一度問い合わせたことがある。「避難小屋は緊急避難時にしか使ってはいけないのか？」と。答えは「原則としてはそうですが、通常時に使ってもらっても一向に構いません。皆さんの税金で建て、管理しているものですから。もちろん他の県の人でも結構です、お互い様ですから。避難小屋というより、単なる無人小屋と考えてもらっていいです」という旨のものだった。

そう言えば、避難小屋のガイドブックも出ているではないか。また避難小屋と言っても夏場は管理人が入っているのもあるし、無人で使用者は料金をあとで送付してくれとなっている小屋もある。前述した通り、私が避難小屋に泊り始めたのは最近のことで、その数は至って少ないが、ぜひ皆さんもご利用あれと、ご紹介する次第である。おいしいつまみを作ったの避難小屋での酒盛りは最高ですよ。

### ★丹沢の避難小屋★

- ・犬越路避難小屋／05年12月に建て直されたばかりの、2重ガラスの窓、天井付き、水洗トイレ付きで、一番に推薦します。（水場はないので、持参を要す。私は、06年1月に早速訪れた。雪があるので水の心配はなしだったが）
- ・菰釣山避難小屋／ここも水場はない。雪の季節に2度泊っているが、朝夕の散策に頂上に登れば、富士山が目の前にデーンと構えている。
- ・一軒屋避難小屋／大滝沢に流れ込んでいる鬼石沢の脇に建っているの、水はふんだんに使える。ここに泊って、1日目に地獄棚、沖箱根沢の滝見、翌日は鬼石沢の滝を見、中川温泉へ下山する途中で箱根屋沢、悪沢の滝見をする。山北町立「ぶな

の湯」に浸かって帰る、中川川滝見ツアーに便利な小屋。

- ・黍殻避難小屋／雪の季節に泊った。水洗トイレ付き、ストーブ付きだったが煙突が詰っていて使えず。緑の季節、紅葉の季節の主脈縦走にお勧めの小屋。
- ・哇ヶ丸避難小屋／頂上直下に建つ。雪の季節に利用。トイレ、ストーブ付き。
- ・実はまだ泊ったことがないのが、加入道山山頂の避難小屋。いつかそのうち。

### ★奥多摩の避難小屋★

- ・雲取山避難小屋／奥多摩の避難小屋は、どこもトイレ付きで助かる。頂上直下に建つ。雪の季節に2度泊った。大きな小屋で、寒さは厳しい。
- ・三頭山避難小屋／ムシカリ峠に建つ大きな小屋。小屋脇のベンチから富士山の眺めを楽しめる。真冬、小屋の中で水が凍った。三頭大滝は結氷していた。
- ・酉谷山避難小屋／窓ガラスが大きく明るい小屋。水は小屋脇を流れている。酉谷山はもちろん、天祖山や長沢背稜から雲取山に登る時に使える小屋。
- ・御前山避難小屋／ここも窓ガラス大きく明るい小屋。水は小屋脇にあり。6月下旬、海沢探勝路の下りは良かったがその下の長い林道歩きで暑さにバテる。
- ・鷹ノ巣山避難小屋／樹林の中の落ち着いた小屋。トイレは別棟になっている。
- ・一杯水避難小屋／寒い時季に2度泊った。2度目、ストーブが新しくなっており、煙突も掃除されたのか新規の物になったのか燃えが良く、快適だった。
- ・（冬はここが最高と言っていた鋸山・大ダワ避難小屋は撤去され、もうない）

### ★他の山城の無人避難小屋★

- ・八幡平「陵雲荘」／八幡沼のほとりに建つ小屋で、山スキー用か、気密性抜群の作り、高性能ストーブ。（7月に泊ったのだが、夜は冷えた）
- ・八甲田「仙人岱ヒュッテ」／仙人岱湿原の中、湧水・八甲田清水の傍に建つ。
- ・袈裟丸山「塔ノ沢避難小屋」／樹林中、水場近く、02年改築のお勧めの小屋。
- ・女峰山「唐沢小屋」／6月に泊る。志津乗越から、途中で沢水を汲んで登る。
- ・大菩薩連嶺「湯ノ沢峠避難小屋」／クリスマス山行時泊る。（寒かった）
- ・大菩薩峠「賽ノ河原避難小屋」／9月単独行。扉無く、ツェルトで塞ぐ。
- ・「巻機山避難小屋」／04年度改築、公称40名宿泊可、バイオトイレ付き。
- ・（谷川岳・肩ノ小屋は03年6月に泊ったのを最後に、今は有人化されている）

## 近 況

星野 喜美子

新ハイ横浜支部創立50周年おめでとう御座います。

私は「羊歯・45周年記念号」に「山行の思い出・その後」を書き、その中で「50周年まで生きているかな、憎まれっ子世にはばかる」そのとおり今も変わりありません。

さすが七十路半ばを迎え、若い皆様方とはご一緒できませんので、主人と二人で大山へ登ったり、家の近くの「四季の森自然公園」に、以前は片道1時間、今は2時間を掛けて行き、一日のんびりと折々の風景を楽しみ、池の鯉や亀、アヒルなどの生態を観察しています。先日は産卵のため池からあがって、道を横切り斜面の草地でうずくまるアヒルの卵を狙って、数羽のカラスがいたので、私たちもアヒルが可哀そうと思い、立ち止まり見守ることとしました。

しばらくするとアヒルは産卵を諦めたのか池に戻り、カラスも飛び去り、私たちも歩き出す、こんな馬鹿みたいなことをしています。

それでもまだまだ少しは歩けますので、出来る限りは支部山行にも参加させて頂きたいと願っております。

そして、横浜支部の更なる発展をお祈り申し上げます。

平成18年11月3日 記

# マップの思い出

御園 培博

登山用の地図（題名はマップとしましたが、本文では敢えて地図とします）といえ  
ば、日地出版社の「登山・ハイキング」または、昭文社の「山と高原地図」シリーズ  
が一般的だが、これらのシリーズものが出版されるようになったのは、昭和30年代  
の後半で、それまでは地理調査所（現在の国土地理院）発行の五万分の一（二万五千  
分の一は昭和30年代になってから）が頼りであった。

ところで、私が山に登りだしたのは、昭和25年の10月、箱根金時山が最初であ  
る。そして、山頂から見た丹沢山塊の大きさに魅せられ、翌年の4月、四十八瀬川勘  
七沢を遡行して塔の岳山頂に登ったのである。これが私の登山暦の1ページでありま  
す。その後、月に2～3回、丹沢の沢登りに明け暮れる一方、冬はスキー（スキーは  
昭和41年のシーズンで休止）、夏は八ヶ岳、北ア表銀座、後立山縦走、さらに南ア鳳  
凰三山、甲斐駒、北岳等・・・次々と足跡を伸ばしていった。

さて、本題の「マップの思い出」であるが、こうした山歩きの際、買い求めた地図  
は、年が経るに従い、新たな道路建設、特にダム湖が完成しますと、従来あった登山  
道の改廃、山岳観光道路・ケーブル・ロープウェイの新設等で大きく変化するため、  
従来の地図では役立たずとなることから、数年或いは10数年後の再訪の際には、新  
版ものを購入している。その際、古いものは破棄しているが、どうしても捨てること  
のできない地図が今も手元に残っております。なかでも、五万分の一の「黒部」「立山」  
「白馬岳」「大町」の4組と「葦崎」「鵜沢」「市野瀬」「大河原」の4枚、合計8枚は、  
20歳半ばから30・1～2歳にかけて、登った際の思い出深い地図です。いずれも  
右書き、右読みのうえ、字体も戦前からの古いもので、例えば「山岳」の「岳」は「嶽」、  
「地形図」の「図」は「圖」、「剣岳」の「剣」は「劔」、「岳」は「嶽」、したがって「劔  
嶽」と書かれている。また当時の北アでは、まだ黒部ダムや、「立山黒部アルペンルー  
ト」も未完成で、現在のように夜行バスで目が覚めたら室堂というようなことは、夢  
のまた夢の話でありました。もちろん、現在でも北ア核心部は、変わりようもなく自  
分の足が頼りです。

一方、南アでは夜叉神峠から広河原への林道もなく、北岳は、旧夜叉神峠から鮎差  
に下り、野呂川沿いに荒川合流地点まで遡行、ここから標高差2,000mの池山吊

尾根を登ることになる。新宿を夜行で立ち、途中2泊の幕営を経て3日目にして、ようやく北岳の山頂に到達できたのであった。それが、新夜叉神峠から広河原を経て北沢峠まで南アルプス林道が開通するとともに、村営バスが北沢峠まで運行されるようになる、北岳はもちろん甲斐駒や仙丈が身近な山となってしまった。北岳は後年3回再訪したが、いずれも広河原まで車利用で、1回目が息子と村営バスで広河原へ、そして白根御池～草スベリ～肩の小屋～山頂～間の岳～農鳥岳と白根三山を縦走し奈良田へ、2回目はマイカーで、単独、早朝2時30分、自宅を出発、広河原到着5時30分、朝食後、6時に出発、大樺沢を詰め、八本歯のコルに11時10分に到着した。横浜からの所要時間は8時間20分、ところで、八本歯のコルは、前述の池山吊尾根の登路としての通過点で、当時は横浜を出て52時間目によりやく到着しており、約30年間の違いとはいえ、余りにも違いの大きさに深い感銘を受けたのを、今でも鮮明に覚えております。もちろん池山吊尾根を登った時は、大樺沢からのルートはありませんでした。

3回目は新ハイ横浜支部の仲間と白根御池～二股～八本歯のコル～山頂へと、それぞれコースを変えて登っている。そして、4回目の広河原もマイカーで入ったが、この時は、女房と二人で、甲斐駒ヶ岳と仙丈ヶ岳を登るため、広河原で村営バスに乗り替え、北沢峠へ、その日のうちに甲斐駒ヶ岳を往復し、北沢峠で1泊、翌日、千丈ヶ岳を往復し、その日の22時には帰宅している。

このように、林道や山岳観光道路が山奥や山頂付近まで完成すると、地図は大きく変化し、以前の地図はお蔵入りとなるか、廃棄される運命にある。しかし、前述のとおり、地図による思い出だけではなく、山が人の手により、形を大きく変えていくたびに、地図そのものも、価値を失っていくことに、何かいたわりの気持ちが生じるのは、私だけでしょうか。

いずれにしても、今回は、前述の8枚の地図の思い出に時間を費やしましたが、他にも八ヶ岳や奥秩父など、古い地図が数枚残っており、何時かまた暇を見つけて、思い出に浸りたいと思っています。

※ 今回の「羊歯」発行は、支部結成50周年記念号ということで、私の歩き初めの頃の思い出を綴りましたが、これまで、新ハイ及び横浜支部の仲間の皆さんに、支えられ歩み続けることができましたことを、深く感謝申し上げます。

## 夏の三陸縦断列車『リアス・シーライナー』の旅

ごいしかいがん    ごようさん    じょうどがはま  
碓石海岸—五葉山—浄土ヶ浜

熊谷 松治

昼運行の普通列車として、走行距離日本一（400.4km）の三陸縦断列車「快速リアス・シーライナー」が、7月30日から期間限定で、仙台—八戸間を直通で運行されることを知った。私は鉄道マニアではないが、岩手県内陸部の江刺市で生まれ、昭和23年19歳で郷里を離れたので、三陸地方を旅する機会などなかった。いつかはこの地を訪ねてみたいと思いつつ、その機会もなく過ごしてきた。横浜へ来て、中年を過ぎてから山登りを始めて、『五葉山』にも何時かはと思っていた。今年7月に前記の臨時列車のことを知り、急に行く気になった。

東北新幹線で行き、仙台から快速「南三陸1号」に併結された2両がリアス・シーライナーで、行程は仙台—<sup>こごた</sup>小牛田がJR東北線、小牛田—前谷地が石巻線、前谷地—<sup>けせんぬま</sup>気仙沼は気仙沼線、<sup>さかり</sup>盛までが<sup>おおふなと</sup>大船渡線である。JRの乗車券は盛まで買い、1日目の宿泊を、翌日の五葉山を考え、盛か大船渡と思ったが、30日は大船渡の夏祭りとのことで、どこも満室で断られた。仕方なく、<sup>おとも</sup>小友駅前の小さな旅館を予約した。

### 1日目 碓石海岸（晴）

7月30日（土）東京6：56発の「はやて1号」で仙台8：37着。シーライナーの出る⑥番ホームで、発車式のセレモニーが行われ、先着100名に、『仙台駅出発式参加証』のカードが配られた。指定席の、私の隣には、東京から来たという、若くて、一寸グラマーな娘さんが乗ってきた。青春18キップで、友人の居る下北半島へ行くという。小牛田で東北線から石巻線に入る。窓からは仙台平野の青い水田が広がる。前谷地9：24。ここから気仙沼線で、北上山地南部の丘陵部を横断して、志津川<sup>しづかわ</sup>あたりから、三陸のリアス海岸が見え隠れする。気仙沼は、日本屈指の水揚げを誇る漁港だけに、規模も大きく、活気のありそうな様子が伺える。気仙沼で30分の停車時間があったので、改札を出て駅前を少し散策した。盛駅に12：30着。ホームで特製の「三陸弁当」を買って、待合室で食べてから、碓石海岸行きのバスに乗った。乗っていた数人の客は、地元の人らしく、終点へ着く前に、それぞれ降りて行った。

終点には広い駐車場があり、一角にご当地出身、新沼謙治の「想い出岬」の歌碑があった。レストハウスにリュックを預けて、海岸の散策を試みる。海岸に沿って赤松と黒松の混合林があり、(これは珍しいとのこと)その中を、遊歩道が縫っていた。海岸はおおむね絶壁で、岩峰の小島が点在していて、ウミネコが独特の泣き声で群れていた。大船渡博物館裏の松林には、ヤマユリの群落が見られ、甘い芳香を漂わせていた。宿は小友駅前にとってあるので、帰りのバスを細浦駅前で降り、一駅戻って小友に17:06に着いた。駅前の小旅館の客は私一人で、夕食の新鮮な海の幸と、女将さんの素朴なもてなしは、心温まるものであった。

### 2日目 五葉山 (晴)

実は表題のタイトルで、『新ハイ』06年7月号(No, 609)に投稿しましたが、規定字数をオーバーしていることと、山以外の記述は省くとの、編集部の意向で、単に「五葉山」として、この部分のみ掲載されたので、ここでは、省略致します。

### 3日目 宮古・浄土ヶ浜 (晴)

五葉山から盛駅に戻り、2日目の宿、磯鶏の民宿へ向かって、三陸鉄道南リアス線を北上した。3日目の朝、宮古へは宿の近くからバスの便もあったが、三陸鉄道完走にこだわり、磯鶏駅から宮古まで鉄道を利用した。駅前から奥浄土ヶ浜行きのバスに乗り、ターミナルビル前で下車。ここから出る観光船は、濃霧の為欠航とのこと。この時期は、暖かい海水が冷たい気流に触れて霧が発生するので、これも景観の一つだという。観光船乗り場へ下りて行き、磯伝いの遊歩道を、奥浄土ヶ浜まで歩いた。崖の各所にスカシユリであろうか、赤いユリが咲いていた。霧は晴れそうもなく、バスでも一緒だった、定年退職後という、名古屋から来た男性と一緒にターミナルビルまで戻った。彼は18キップでこれから遠野へ寄ってから帰るとのこと。

私は、宮古駅で弁当を買って、11:18発の北リアス線・久慈行きを待った。この北リアス線は、<sup>たろう</sup>田老、<sup>ふだい</sup>譜代などの漁港を繋いで<sup>くじ</sup>久慈に5分遅れて着いた。ここからはJR八戸線なので、乗車券と八戸からの特急券を買って、八戸行きに乗り換えた。14:55発の『はやて20号』にはどうにか間に合って、ホッとした。東京着18:08着、少し忙しい老人の一人旅であったが、何とか予定通りの2泊3日の旅を楽しむことが出来た。

(2005年7月30日～8月1日歩く)

# 浦田さんの思い出

鎌田 善子

栗の木洞で初めて逢った。優しい眼の美しい人でした。何故、なぜなの？、たゞたゞ悲しさだけが湧いて来るばかり。でも良い思い出をいっぱい残して下さった素敵な人でした。

あの日新潟から湯沢の奥の清津峡に遊び、2年前に浦田さんと来たことを懐かしく思い出し、病に臥している浦田さんにお土産を買い、家に帰ったのが夕方4時。FAXが入っていた。「浦田さんが亡くなりました。何回もTELしましたが…、5時に戸塚駅に集まります。」頼角さんからだった。息も止まる思いで、そのまま戸塚駅に急いだ…、信じられない思いで……。

小さな山も、大きな山もいっぱい御一緒しましたね。貴女は何気なく遠くの山を眺めたり、草花を見たりしながら、遅れる私を待っていて呉れましたね。浅間山に登った時、岩屑の3歩登って2歩下るような道を、真夏の暑い日、3歩歩いて深呼吸、3歩歩いて休み、とても苦しかった山でした。「苦しいね」と話し掛けると、「私だって苦しいのよ」と、一緒に休んで呉れた。宮之浦岳の帰り、トロッコ道の上で、皆が疲れて休んだ時に、山を越えて持って来たアンコの餅を作って下さった。おいしかったね。開聞岳では黒玉をそっと下さった。韓国岳では暗くなり、えびの高原の宿舎に二人で一緒に入りましたね。四尾連湖から三方分山を経て精進湖まで、一日中富士山を眺めながら歩きましたね。篠井山から思親山も御一緒しましたね。荒島岳から白山、御母衣ダムから長良川を越え、名古屋に出て帰ったこと……。福島の山々、御嶽山、白山、北八ヶ岳の縦走も、七面山から八紘嶺までも、思い出は懐かしいです。月日が過ぎるごとに貴女の優しさが身にしみます。北アルプスの高天原の帰り、2週間後に乗鞍岳から白骨温泉に行きましようかと約束し、楽しみにしていたが、中止になってしまった。白骨温泉は浦田さんの夢でした。それから、浦田さんは病に倒れ、逝ってしまわれた。

悔やまれる日々が続いた。そして2年後、有山さん達と浦田さんの写真を持って追悼山行として、乗鞍岳に登り白骨温泉に2泊して浦田さんの思い出を語り、残念でしたが供養の登山を果たした。人の一生は儚いもの、登れる時にいっぱい山に行きましよう。後でとか、今度などと言わずに……。

# 藪さん さようなら

丹下 友恵

藪さんの入会は平成7年11月より山行の記録がありますが、正式な入会は8年の1月でした。以来同じ根岸線を利用していましたので親しくさせていただきました。

17年度の会報担当として支部長より懇請され、1月の川越の七福神廻りの時、澤野さんの指名なら仕方ないと言われていたこの山行が貴方と一緒に最後の歩きとなりました。

思い起せば支部山行の他にも個人山行で色々な所に行きましたね。楡形山のアヤマは花盛りでしたが弁当の時に虫が多かったですね。小池さんと三人で登った赤岳、貴方の足の速かった事、又塩の道最后の大網峠越えでは途中残雪が多く、どうしても道がわからずに引返しました。再度挑戦して完走を約束していたのに貴方は先に逝ってしまいました等数多くありますが、ハイライトは北岳でした。足の弱い私の為にマイカー利用で広河原山荘と北岳山荘に2泊したので、比較的楽にあこがれの北岳に登れました。

今この追悼文を書きながらあまりにも早いお別れを深く考えているのですが、昨年2月に貴方に病院にきてと、言われて小池さんと二人でお見舞に行った時、胆汁の排出が悪く黄疸症状が長引くので会報係は無理と言われた時、奥様は既に医者より厳しい告知を受けてまだ貴方に隠されている時でした。奥様のお気持ちかばかりかと推察するのみです。退院されて小池さんが貴方と娘さんを港南台で見かけ、元気そうだったと報告を受けてその内貴方が元気に例会に来るものと信じていました。

10月より県民センターの申込方法が変わり、パソコンを利用しないと不利なので貴方に手伝って貰えないかと電話した所で重い病状を知りました。10月5日に小池さんとお見舞に行った時はもう起きるのがつらい状態でした。帰り際貴方と握手した時の太い指の感覚が今でも残っております。貴方は入院より在宅ホスピスを希望され娘さんが横浜市の小学校の先生で、6ヶ月間の介護休暇が許されている中、この休暇を利用して最愛の奥様と娘さんのたくさんの愛情に包まれて逝かれました。娘さんもこんなに父とこまやかに接したのは初めてですと言われていました。

藪さんもっと早く貴方の病状に気づかないで御免なさい。短くも充実した友情ありがとうございました。

# 過去10年の横浜支部山行実績を見る

(平成8年4月～平成18年3月)

池田 邦雄

横浜支部創立50年を迎えることになりましたが、最近の10年はどんな山を目指したのか、資料をもとに計数的に分類してみました。

参考とした資料は、記念誌「羊歯31号」(平成8年4月から平成13年3月までの山行実績)と平成13年4月以降平成18年3月までの横浜支部ニュースです。山行番号は第855番から第1478回まで。

これらの資料は、石川雅子さんのご協力によりまとめることができました。

これを10山域に区分して見ましたが、その分類方法等は筆者の任意によるものであり、支部の公式の分析ではありません。

あくまで「一個人の見解」であります。

## ○平成8年度～平成17年度間の横浜支部の山行状況分析

平成	山行計画数	うち宿泊を伴うもの	実行回数	中止回数	参加者数	延べ参加者数	一回平均参加者数	「係」の人数
8	71	21	62	9	722	1004	12	13
9	66	18	54	12	667	694	12	18
10	70	17	59	11	634	800	11	17
11	69	23	51	18	561	743	11	18
12	67	21	50	17	631	789	13	16
13	61	20	54	7	595	844	11	16
14	61	20	49	12	532	816	11	15
15	53	18	41	12	461	624	11	16
16	48	13	37	11	395	559	11	12
17	61	17	41	20	438	570	11	14
合計	627	188	498	129	5,636	7,443	11	155

### 【説明】

○山行計画が立てられた回数

過去10年間で627件、一年平均62回、うち19回(30%)は宿泊を伴う山行。山行計画は627回たてられたが、129回は天候不良その他

の理由により、中止または支部山行計画からはずれている。  
実山行回数498回、同実行率80%。一年当り平均50回。  
つまりこの10年間、ほぼ毎週1回山行が行なわれてきたことになる。  
計画回数は10年前当時と比べると徐々にではあるが減少している。

○「係」担当の状況（明細は別表）

10年間で「係」を担当した人の数38人。

この38人で627回の山行が計画された。一人平均16.5回。

「係」を最も多く担当した人119回、次いで110回、第3位56回  
計285回。この10年間は、3人の方で約45%の計画を担当してきた。

これらの方々には企画や事前調査の時間を考えると、おそらく1年中  
山行係りのことを考えておられたのではないのでしょうか。

○参加者数

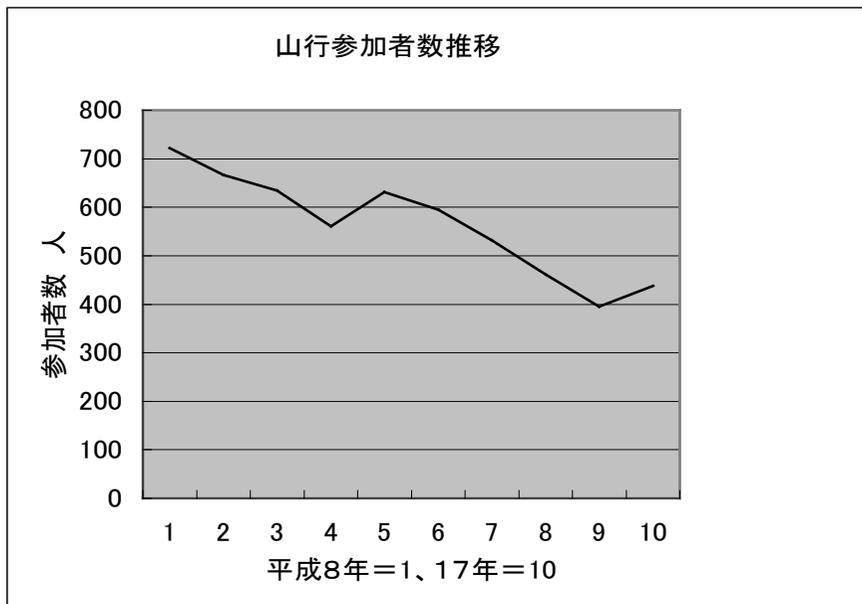
この10年間の山行実行回数498回。

参加者総数 5,636人、延べ7,443人。

一回の山行の平均参加者数約11人、

平成17年度は平成8年度比参加者数、▲40%、延人数▲44%。

年々減少傾向がみられる。



# 過去10年間に3回以上企画された山

池田 邦雄

(地域別企画回数合計 ▼)

(山域別計画回数 ▼)

<b>丹沢山域</b>	<b>91</b>	<b>回</b>	
大山と名のつく企画			10
表尾根			9
檜洞丸			6
鍋割山			5
塔の岳			6
不老山			5
高松山・ジダンゴ山			3
<b>東海道方面</b>	<b>141</b>	<b>回</b>	
箱根	23	箱根明神岳・明星岳	6
		湯坂道	3
伊豆	26	沼津アルプス	5
鎌倉・三浦	36	鎌倉と名のつく企画	9
		小網代の森	6
		荒崎海岸	3
東海道線沿線	32		0
富士山・外輪・御坂・天子	24		0
		三つ峠山	4
		籠坂峠・三国山	3
<b>中央線方面</b>	<b>156</b>	<b>回</b>	
奥多摩・五日市	32	大岳	4
甲府以前	21	権現山・扇山・百蔵山	4
甲府以遠・身延線	18	楡形山	3
奥秩父	17	甲武信岳	5
		金峰山・国師岳	4
		雲取山	3
高尾・道志	16		0
大菩薩山域	7		0
八つ岳・蓼科・霧が峰	10		0
北ア・後立山	19	穂高岳縦走	3
		立山・剣	3
		鹿島槍	3
		焼・西穂高	3
南ア・中ア	16	甲斐駒・仙丈	4
		空木岳	3
<b>中越・信越・頸城</b>	<b>25</b>	<b>回</b>	<b>0</b>
<b>奥武蔵・秩父</b>	<b>41</b>	<b>回</b>	<b>3</b>
		四阿屋、笠山・堂平山	3
		武甲山	4
<b>尾瀬・日光・足尾・安蘇山域</b>	<b>41</b>	<b>回</b>	<b>3</b>
上州	28	鳴神山	各 3
常陸・阿武隈	11	三峰山・榛名山	各 3
東北地区	40	回 岩手山・八幡平、飯豊	各 3
その他	53	回 鶴見川を歩こう・下町ウォーキング	各 3
<b>合 計</b>	<b>627</b>	<b>回</b>	

注：山域別回数＝0、とはその山域で同一目的地名で3回以上計画された山はないということ。

**EXCEL** で作成した **B-5** 横位置の表のため

別に印刷して、ページはその部分だけ

貼り付けで、製版の予定

平成13(2001)年度～18(2006)年度10月迄の支部山行実績

池田 邦雄

平成13年度 (平成13年4月～平成14年3月)

番号	実施日			山行目的地	係氏名	参加人員	
	年	月	日			人員	延人員
1195	13	4	1	鍋割山	永井	5	5
1196		4	8	御岳山 本部集中	小池	17	17
1197			14	鳴神山	茂木	6	6
1198			22	七代ノ滝とロックガーデン(雨天中止)	石原	-	-
1199			28^29	小金沢連嶺	澤野	15	30
1200		5	5	相模川を歩く	祖父川	11	11
1201			12	大山三峰	永井	16	16
1202			15	長九郎山 (本部合同)	澤野	4	4
				本部 支部		7	7
1203			18^20	御在所岳	森脇	5	15
1204			26	三つ峠山 表コース	小池	6	6
1205			26^27	国師ヶ岳～金峰山	茂木	9	18
1206			27	檜洞丸 西丹沢山開き (雨天中止)	石原	-	-
1207		6	8^9	七が岳～田代山・帝釈山	澤野	8	16
1208			3	畔ヶ丸	永井	9	9
1209			16^17	瑞牆山	芹沢	7	14
1210			23^24	本白根山～志賀山 (雨天中止)	茂木	-	-
1211		7	8	山伏峠～高指山・山中湖	祖父川	10	10
1212			14	丹沢 (夏山トレーニング)	山田進	5	5
1213			20^22	甲斐駒・仙丈岳 (雨天中止)	茂木	-	-
1214			23^24	伊吹山	飯島	9	18
1215			28^29	鳳凰三山	金本	8	16
1216		8	4	小網代の森	祖父川	7	7
1217			4^5	白砂山	芹沢	7	14
1218			17^20	立山三山と大日岳	澤野	8	32
1219			23^27	白根三山. 塩見岳	茂木	5	25
1220		9	1	丹沢ソーメン流し	永井	17	17
1221			15^17	甲斐駒・仙丈岳	茂木	6	18
1222			21^25	飯豊連邦縦走	森脇	10	50
1223			23	三方分山	澤野	11	11
1224		10	8^9	黒姫山・戸隠山	長谷川	12	24
1225			12^14	神室連峰縦走	澤野	7	21
1226			20^21	諏訪山	芹沢	10	20
1227			27	大小山 (都合中止)	茂木	-	-
1228		11	2^3	背戸俄廊～大滝山	茂木	9	18
1229			4	千年樹植樹祭と春の木丸	祖父川	10	10
1230			11	筑波山	茂木	9	9
1231			23	丹沢湖～切通峠～山中湖	小池	16	16

1232		23^24	梅が島温泉と大光山	澤野	10	20
1233		25	赤岩山～古賀志山	茂木	9	9
1234	12	1	日限地蔵から舞岡公園	熊谷	16	16
1235		8^9	伊豆ナコウ山～離れ山 (忘年山行)	澤野	32	64
1236		16	寺家ふるさと村	木滑	12	12
1237		23	三浦富士～武山	茂木	22	22
1238	14	1	5 倉岳山	熊谷	18	18
1239		12	小田原七福神	澤野	22	22
1240		20	鎌倉アルプス	小池	16	16
1241	14	1	27 引地川を歩く (本部合同) 本部	祖父川	2	2
1242		2	3 鷹落場 (雨天中止)	木滑	-	-
1243		9	下町ウオーク	永井	16	16
1244		10	神山	茂木	11	11
1245		16	大坊山	澤野	14	14
1246		23	仙元山～畠山	長谷川	11	11
1247	3	2	鎌倉	芹沢	14	14
1248		16	塔の岳～大倉 (雪の日)	小澤	9	9
1249		9	高水三山	永井	1	1
1250		10	石尊山・深高山	澤野	17	17
1251		16	草戸山・本沢梅園	熊谷	4	4
1252		21	日の出・金毘羅尾根	永井	5	5
1253		24	篠井富屋連峰	茂木	12	12
1254		29	カタクリの里～嵐山 (雨天中止)	熊谷	-	-
1255		31	総持寺・生麦事件	佐野	14	14
			合計 61 実行 54 中止 7		595	844

平成14年度 (平成14年4月～平成15年3月)

番号	実施日			山行目的地	係氏名	参加人員	
	年	月	日			人員	延人員
1256	14	4	2	一碧湖～さくらの里 (本部合同) 本部	澤野	14	14
				支部		9	9
1257			6	沼津アルプス	小澤	8	8
1258			7	カタクリの里～城山 (雨天中止)	祖父川	-	-
1259			8	花まつりの鎌倉山・極楽寺	熊谷	8	8
1260			14	越上山 (本部集中) 本部	佐野	1	1
				支部		18	18
1261			21	黒富士・太刀岡山 (雨天中止)	茂木	-	-
1262			26	ヒカゲつつじの坪山	澤野	7	7
1263			28	天ぷら山行	永井	10	10
1264	5		6	スマレの下小澤～陣馬山	祖父川	5	5
1265			5^7	赤目四十八滝・室生寺	澤野	13	39
1266			18	大山北尾根 (雨天中止)	長谷川	-	-

1267		19	古峰が原・三枚石	茂木	7	7
1268		25	権現山	小池	18	18
1269	6	7^8	禿山と虎毛山	澤野	15	30
1270		15^18	白木峰・袴越山と氷見観光	平野	14	56
1271		22^24	国師岳～甲武信岳	茂木	7	21
1272		29	浅間山 (火山活動中止)	澤野	—	—
1273	7	13	岩櫃山	茂木	14	14
1274		14	菰釣山 (雨天中止)	祖父川	—	—
1275		20^22	西穂高岳～焼岳	金本	9	27
1276	8	1^4	鳥海山と出羽三山	平野	6	24
1277		8^10	吾妻連峰と秘湯めぐり	澤野	11	33
1278		14	丹沢権現山の火祭り (百八松明)	祖父川	6	6
1279		24^26	奥穂高岳 (前夜発)	茂木	8	32
1280		28^29	高ボッチ高原周辺	齋藤	4	8
1281		30^9/1	五竜岳～鹿島槍ヶ岳～爺ヶ岳	小倉	3	9
1282	9	1	御坂黒岳	澤野	13	13
1283		21^22	平標山～三国山	茂木	7	14
1284		18	鎌倉・面掛け行列	祖父川	9	9
1285		28	石割山～大平山 (雨天中止)	小池	—	—
1286	10	5^6	恵那山～馬籠宿 (前夜発)	茂木	11	33
1287		13	片倉城址から絹の道	祖父川	9	9
1288		17^18	金峰山・国師岳 (都合中止)	齋藤	—	—
1289		25^26	鶏頂山	澤野	18	36
1290		27	倉岳山～高畑山	芹沢	6	6
1291	11	9^10	荒船山・鹿岳	茂木	14	28
1292		16	鷹落場 (本部合同)	本部 小池	9	9
				支部	18	18
1293		22^23	十枚山と青笹山	澤野	8	16
1294		23	大楠山	芹沢	14	14
1295		24	石裂山	茂木	8	8
1296		29^30	竜ヶ岳・雨ヶ岳	齋藤	3	6
1297	12	1	梅の木尾根 鐘ヶ岳	熊谷	5	5
1298		7	鍋割山	小澤	—	—
1299		14^15	伊豆高根山 忘年山行	小池・澤野	16	31
1300	14	12	23 殿平	茂木	19	19
1301	15	1	5 唐沢～佐野大師	茂木	13	13
1302		11	太田七福神めぐりと金山	澤野	10	18
1303		18	竜爪山	小池	7	7
1304		22^23	三ツ峠山 (都合中止)	齋藤	—	—
1305		26	三戸浜から油壺	祖父川	10	10
1306	2	8	長瀨アルプス～宝登山	小澤	15	15
1307		15	山の手ウォーク・東京モクから代々木	祖父川	13	13
1308		21^22	入笠山 (都合中止)	齋藤	—	—
1309		22	松田山～寄 (河津桜の花見)	熊谷	17	17

1310		23	満観峰 (雨天中止)	澤野	—	—
1311	3	8	養山～大霧山 (都合中止)	茂木	—	—
1312		15	ダイラボー	澤野	10	10
1313		18	日光湯元温泉 (スノーシューハイキング)	岡野	6	6
1314		22	沼津アルプス	小澤	10	10
1315		29	扇山	芹沢	4	4
1316		30	引地川を歩く 泉の森～福田	祖父川	15	15
			合計 61 実行 49 中止 12		532	816

平成15年度 (平成15年4月～平成16年3月)

番号	実施日			山行目的地	係氏名	参加人員	
	年	月	日			人員	延人員
1317	15	4	6	車山 (都合中止)	岡野	—	—
1318			8	弘明寺から寶生寺へ (花祭り)	熊谷	5	5
1319		10	11	天子ガ岳～長者ガ岳 (都合中止)	齋藤	—	—
1320			13	妙義山	井上	15	15
1321			13	十国峠 (本部集中)	澤野	15	15
1322			19	横須賀しょうぶ園～大楠山 本部	熊谷	13	13
				(本部合同) 支部		14	14
1323			20	三筋山 (雨天中止)	澤野	—	—
1324			27	鬼ガ岳・雪頭ヶ岳	芹沢	12	12
1325			29	経ヶ岳～三増合戦場	小池	9	9
1326	5		10	高川山東尾根と天神峠	瀬角	6	6
1327			17	倉見山	熊谷	4	4
1328		9	10	鳴神山と根本山・熊鷹山 (都合中止)	澤野	—	—
1329		23	24	草津高原周遊と芳ヶ平から草津へ	澤野	4	8
1330			31	檜洞丸ツツジ新道 (雨天中止)	小澤	—	—
1331	6	6	8	蔵王連峰	澤野	15	45
1332			16	男体山	岡野	1	1
1333		6	7	那須岳	齋藤	4	8
1334	7		6	菰釣山 (雨天中止)	祖父川	—	—
1335		20	21	早池峰山	井上	9	18
1336		25	27	焼岳・笠ヶ岳 (雨天中止)	金本	—	—
1337			27	貴船まつり と真鶴半島	祖父川	20	20
1338	8	7	9	甕岳と黒伏山、杳蔵山	澤野	9	27
1339			10	小網代湾 アカガニ 放仔見学 (雨天中止)	祖父川	—	—
1340			23	三つ峠	岡野	6	6
1341		29	31	針ノ木岳～蓮華岳	金本	9	27
1342			31	そうめん流し	石原	17	17
1343	9	12	14	飯綱山・高妻山 (都合中止)	長谷川	—	—
1344		13	15	木曾駒ヶ岳～宝剣岳～空木岳	金本	4	12
1345			20	額取山 (雨天中止)	澤野	—	—

1346		29 <sup>^</sup> 30	日光白根山（都合中止）	齋藤	—	—
1347	10	5	山神峠と秦野林道	祖父川	9	9
1348		11 <sup>^</sup> 12	会津駒ヶ岳～大杉岳	金本	9	18
1349		17 <sup>^</sup> 19	那須連邦縦走	澤野	8	24
1350		25	雁が原（日向山）と尾白川溪谷	芹沢	5	5
1351	11	1 <sup>^</sup> 2	高田山・石尊山・水晶山	澤野	10	20
1352		8	大菩薩嶺	岡野	3	3
1353		8 <sup>^</sup> 9	物語山・小沢岳	茂木	5	10
1354		22	ヨコハマ開港の道を往く 本部	熊谷	11	11
			（本部合同） 支部		17	17
1355		30	熱海玄岳～函南（雨天中止）	長谷川	—	—
1356	12	13 <sup>^</sup> 14	箱根駒ヶ岳第一歩道（忘年山行）	澤野	22	44
1357		20	石割山～大平山	岡野	5	5
1358		23	奥多摩 日の出山（おでん山行）	茂木	16	16
1359	16	1	4 蓬莱橋と千葉山	祖父川	10	10
1360		10	青梅七福神	澤野	15	15
1361		25	熱海玄岳～函南	長谷川	9	9
1362	16	2	7 満観峰	澤野	13	13
1363		15	世付の百万遍念仏	祖父川	18	18
1364		21	本仁田山	茂木	13	13
1365		28	秋葉山	小池	3	3
1366	3	6	仏果山と高取山 本部	芹沢	14	14
			（本部合同） 支部		21	21
1367		13	沼津アルプス	服部	14	14
1368		20	戸倉城山	茂木	10	10
1369		27 <sup>^</sup> 28	弥彦山・角田山	山田和	10	20
			合計 53 実行 41 中止 12		461	624

平成16年度（平成16年4月～平成17年3月）

番号	実施日			山行目的地	係氏名	参加人員	
	年	月	日			人員	延人員
1370	16	4	4	箱根湯坂道と長興山（雨天中止）	祖父川	—	—
1371			8	浅草観音と柴又帝釈天	熊谷	4	4
1372			11	さいたま県民の森（本部集中）本部	澤野	12	12
				支部		—	—
1373			17	大霧山	茂木	16	16
1374			20 <sup>^</sup> 21	守谷山と霧訪山	澤野	12	24
1375	5		8	伊豆ヶ岳	茂木	11	11
1376			15	大山三峰山	服部	8	8
1377			15 <sup>^</sup> 16	七面山と身延山	岡野	6	12
1378			22	父不見山	小池	10	10
1379	6	4	5	山伏岳・高松岳・小安岳（泥湯三山）	澤野	15	30

1380		6	湯船山と不老山（雨天中止）	祖父川	—	—
1381		12	笠取山（雨天中止）	芹沢	—	—
1382	7	4	菰釣山から道志村へ	祖父川	12	12
1383		10	薬師岳・夕日岳・地藏岳（雨天中止）	茂木	—	—
1384		24	富士山・お中道	波多野	12	12
1385	8	4^8	聖岳～光岳 縦走	金本	8	40
1386		14	小網代湾 カニの放仔	祖父川	13	13
1387		121^23	越百山-南駒ヶ岳-空木岳（雨天中止）	茂木	—	—
1388		127^28	駒ガ岳・牛形山	澤野	8	16
1389	9	4^5	谷川岳	岡野	5	10
1390		11	榛名天狗山	茂木	9	9
1391		11^12	本沢温泉～天狗岳～峰の松目	長谷川	3	6
1392		18^20	焼岳・笠が岳	金本	5	15
1393		23	額取山（雨天中止）	澤野	—	—
1394		25^26	雲取山～飛龍山（都合中止）	茂木	—	—
1395	10	2^3	太郎山	芹沢	9	18
1396		16^17	秋田駒が岳～乳頭山	金本	8	16
1397		16^17	大菩薩～牛の寝通り	澤野	8	16
1398		23	笠山～堂平山	茂木	10	10
1399	11	2^3	鳴神山・根本山～熊鷹山	澤野	8	16
1400		7	三国峠～籠坂峠	祖父川	6	12
1401		13	榎の木山～倉戸山（中止）	長谷川	—	—
1402		21	鐘が岳・梅ノ木尾根	熊谷	11	11
1403		25	朝日山-ナコウ山（本部合同）中止	澤野	—	—
1404		28	鎌倉北山と獅子が谷	熊谷	18	18
1405	12	4	裏鋸山（都合中止）	小池	—	—
1406		11^12	観音山・登り尾（忘年山行）	澤野	27	54
1407		23	鷹取山	茂木	25	25
1408	17	1	鳶尾山と八菅神社	熊谷	3	3
1409		8	川越七福神めぐり	澤野	13	13
1410		9^10	明神が岳と丸山	長谷川	7	14
1411		15	三崎チャッキラコと諸磯遺跡	祖父川	15	15
1412		22	伊予が岳から富山	小池	12	12
1413	2	20	桐生吾妻山	茂木	9	9
1414		26	森戸川から二子山	山田和	8	8
1415	3	5	聖峰・高取山（本部合同）中止	芹沢	—	—
1416	17	3	城峰山	茂木	12	12
1417		26	奥沼津アルプス	熊谷	17	17
			合計 48 実行 37 中止 11		395	559

平成17年度 (平成17年4月～平成18年3月)

番号	実施日			山行目的地	係氏名	参加人員	
	年	月	日			人員	延人員
1418	17	4	2	琴平丘陵	茂木	8	8
1419			10	堂平山 (本部集中)	芹沢	11	11
1420			15	日向薬師の火祭り	祖父川	14	14
1421			16	大山三峰山 (中止)	金本	—	—
1422			23	茅が岳	芹澤	16	16
1423		5	7	迦葉山 (中止)	山田和	—	—
1424			14	榛名富士～烏帽子岳	茂木	5	5
1425			21	笹子雁ヶ腹摺山	熊谷	6	6
1426			28	雷電山	鶴巻	8	8
1427		6	4	霧降高原と赤薙山(中止)	澤野	—	—
1428			5	湯船山～不老山(中止)	祖父川	—	—
1429			11	塔の岳 (中止)	岡野	—	—
1430			18^19	山形 葉山・杳蔵山	澤野	12	24
1431			25	黒檜山	茂木	8	8
1432		7	2^3	笠取山	芹沢	8	16
1433			7	大磯海岸から湘南平(中止)	祖父川	—	—
1434			16	楡形山(中止)	山田和	—	—
1435			16^17	雨飾山	茂木	15	30
1436			29^8/2	飯豊連峰主稜縦走と大日岳	金本	7	35
1437		8	14	丹沢弘法山の火祭り	祖父川	4	4
1438			20	そうめん山行(水棚沢出合付近)	石原	14	14
1439			22^26	奥穂高岳 (都合中止)	齋藤	—	—
1440			26^27	安達太良山	澤野	6	12
1441		9	3	今倉山～二十六夜山	鶴巻	14	14
1442			8^9	八ヶ岳・峰の松目	長谷川	6	12
1443			10^12	火打山～妙高山 (中止)	茂木	—	—
1444			11	鉄砲木の頭から三国山 (中止)	祖父川	—	—
1445			16^19	荒川三山～赤石岳	金本	6	24
1446			17	大蔵高丸～破魔射場丸	芹沢	5	5
1447			23	天城・皮子平→天城連峰縦走	澤野	5	5
1448			25	不老山から湯船山 (中止)	齋藤	—	—
1449		10	1	大山～薬師尾根 (本部合同)	澤野	31	31
					本部		
					支部	15	15
1450			8^10	八幡平～岩手山	金本	9	27
1451			13^15	草津白根入山馬道(草津古道)	鶴巻	9	27
1452			14^15	姫神山・安家森・遠別岳	澤野	3	6
1453			22	小野子三山(中止)	茂木	—	—
1454			26^27	国師岳・金峰山(中止)	齋藤	—	—
1455		11	5	武甲山(中止)	芹沢	—	—
1456			12	行道山～天狗山(中止)	茂木	—	—
1457			19	高ドッキョウ	澤野	6	6

1458		23	鳩ノ巣溪谷	石原	3	3	
1459		26	菊花山・神楽山	熊谷	10	10	
1460	12	3	裏鋸山	小池	11	11	
1461		10 <sup>11</sup>	伊東太平山（忘年山行）	澤野	24	24	
1462		23	湘南平	茂木	26	26	
1463	18	1	5	金沢七福神	熊谷	8	8
1464	18	1	7 <sup>8</sup>	伊豆の国七福神巡り	澤野	9	9
1465		8 <sup>9</sup>	金時山・箱根山・三国山	長谷川	9	9	
1466		15	チャッキラコと城ヶ島	祖父川	15	15	
1467		21	烏場山	鶴巻	-	-	
1468		23	塔の峰から板橋地蔵尊	祖父川	4	4	
1469	2	4	天覧山・多峰主山（個人山行）	茂木	-	-	
1470		5	相模原公園～相模国分寺跡	祖父川	8	8	
1471		11	丹沢山（個人山行）	春日井	-	-	
1472		11 <sup>13</sup>	上高地へのスノーハイク（個人山行）	齋藤	-	-	
1473		25	荒崎～ソレイユの丘	芹沢	11	11	
1474		28	四阿屋山	澤野	4	4	
1475	3	4	びく石（本部合同）	本部	澤野	6	6
				支部		16	16
1476		11	金比羅山～本沢梅園	熊谷	8	8	
1477		19	高松山・秦野峠・ジダンゴ山(中止)	齋藤	-	-	
1478		25	日原巨樹の森	澤野	15	15	
			合計 61 実行 41 中止 20		438	570	

平成18年度（平成18年4月～平成18年10月まで）

番号	実施日		山行目的地	係氏名	参加人員		
	年	月			日	人員	延人員
1479	18	4	2	石砂山～石老山（中止）	祖父川	-	-
1480			9	（本部集中） 外秩父 中間平	澤野	20	20
1481			13	仙元山～畠山（中止）	長谷川	-	-
1483			16	「山開き」と塔ヶ岳	春日井	-	-
1484			20 <sup>22</sup>	熊野古道（小辺路）	澤野	15	45
1485			22	大野山～丹沢湖（中止）	齋藤	-	-
1486			29	円海山～天台山	小池	5	5
1487	5		5	鷹取山と国府祭	祖父川	3	3
1488			14	大室山～加入道山（中止）	齋藤	-	-
1489	6		3 <sup>4</sup>	額取山・川桁山	澤野	6	6
1490			9 <sup>10</sup>	北信鍋倉山～仏ヶ峰	澤野	6	6
1491			10	鍋割山+滝見（中止）	春日井	-	-
1492			17	城山町ホテルの夕べ（中止）	祖父川	-	-
1494	7		1 <sup>2</sup>	巻機山	金本	5	10
1495			7 <sup>9</sup>	白岩岳・和賀岳・真昼岳	澤野	4	12

1496		8	三浦富士～武山	足立	8	8
1497		15^16	尾瀬ヶ原と尾瀬沼	芹沢	9	18
1498		22	箒沢権現山+滝見	春日井	10	10
1499		28^30	月山	澤野	4	12
1493	8	1^2	上州武尊山 (6月から延期)	金本	3	6
1500		5^8	五色ヶ原～薬師岳	金本	6	24
1501		12	小網代湾のかにの放仔 (中止)	祖父川	—	—
1502		20^23	奥穂高岳 (中止)	齋藤	—	—
1503		27	鹿俣山	澤野	5	5
1504		27	そうめん山行(水棚沢出合付近)	石原	12	12
1505	9	1^2	栈敷山と湯の丸山	澤野	8	16
1506		2^3	編笠山～権現岳	岡野	7	14
1507		4^5	編笠山～西岳 (きのこ教室)	長谷川	8	16
1508		16	不老山～(湯船山)	齋藤	2	2
1509		16^18	越後駒ヶ岳・平ヶ岳 (中止)	金本	—	—
1510		18^19	南ア・アサヨ峰 (中止)	池田	—	—
1511		22^23	秋田駒ヶ岳と乳頭温泉 (中止)	長谷川	—	—
1512		22^23	桧洞丸、大室山～加入道山+滝見	春日井	3	6
1513		30	(本部合同) 奈良倉山	澤野	18	18
			本部			
			支部		8	8
1514	10	6^7	滋賀高原四十八池と笠ヶ岳	澤野	7	14
1515		7^8	御嶽	金本	5	10
1516		8^9	地獄棚とその他の滝見	春日井	3	6
1517		13^14	国師岳～金峰山 (中止)	齋藤	—	—
1518		15^16	鳴虫山/大真名子山・小真名子山	池田	4	8
1519		22	日の出山北尾根	長谷川	4	4
1520		28^29	50周年記念集中登山 金時山	澤野他4名	42	84
			合計 41 実行 28 中止 13		240	408

## 県内の山 50山 一覧表

支部創立 50周年の行事の一環として、県内の山を50山選定し、今後の山行の目標として、取り上げて行くこととなり、現在順次実行中です。

山 名		標高(M)	地 域	山 名		標高(M)	地 域
1	矢倉岳	870	箱根	26	丹沢山	1567	裏丹沢
2	金時山	1213	箱根	27	塔ヶ岳	1491	表丹沢
3	明神ヶ岳	1169	箱根	28	鍋割山	1273	表丹沢
4	明星ヶ岳	924	箱根	29	三ノ塔	1205	表丹沢
5	神山	1463	箱根	30	大山	1252	表丹沢
6	駒ヶ岳	1350	箱根	31	日向山	404	表丹沢
7	三国山	1102	箱根	32	大山三峰山	935	表丹沢
8	城山	563	箱根	33	鐘ヶ岳	561	表丹沢
9	幕山	615	箱根	34	仏果山	747	東丹沢
10	浅間山	802	箱根	35	経ヶ岳	633	県北
11	屏風山	948	箱根	36	石砂山	578	県北
12	高松山	801	西丹沢	37	石老山	700	県北
13	大野山	723	西丹沢	38	津久井城山	375	県北
14	シダング山	758	西丹沢	39	景信山	726	県北
15	伊勢沢の頭	1177	西丹沢	40	陣場山	857	県北
16	不老山	928	西丹沢	41	生藤山	990	県北
17	菰釣山	1379	西丹沢	42	曾我山	328	湘南
18	畦ヶ丸	1293	西丹沢	43	高麗山	168	湘南
19	屏風岩山	1052	西丹沢	44	天台山	141	湘南
20	大室山	1588	西丹沢	45	三浦富士	183	三浦
21	加入道山	1418	西丹沢	46	大楠山	242	三浦
22	檜洞丸	1601	西丹沢	47	二子山	208	三浦
23	蛭ヶ岳	1673	西丹沢	48	鷲尾山	235	東丹沢
24	袖平山	1432	裏丹沢	49	白山	284	表丹沢
25	焼山	1060	裏丹沢	50	弘法山	230	表丹沢

# 50周年記念集中登山 金時山 報告 (その1)

岡野 達

期 日 10月28日(土)～29日(日) 28日 曇り

報 告

## 1. 各登山口より金時山まで

- ①乙女峠コース 係 : 井上 忠秋  
参加者 ◎井上、茂木(夫妻)、石部、飯島、齋藤、御園、岩方、柴野、  
波多野 計10名
- ②夕日の滝コース 係 : 澤野 正明  
参加者 ◎澤野、長谷川、和久田、一丸、山崎、花島、竹尾、渡部、大川、  
柿沢 計10名
- ③矢倉沢コース 係 : 足立 忠彦  
参加者 ◎足立、熊谷、丹下、中村、山田和、谷 計6名
- ④矢倉岳～足柄峠コース 係 : 服部 八重子  
参加者 金本、依田、◎服部 計3名
- ⑤道了尊～明神岳コース 係 : 岡野 達  
参加者 ◎岡野、○春日井、小澤、和智 計4名
- ⑥乙女山荘へ直行した方  
参加者 石原、北村、鎌田、星野(夫妻)、祖父川、今井、有山、芹沢  
計9名

参加者 総計42名

# 50周年記念集中登山 金時山 報告 (その2)

井上 忠秋

## 2. (於) 金時山

各コースの到着後、全員で「祝50周年」の横断幕を囲んで記念写真撮影  
応援歌及びエール

## 3. (於) 乙女山荘

広間で全員揃って記念写真撮影

司会進行 : 竹尾

澤野支部長 挨拶 : 50年のあゆみと更なる前進を誓う。

表彰式 : 受賞者 山田 進、北村 襄、石原 弘之、熊谷 松治、  
小池 廣治、佐野 淳一郎、澤野 正明 (敬称略)  
在籍歴代支部長7名

歴史と世相を語る : 御園、星野 両会員

余 興 : 手品、かくし芸、ハーモニカ演奏、カラオケ大会

※ 祝賀記念パーティーは、忘年会を兼ねて行なわれ、39名の参加者が、酒に料理に歌にアトラクションにと大いに満足をしました。

なお、当日の清掃ボランティア作業は、燃えるゴミ、缶、ビンに仕分け5コースの登山道で回収をしました。多くのゴミがありましたが、予想を下回り、登山者のマナーが確立していることを感じました。

また、収集日の関係で宿舎「乙女山荘」がその日まで保管してくれることとなり、ご協力に感謝しております。

ゴミの総量は地元箱根町の指定ゴミ袋(50Lサイズ)で約2袋程度でした。  
皆さんお疲れ様でした。

29日 朝食後解散

# SHC横浜支部50年の歩み（小史）

熊谷 松治

年（西暦）	月日	項 目	氏 名
昭和31（1956）		支部結成	
33（1958）	4.1	より「支部会則」制定	代表 中山 博
34（1959）	11.15	支部ニュース第1号発行	編集 影山 元芳
		5月現在 会員数34名	代表 中山 博
35（1960）	4.10	第3回本部集中「川苔山」参加21名	代表 中山 博
36（1961）			代表 八田 幹雄
38（1963）			代表 小川 竜利
39（1964）	12.5-6	支部山行100回記念 「伊豆大滝温泉」	代表 小川 竜利
*41（1966）	4月～	45年（1970）3月まで	代表 影山 元芳
41（1966）		支部10周年記念山行「塔ヶ岳」集中 参加21名	代表 影山 元芳
42（1967）	11月	支部ニュース 第100号発行	代表 影山 元芳
*45（1970）	4月～	46年（1971）3月まで	代表 鈴木 国之
*46（1971）	4月～	47年（1972）3月まで	代表 竹田 明
	8.21	支部15周年記念キャンプ「四十八瀬川」 参加26名	
	9.12	支部山行200回「平標山」参加5名	係 善波・渡辺
*47（1972）	4月～	50年（1975）3月まで	代表 山田 進
*50（1975）	4月～	51年（1976）3月まで	代表 鈴木 国之
*51（1976）	4月～	53年（1978）3月まで	代表 碓 清人
52（1977）	4月	支部ニュースをハガキ版で発行	
53（1978）	3月	まで支部ニュースをハガキ版で発行	
	4月	より「支部ニュース」B5版となる	
*53（1978）	4月～	平成2年（1990）3月まで	支部長 北村 襄
57（1982）	4月	「羊歯」第26号発行（B5版・54ページ）	
59（1984）		「羊歯」第27号発行（B5版・38ページ）	

年 (西 曆)	月日	項 目	氏 名
平成元 (1989)	12月	「羊齒」第28号発行 (B5版・46ページ)	
*2 (1990)	4月	～ 7年 (1995) 3月まで	支部長 熊谷 松治
4 (1992)	11月	「支部ニュース」11月号で、第400号達成	
5 (1993)	3月	支部山行第700回「大楠山」	
		参加21名	係 芹沢 隆久
6 (1994)	3月	「羊齒」第29号発行 (B5版・76ページ)	
*7 (1995)	4月	～ 11年 (1999) 3月まで	支部長 石原 弘之
7 (1995)	5.27-28	支部山行800回「御正体山・菰釣山」	
		参加11名	係 高橋 巖
8 (1996)	10月	「羊齒」第30号発行 (B5版・52ページ)	
8 (1996)	11.16-17	支部創立40周年記念山行「塔ノ岳」	
		参加35名	係 御園 培博
10 (1998)	5.10	支部山行1000回「大山」参加35名	係 石原 弘之
*11 (1999)	4月	～ 14年 (2002) 3月まで	支部長 小池 廣治
12 (2000)	3月	支部創立45周年・支部ニュース500号記念 「羊齒」第31号発行 (B5版・64ページ)	
*14 (2002)	4月	～ 15年 (2003) 3月まで	支部長 佐野淳一郎
*15 (2003)	4月	～ 現在に至る	支部長 澤野 正明
18 (2006)	8.5-8	支部山行 第1500回「五色ヶ原～薬師岳」	
		参加 6名	係 金本 勲
	10.28-29	支部創立50周年記念集中山行「金時山」	
		参加42名	係 井上 忠秋
	12.13	支部創立50周年記念誌「羊齒」32号発行 (B5版・148ページ)	

註：年の前に\*が付されているのは、支部長の在任期間を表しています。  
(人名の敬称略)

## 編集後記

一年以上も前から会員に対して投稿文の提出を呼び掛けていたにも拘らず、10ヶ月を過ぎても目標の50%に対して20%しか集まらず、一度は失望しかかりました。その後期限が来て40%、2ヶ月延長して漸く過半数が集まり、最終的には65%もの投稿文が集まりました。今回の羊歯は初めての試みとしてカラーページを設け、書式も統一し、全てパソコンで編集しました。ページ数が従来の2倍に増え、しかも投稿文は力作揃いです。他の支部、本部に自慢できる内容、出来映えになったと自負しています。投稿していただいた支部会員、OB・OGの皆様に厚く御礼申し上げます。

(岡野)

何とか格好を付ける(デッチあげる)ことが出来て、ホッとした感じですが。不慣れのため入力ミス、漢字変換・送り仮名・段落、山名・地名表示の不統一など見苦しい箇所が多々あることと思います。原則として投稿された原文をそのまま掲載しましたが、編集担当の独断と偏見で一部分を替えさせて戴いたものもあります。掲載順序、余白スペースの使い方、文章の内容とご提供を受けたスケッチとの組合せなどでのご異論・ご不満、その他無礼・失礼な箇所も有ろうかと思えます。

これら全てを「素人編集委員達の道楽の産物」として、会員各位の大局的見地(?)からご容赦をお願い申し上げます。(齋藤)

皆さんのおかげで、すばらしい50周年記念号の羊歯が出来上がったと思っております。ありがとうございます。編集委員のおかげで先に寄稿文を読ませて頂きました。それぞれの個性と経験で、実績や思いを書き綴った内容に感動です。書くこと、描くことは何かに関心を持つことに、次への挑戦にもつながると思います。自分のパソコンの能力不足を感じた今回でしたが、学んだ事、勉強した事がありました。

嬉しいことは、諸先輩のように、これからも元気に、明るく、楽しく、山行を続けたいと決意したことです。(竹尾)

編集委員としてご活躍いただいた池田 邦雄さんから、「体調を崩して静養中につき、編集後記を書くのは遠慮したい。」とのご連絡がありました。

当初からご尽力いただいたこの「羊歯 第32号」がお手許に届く頃には、お元気になられていることと思います。(齋藤)

「あなたは横浜支部を愛していますか。」という、0さんの半ば脅迫的(?)なキーワード(殺し文句)で始まった50周年記念号「羊歯」の原稿募集はその甲斐があって、先の郵政解散並みの効果を上げ、嘗てない程の投稿が寄せられ、一体編集出来るのかいなと心配する程でしたが、各編集委員の特徴を活かした献身的な仕事ぶり、会員

の皆様のご協力のお蔭で無事発刊することが出来ました。

尚、今回投稿されなかった筆不精の会員の方々には、他の分野で支部に大いに貢献して貰いたいと思います。この横浜支部を愛しているのは皆同じだと思いますので……。

“とにかく横浜支部に乾杯！”

又編集委員のメンバーであります池田さんのも早い健康回復を、編集委員一同、心よりお祈り申し上げます。(芹沢)

この方達のご指導・ご協力・ご尽力が無ければ、この「羊歯 第32号」を発行することは不可能でした。当初の入力作業でのご協力、そして最終段階の印刷・製本作業にご参集いただいた方達のお名前を掲載することで、感謝の言葉に替えさせていただきます。(順不同・敬称略)

足立、熊谷、金本、丹下、和智、春日井、栗城、祖父川、小倉、澤野、小池、  
飯島、渡部、岩方、花島、茂木、星野、鎌田  
の諸氏  
(編集委員一同)

## 支部創立50周年行事に携わった委員会と構成者氏名

### 1. 平成18年度支部委員会

澤野 正明、 芹沢 隆久、 山田 和子、 小池 廣治、 岡野 達、  
岩方 美津子、 丹下 友恵、 依田 ふみ、 和久田 克江、  
足立 忠彦、 坂間 昌子、 金本 勲、 一丸 幸夫、 花島 幸子、  
柴野 善治

### 2. 50周年記念行事準備委員会

熊谷 松治、 芹沢 隆久、 星野 喜美子、 澤野 正明、  
石原 弘之、 山田 和子、 小池 廣治、 石川 雅子、 金本 勲、  
齋藤 郁夫

### 3. 50周年記念行事实行委員会

井上 忠秋、 服部 八重子、 石部 正子、 足立 忠彦、 竹尾 亮三

### 4. 羊 歯 第32号 編集委員会

芹沢 隆久、 岡野 達、 齋藤 郁夫、 池田 邦雄、 竹尾 亮三

註：本誌掲載の全ての記事・画像の著作権は当支部が所有しており、無断転載を禁じます。



羊 歯 第32号

支部結成50周年 記念

平成18年(2006)12月13日 発行

発行者 新ハイキングクラブ・横浜支部

澤野 正明

発行所 〒251-0022 藤沢市鎌沼2276-16

TEL 0466-23-0861

